Part1　聖書を学ぶ前に知っておきたい
基礎的な知識

01　聖書が特別な理由

アブラハム・リンカンは、「聖書は神様が人間に与えられた最高のプレゼントです。私たちは聖書から、救い主から出てくるすべての良いものを得る事が出来ます。」と話しました。聖書を読もうとする人々は、どうして人々は聖書を特別に扱っているのか、その理由について知りたい気持ちになります。まず、簡単ではありますが、聖書のいくつかの特徴を取り上げ、人々が聖書を特別に扱う理由を総合的に考えて見ます。

偉大な愛の物語

聖書はすべての知識と知恵の根本ですが、世界史や数学などの学問を教えるために書かれたものではありません。基本的には救いの歴史の記録で、神様から離れてしまった人々に、どのようにすれば神様と正しい関係を回復する事が出来るかについて教えています。聖書をよく読むと、聖書には一貫した主題があることに気づきます。それは、各々の道を歩んでいる人々を、愛着を持って帰らせる神様の姿です。神様が私たちを捜し求める理由は、神様が私たちを愛しておられるからです。ですから、神様との正しい関係は、神様が私たちを愛されたように、私たちも神様を愛する事です。

必ず守られる神様の約束

聖書は、私たちの健康を丈夫にしてくれるとか、邸宅の保証、名誉や権力を与えるとは約束していません。その代わりに、聖書は、神様の御言に従って生きると、意義ある人生になれると約束しています。次の聖句はその一例です（ヨシュア 1:8；詩篇 1:1-3；119:7-　11、119:22-24、97-105、129、130；箴言 3:1-6；第 2 テモテ 3:15-17）　。

今まで多くの人々は、大変な時に聖書から慰めと励ましとを得、希望を持ちました。聖書は、人の傷を癒し、涙を拭き取り、失意に落ちて

いるたましいを回復してくれると多くの約束があります。聖書は、私たちが抱えている問題の異面を直視し、神様の御言から助けを得させます。特に、詩篇には傷づいたたましいを慰め、痛んだ心を励ます約束が多く書かれてあります（詩篇 42；46:1-3；121）。

過去と現在、未来がすべて聖書の中にあります

歴史は、私たちがどんな道を歩み、また、どんな道へ進んでいくかを教えるだけでなく、過去の教訓を通して未来を備えるようにします。もし私たちが過去の教訓を無視したら、過去の失敗と過ちを繰り返すようになります。しかし、聖書は歴史以上のことを教えます。聖書は、過去や現在を説明してくれますが、人類歴史の最後についても多くのことを教えています。聖書を読む人は、地球や人類の最後について悟り、すべてにおいて神様が治め、導いている事を知る事ができます。

霊感を与えられる神様

本を作る事は簡単ではありません。自分だけのアイデアを用いて、それを表現する適切な言葉や文章で書き、構成やバランスを整えます。一冊の本を書くまでの労苦は相当なものです。しかし、それで本作りが終わった訳ではありません。原稿が終わったら出版社とのやりくりもあり、出版されてもその本が人々に読まれるかどうかは分かりません。このように一冊の本が出版され人々に読まれる過程を考えてみると、聖書は、本当にすばらしいものです。聖書は、2000 年間の歴史と共にし、どんな本よりも多くの人々に読まれました。それに聖書に関する多くの批判や攻撃、反論などが絶えずありましたが、なくなることはありませんでした。寧ろ、多くの人々の生活に良い影響を与え、犯罪者までもが悔い改めました。もし聖書が人々の思想を概念化した書物であったら、聖書は人々の記憶の中から去っていたでしょう。しかし、聖書は普通の書物ではありません。聖書は、神様の霊感によって書かれた神様の書物です。

第 2 テモテ 3 章 16 節の「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」という聖句は、聖書が神様の霊感によって書かれたことを明確にします。「神の霊感」という言葉は、「神の息吹による」という意味の言葉で、すべての聖書は神様の霊感によって神的権威を持つものだと教えます(第 2 ペテロ 1:20-21)。神様の息吹によって聖書の記者が聖書を書く過程は興味深いものです。聖書は、神様が願われた事を聞いた聖書の記者たちがその通りに写し書いたものではありません。神様は記者たちの個性を生かし、書き

記すようにしました。その結果、聖書は神様から出たものであると同時に、人間的な要素も持つ書物となりました。

完璧な統一性

約 40 人の多様な職業と背景を持つ人々が約 1500 年間をかけて本を完成したら、まとめのある統一性を期待することが出来るでしょうか。人々が意見を交換し合い、議論し合わない限り、統一性を求める事はほぼ無理なことです。しかし、聖書はこのような状況の中で書かれたものです。王や預言者、農夫、収税人など、さまざまな分野、年齢の人々が 1500 年もかけて一冊の本を書き終えました。しかし、聖書には完璧な統一性が保たれています。これは、聖書の著者が神様である事を明らかにし、完璧に一致した主題である、「救いに表れた神の愛」を中心に構成されています。ですから、誰でも聖書を読む人は、赦す神様の愛を見つけることが出来ます。

神の愛を伝える聖書が私たちに来るまで

旧約聖書は、BC15 世紀から 5 世紀までヘブル語で書かれました。新約聖書はイエス様がよみがえられた後から AD1 世紀までの間にギリシャ語で書かれました。現在、聖書の原文は保存されていませんが、原文を精密に写した写本は数百種類を超え、保存されています。新約聖書の中で権威ある写本は、シナイ写本とバチカン写本で AD350 年頃ものです。400 年頃書かれたアレクサンドリア写本もあります（これらはすべて博物館や図書館で閲覧できます)。AD1 世紀からキリスト教が地中海の近傍の世界まで広がる事によって、神の霊感によって書かれたと主張する偽証文書が出回りました。分別力のある教会はそれらのものによって影響を受ける事はありませんでしたが、数回の教会の会議を通して、どんなものを神の霊感による聖書とするかを決定する事にしました。それによって決められたものをカノーン(canon、ギリシャ語 Kanon、正典)と呼び、今日の聖書を意味する事になりました。カノーンには旧約聖書のすべてと、使徒たちによって書かれた福音書や書簡などの神の霊感によって書かれたことが立証された書物が含まれました。

正典する過程が進んでいる中で聖書翻訳（version）も登場しました。BC150 年頃にはヘブル語をギリシャ語に訳した 70 人訳と呼ばれる聖書翻訳が、AD400 年頃にはギリシャ語がラテン語に訳されたウルガタ（Vulgate）と呼ばれる聖書翻訳が完成されました。この時期には、コプト語、エチオピア語、アルメニア語などの多様な翻訳本が出ました。最初の英語訳聖書は 735 年に V.ベデがヨハネの福音書を英訳する事で

始まりました。日本語聖書は、フランシスコ・ザビエルが来日する前年(1548 年)にインドのポルトガル領ゴアで最初の日本人キリシタンとなった「ヤジロウ」が「サン・マテヨのエワンゼリヨ」（マタイの福音書）を日本文字で書き記したという記録はありますが、現存はしません。それで、日本語での最初の聖書の翻訳は 1837 年にシンガポールで発行したギュツラフのヨハネの福音書だと言われています。海外で聖書が訳されたのは、鎖国のためであり、鎖国が解けしだい日本伝道のためにと願っていて故です。日本国内で最初に和訳聖書を出版したのは、ゴーブルによる『摩太福音書』（1871 年）です。後に、1880 年に『新約全書』が、続けて 1888 年に『旧約全書』が完成されました。戦後の 1955 年には「口語訳聖書」が、1970 年には新改訳聖書が、1987 年には「新共同訳聖書」が出版されて今日まで使われています。

02　聖書の概要

宇宙のすべてのものは一般法則に従って動き、保たれています。創造者である神様は、広大な宇宙に秩序を持たせ、それに従わせました。ですから、神様の御言である聖書が体系的に構成されたということは当然なことです。聖書は大きく二つの部分、旧約聖書と新約聖書で構成されています。このような名前が付けられたのは、二つの大きな契約（約束）と緊密な関係があるからです。旧約聖書はモーセがシナイ山で受けた契約（出エジプト 24：8）で、新約聖書はイエス様が最後の晩餐の時に始められた新しい契約（マタイ福音 26:28）です。

さまざまな方式で書かれた一番偉大な物語

旧約聖書は、ユダヤ人の伝統に従ってモーセの律法と預言者と詩篇（ルカ福音 24:44）で分けます。しかし、今の多くの人々は、律法の書と歴史の書、詩歌の書、預言の書で分けています。律法の書は創世記から申命記まで、歴史の書はヨシュア記からエステル記まで、詩歌の書はヨブ記から雅歌まで、預言者の書はイザヤ書からマラキ書までです。また、預言者の書は、大預言書と小預言書で分けたりします。

聖書の分類

旧約聖書

- 律法の書：創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記
- 歴史の書：ヨシュア記、士師記、ルツ記、サムエル記、列王記、歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記
- 詩歌の書：ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌
- 預言者の書
  - 大預言書：イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書
  - 小預言書：ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

新約聖書

- 福音書：マタイ福音、マルコ福音、ルカ福音、ヨハネ福音
- 歴史書：使徒の働き
- パウロの書簡：ローマ書、コリント書、ガラテヤ書、エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、テサロニケ書、テモテ書、テトス書、ピレモン書
- 共同書簡：ヘブル書、ヤコブ書、ペテロ書、ヨハネ書、ユダ書
- 預言書：ヨハネの黙示録

記録年代から見る聖書

旧約聖書：創世記、ヨブ記 - 出エジプト記、レビ記 - 民数記、申命記 - ヨシュア記 - 士師記、ルツ記 - サムエル記、詩篇 - 第 1 列王記、第 1 歴代誌、雅歌、箴言、伝道者の書 - 第 2 列王記、第 2 歴代誌、オバデヤ書、ヨエル書、ヨナ書、アモス書、ホセア書、ミカ書、イザヤ書、ナホム書、ゼパニヤ書、ハバクク書、エレミヤ書、哀歌、ダニエル書、エゼキエル書 - エズラ記、エステル記、ハガイ書、ゼカリヤ書 - ネヘミヤ記、マラキ書

新約聖書：ヤコブ書 - ガラテヤ書 - テサロニケ書 - マルコ福音 - コリント書 - ローマ書 - ルカ福音 - エペソ書、ピリピ書、コロサイ書、ピレモン書、使徒の働き - マタイ福音 - 第 1 テモテ、第 1 ペテロ - テトス書 - 第 2 テモテ、第 2 ペテロ - ヘブル書 - ユダ書 - ヨハネ福音 - 第 1,2,3 ヨハネ書 - ヨハネの黙示録

新約聖書は、四つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）、歴史書（使徒の働き）、書簡（ローマ書からユダ書まで）、預言書（黙示録）で分けます。使徒パウロは、新約聖書の 13 冊を書きました。一部の学者はヘブル書もパウロによって書かれたと主張しますが、定かではありません。パウロの書簡には一定の形式があります。彼は、まず教理的な教えをした後に、その教理を実際の生活で適用する方法を教えています。

聖書は、「贖い」（神様との正しい関係の回復）という主題を中心に構成されているので、創世記から黙示録までのすべての書物は「贖い」という軌道に従って動いています。聖書学者は、新約聖書は旧約聖書の中に隠れていたものであり、旧約聖書は新約聖書により明らかにされたものだ、と話します。旧約聖書はイエス・キリストによって与えられる贖いを語り、新約聖書はそのイエス・キリストによってどのように贖いが成就されたかを語るからです。つまり、旧約聖書は贖い主であるイエス･キリストを預言し、新約聖書はその預言が贖い主であるイエス･キリストによって成就されたことを意味します。

聖書の学びに役立つ資料

・聖書の地図：聖書の地図は、新旧約聖書に言及されたすべての地名の位置を見せてくれます。聖書の地図の活用は、本文の内容に光を照らします。聖書の地名の位置だけではなく、その地域の気候、産業、歴史などの有効な情報を提供する地図もあります。聖書の辞典：聖書辞典は、聖書に出てくる言葉の意味を説明し、どこに出てくるかを教えます。

・聖書の註解：聖書の章、節、言葉の意味を細かく説明しています。原語の意味から歴史的背景、本文の意味、霊的解釈、生活への適用など多くの情報を提供します。註解書は膨大な量のもので扱いにくいですが、効率的に用いれば大きな有益を得ます。

03　最初の律法の書

法律のない世界、誰もが自分の思いのままに何でもすることの出来る社会、罪意識もなく刑罰もない世界を想像してみてください。法律のない世界は恐怖の修羅場と変わり、文明は崩壊してしまいます。神様は、罪によって汚染された人類に法律がなかったら人類の生存が不可能であることを知っていたので、聖書の最初の部分に律法の書（モーセ五書）を書かせました。

律法の書は、創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を指します。モーセが書いたことでモーセ五書と呼ばれます。この律法の書は、多くの部分が道徳的、倫理的な原理を確立しています。それで、これらは近代欧米世界の法体系の根幹となりました。これらの書物は、人類が堕落したので、神様は人類に律法を与えたことと、人類がその律法を守る事で得る有益と守らなかった時に直面する結果とを描写しています。

最初の律法の書は創世記です。創世記の理解を助けるために 3 つに分けて考える事にします。

①創造(1,2 章)

②罪と審判の始まり(3:1-11:32)

③イスラエルの歴史の始まり(12:1-50:26)

万物の始まり(創世記 1 章)

創世記 1 章 1 節は、神様の存在を宣言します。そして、神様がこの世のすべてを創造されたと教えます。すべての万物は神様の御言によって造られました。造られたものすべては神様に良しとされました。神様はすべてを造りましたが、人間の有益にために一定の順序に従って造りました。光(1:3-5)、空(1:6-8)、海と地と植物(1:9-13)、太陽と月と星(1:14-　19)、そして動物や海のもの(1:20-23)などを造った後に人(1:24-31)を造りました。

エデンの園での人間(創世記 2 章)

神様は創造を終えた後、安息しました(2:1-3)。2 章は、人の創造に関してもっと詳しい説明をします。神様は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれました。それで、人は生きものとなりました。神様は人に「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(1:28)と命じました。人間の創造において注目すべき事は、人と神様との関係です。人は神様の形によって造られたので、人には神様の品性と道徳性、感情が宿っています。人は、ちりで造られた肉体と神様の息により与えられたたましいを持っています。肉体は人を物質世界とつなぎ、たましいは人を神様とつないて、神様を知り、礼拝し、仕え、語りました。彼らが神の形を持っていたことは、後の人の子孫とは大きく異なる部分です。

神様は、人の意志を試みます。エデンの園は見るからに好ましく食べるのに良いすべての木があり、園の中央にはいのちの木、それから善悪の知識の木がありました。神様はその中で善悪の知識の木の実を食べてはいけないと命じ、食べては必ず死ぬと語ります。多くのよい木の実を食べることの出来る人にとって善悪の知識の木の実を食べないことは難しい問題ではなかったはずです。しかし、人はその戒めに従う事ができませんでした。

エデンの園で問題が発生(創世記 3:1-7)

神様に逆らった堕落したサタンは蛇の形で人に近寄りました。そして、神様の御言を疑わせ、善悪の知識の木の実を食べるように誘惑します。人は、サタンの「神のようになれる」という嘘にだまされ、神様の御言を逆らいました。人が神様に逆らったことで、彼らは純粋性を失い、平和と愛で満ちた園には罪責感と恥の雲が覆います。

●旧約における罪の概念

用語：旧約において罪を表す語は多い、おもな語は次の4種である。

①「失敗する」（士20：16）、「失っている」（ヨブ5：24）、「つまずく」（箴19：2）などと訳されているように、もともとは「的（目標）、または道をはずす」意味で用いられた一般的な語である。それが聖であり、義である神との関係においては「罪」と訳され（創4：7、

出10：17）、神が人に定められた道を踏みはずすという意味を表す。またこの語は、強情（出9：34）、神に対する反抗（ヨシ7：11）、神に対する不平（ヨブ1：22）、心の中で神をのろうこと（ヨブ1：5）、不信仰（詩78：32）などと共に用いられている。
②「曲げる」が原意で、「咎」（創4：13、44：16、出20：5、詩32：2）などと訳され、悪の行為を表す。
③「そむき」（ヨシ24：19、詩32：1、107：17）、「そむきの罪」（出23：21、詩32：5、イザ53：5）と訳される。この語は、罪が神への反逆であることを最も強く表しており、その結果なされる残虐な行為とそれに続く神の容赦のないさばきについてたびたび使われている（イザ1：28、アモ1：3 - 13）。
④「あやまち」「あやまって犯した罪」（レビ4：13、ヨブ6：24、19：4、エゼ45：20）や「迷い出ること」（詩119：10、21）と訳され、被造物としての人が持つ弱さからくる誤った行為を意味している。これら以外にも罪の類義語は多くあるが、罪を表す語はおしなべて、その状態よりも、むしろ人が思い、ことば、行為などで犯した具体的な罪の事例について語っている。

●創3章に見る罪：ここには、5節の「悪」を除いては罪を表すどんな語も出てこないし、罪を直接定義する文もない。にもかかわらず、最初の人アダムとエバの堕落物語には、旧約はおろか聖書全体において罪が語られる際に土台となっている罪の本質が示されている。
①罪はアダムとエバの堕落以前にすでに存在していた。それは、エデンの園に罪の誘惑があったことから明らかである（創 3：1）。しかし、この物語は罪そのものの起源について語ろうとしているのではなく、人類における罪の始まりについて記しているのである。最初の人への誘惑は、被造物である人間の分を越えて、創造主である神のようになりたいと思わせることであった（創 3：5）。実際、人は禁じられた木の実をもぎとることによって神の地位をもぎとったのである（参照ピリ 2：6）。それは単なる一つの犯罪行為ではなく、心の奥底における神への不従順、不信、反逆、そして神からの自立願望の表れであった。

責任の転嫁(創世記 3:8-24)

人の罪の結果は素早く来て、未だに持続するものとなりました。人は、彼らの純粋性を失い、神の形も汚染されました。そして、そのたましいが死にました。不従順が神様と人との関係を断絶したからです。彼らは、まるで犯罪者が警官を見ると隠れようとするように、神様の御顔を避けて園の木の間に身を隠しました。神様が人を呼ぶ時に、彼らは罪を認めるのではなく、責任の転嫁で言い訳をしました。しかし、それらの弁明は神様に聞き入れませんでした。神様は、蛇には「おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。」とのろい、人には「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」ことと、「土地は、あなたのゆえ

にのろわれてしまった。･･･あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。」とさばかれます。エデンの園でのよい時が終わりました。

蛇と人に対するさばきの中で注目すべきことがあります。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み砕き、おまえは、彼のかかとにかみつく。」という 3 章 15 節の言葉です。聖書学者はこの箇所を原始福音と言います。それは、女の子孫がサタンの頭を踏み砕くことだからです。ですから、サタンは女の子孫がこの世の登場しないように働きかけます。これは、旧約聖書の一つの読み方でもあります。

また、神様はエデンの園から人を追放する前に、人のために皮の衣を作り、彼らに着せてくださいました(3:21)。皮の衣を作るためには動物を殺さなければなりません。このことは、人の罪を覆うために血が求められるいけにえにつながります。

動物のささげものと穀物のささげもの(創世記 4:1-15)

アダムとエバはカインとアベルを生みます。彼らには神様に礼拝するようにと、親から教えられました。それで、カインは穀物をささげ、アベルは動物の者をささげます。しかし、神様は、動物のささげものは目を留められましたが、カインが持ってきた穀物のささげものは目を留めませんでした。それで、カインはアベルを殺します。

カインがアベルを殺した理由についてはいろんな見解がありますが、サタンの影響により女の子孫を殺したという理解もあります（参照、第１ヨハネ 3:12）。

人間の文明の始まり(創世記 4:16-26)

エデンの東、ノデの地に住みついたカインは、結婚して子どもを生みます。カインの子孫が人数も増えますが、彼らによってこの世界に犯罪も広がります。文明は発展しますが、人の良心は追いつく事が出来ずに、重婚、殺人、病的な自己愛などの堕落した文明を築きます。彼らが堕落の道へと進む時に、神様はセツという子を与えます。セツにもまた男の子が生まれます。セツはその子をエノシュと名づけます。その

時から人々は主の御名によって祈ることを始めます。

人の寿命(創世記 5 章)

現代医学の発展により人の寿命は大きく伸びましたが、歳を取れば取るほど死に近づく事は避けられません。死は、罪がすべての人々に一律で求めている通行料金のようなものです。創世記 5 章は、死んだ、死んだという言葉が続きます。当時の人々は本当に長生きしました。当時の人々に平均寿命は 907.5 才です。メトシェラは超長寿で 969 才まで生きていました。エヌクは 365 才まで生きますが、それは、彼が「神とともに歩み、神が彼を取られたので、彼はいなくなった。」からです。

ノアの箱舟(創世記 6- 7 章)

人類の文明は発展していきますが、それに伴わない道徳、倫理、霊的な面で人々は更に堕落していきます。まず、人々の堕落の深刻さが増える事で、神様は人の寿命を 120 才にします。しかし、神様はその姿を通して、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められました。それで、神様はノアとその家族だけを救い、その他はすべて破壊する事を決めます。ノアは船に関する知識はありませんでしたが、神様は彼に教えながら 120 年間をかけて箱舟を作らせます。長さ約 135 メートル、幅約 22.5 メートル、高さ約 13･5 メートルの内部が 3 階になっている船です。120 年間をかけた船作りの期間は、人々に悔い改めを求めた期間でもあります。

ノアが 600 才の時、40 日間もやむことなく雨が降り続き、地下でも水が湧き出、150 日後には世界で一番高い山までも沈ませました。世界の地形までも変えたもので、すべての生き物は死にました。

地は乾ききった(創世記 8-9 章)

アララテの山（5100ﾒｰﾀｰ）は、ユーフラテス川とティグリス谷の上段に位置したアルメニア地域だと言われています。この地域は古代大陸の中心地として理解されています。神様が意図した水による審判は終わりましたが、地面の回復には思ったよりもずっと長い時間が必要でした。しかし、ノアは忍耐をもって慎重な姿勢を取っています。まず、ノアは、任された箱船の責任者らしく責任を持って賢明な姿勢を取ります。

●参考、箱船での経過：

①6:14、箱船造りを命じる（洪水120年前）→②7:7、箱船に入る（洪水７日前）→③7:11、ノアの600才の年２月17日（この日から40日間雨が降る）→④7:23、3月26日まですべて生きものが死ぬ→④8:3、水が引きはじめ、アララテの山に止まる（洪水開始150日目、7月17日）→⑤8:5、窓から山を見る（10月1日、73日過ぎる）→⑥8:7、40日後初めてカラスを放す（11月11日）→１週間を待っても戻らない→⑦8:8、鳩を放すが戻って来る（11月18日）→⑧8:10、二度鳩を放し、若葉を持ってくる（11月25日）→⑨8:12、3度目鳩を放すが戻らない。29日をもっと待つ（12月2日）→⑩8:13、おおいをとって乾いた地面を見る。また27日を待つ（次ぎの年１月１日まで）→⑪8:18、箱船から出る（洪水開始から１年10日過ぎた2月27日、366日間の期間でした。）

②祭壇を築くノア：いけにえの意義：神様は、人類が自らの力では改善の余地がないことを知っていました。それがノアの時代の洪水の意味です。しかし、人の堕落に対する神様の審判が変わります。いけにえ以後のことですが、流される血によって贖われるということとその故にさばかれないということで、神様の大きなあわれみを示しています。

ノアの子供たち(創世記 9:18-29)

ノアの３人の子供たちセム、ハム、ヤベテの父に対する一行為（20ー23）が全民族の運命を決定するものとなりました。①セム：近東アジア文化圏を形成したセム族の先祖。②ハム：アフリカを中心とした黒人たちの先祖。③ヤベテ：アリアン族とも呼ばれたインドーゲルマン族と呼ばれる欧米中心の民族の先祖となります。全人類がノアの3人の子供たちを先祖とすることを通して、根本的に全人類はイスラエルであれ、異邦人であれ、兄弟であり、神様の権威の下で同一であることを教えます。「神は、ひとりの人からすべての国の人々を造り出して、地の全面に住まわせ、それぞれに決められた時代と、その住まいの境界とをお定めになりました。」（使徒17：26）

①ヤベテの子孫：大洪水の後この世に生存した人類はただの８人に過ぎませんでしたが、神の人間の繁栄を約束した恩恵によって人間の繁栄を見ることができます。本章はそれらのことの過程を見せながら、人類のすべて　の民族の根がノアの三人の息子達の子孫であることを明しします。まず、ヤベテは欧米中心の民族、すなわち、アリアン族、あるいはインドーゲルマン族と呼ばれる民族の先祖となりました。彼らはノアの預言通り（９：27）に、カスピかからスペインに至るまでの広い領土を得ました。しかし彼らの文化や政治は、神信仰とは無関係のも

のであって、領土の広さと人口の多さ、 知識の優越性（哲学、科学、法律、政治、軍事など）などを自慢しながら発展しました。しかし彼らは究極的には、神と無関係で生きることができず、セムの天幕に住むという預言通りに神がおられる天幕に招待される栄光を得ました。

②ハムの子孫：父親に対する不敬によって呪われた民族として記録されています。彼らは広い領土と多くの人々、そして強い体力に支えられて他の民族に負けないほどの豊かさを味わいましたが、彼らの繁栄は一時的なものであり、瞬間的なものでありました。彼らがナイル川に定着したことで、古代文明の一つを築きますが、それは神の一般恩恵によるものであって、恒久的なものではありませんでした。9：25のように兄弟のしもべになるという預言通りに、彼らは世界歴史の中でその繁栄を誇ることの出来ない民族となったのです。

●人種差別の不当性：ハムの子孫の呪いは、黒人に対する偏見をもたらせるものになってはいけません。なぜなら、ハムやカナンの呪いは、人種差別のためのものではなく、家庭の秩序の破壊、人格を無視したことに対する神の審判であるからです。堕落した人を懲らしめる神様の審判であって、人間相互間の地位や身分を決め付けるものではありません。

③セムの子孫：神様の御業を受け継ぐ民族、即ち、イスラエルのことです

さようなら、アンニョン、チャイチェン(創世記 10:1-11:26)

人々は再び繁栄期を迎えました。多くの人々はバビロンを中心に住んでいましたが、彼らは神様には関心がなく、自分たちの力で天にまで近づく事が出来ると思っていました。それで、彼らはバベル塔を造ります(11:3、人本主義の始まり)。完工の直前、彼らに神様の審判が下ります。それは、言語が分かれ、混乱の故に工事を中断させることです。結局、人々は別れれ、同じ言語圏の人々によって民族と国家を形成するようになります。

●バベル：混雑(バラル)、神の門(バブイーリ)から来た言葉で、今もマルヅク神殿のエテメナンキの塔とネボ神殿付近のエオエリミナンキ塔が残っています。しかし、本来の構造と形を知ることはできません。

04　一つの家系：アブラハムからヨセフまで

引越しが好きな人は少ないでしょう。大きな家を買って引越しすることであれば嬉しくなるかもしれませんが、転勤や度重なる住所変更は大きなストレスを与えます。アブラハムはウルという都市に住んでいました（現在のイラクの領土）。アブラハムは引越しや移住することを考えたことがありません。しかし、神様が彼に現れて移住するように命じました。アブラハムはその神様の命令に従います。アブラハムの移住は彼の人生だけではなく、彼の子孫であるイスラエルの民族にとって偉大な出来事となりました。

どこに行くのかを知らないで、出て行くアブラハム(創世記12:1-9)

アブラハムは、妻サラと父親テラ、甥のロト、奴隷と多くの家畜を連れてウルを出て、カランまで来ました。そこで、父親テラが死ぬ時まで住みます。ちょうどアブラハムが75才の時でしたが、そこから大体600㎞を移動してカナンの地（現在のイスラエル）に入ります。神様は、カナンの地に着いたアブラハムに約束を与えました。「わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」という約束です。アブラハムは、旅人のように歩んだ人でした。新約聖書はそのようなアブラハムを、「彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからである。･･･」(ヘブル書簡11:9-10)と評価しています。

私の妹ですので、妻にしても構いません(創世記12:10-20)

カナンの地に飢饉があったので、アブラハムは妻サラと共に食料を求めてエジプトへ下りました。サラの歳が65才であったはずですが、見目麗しい女だったので、アブラハムはサラを妻ではなく妹だと、エジプトの人々に話しました。エジプトの王パロはサラを見て、自分の妻とするためにアブラハムに、「羊の群れ、牛の群れ、ろば、それに男女の奴隷、雌ろば、らくだ」などを与えます。そのお陰でアブラハムは金持ちになりましたが、妻を失ってしまう結果を招きます。神様の働きによって無事に妻を取り戻しますが、パロは彼らをエジプトから追放しました。

領域の争い(創世記13、14、18、19章)

アブラハムの財産、特に家畜は牧草地に比べて非常に増えました。それで、彼は甥ロトと別れます。ロトは豊かなヨルダンの低地の町ソドムとゴモラへ移住します。しかし、そこは道徳的に堕落した町で、ロトと二人の娘だけを除いて、硫黄の火により滅ぼされます。

相続者の問題(創世記15-21章)

アブラハムは「あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの跡を継がなければならない。」という神様の約束を受けますが、86 才まで約束された子孫はありませんでした。それで、アブラハムはサラの女奴隷ハガルによってイシュマエルという子を産みます。十数年後、神様はアブラハムに現れてご自身を「全能の神」(17:1)と語り、イサク（笑いという意味の名）という子どもが生まれると約束します。アブラハムは 100 才で、サラは 90 才の時のことです。

息子と旅をするアブラハム(創世記22章)

ある日、神様はイサクをいけにえとして捧げるようにと命じました。アブラハムは三日間の旅をし、モリヤの山に辿りました。そこでアブラハムは祭壇を築き、自分の子イサクを縛り、祭壇の上のたきぎの上に置きました。刀を取って自分の子をほふろうとした時、「今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」(22:12)という神様の声を聞き、神様が用意した(アドナイ・イルエ、22:14)、角をやぶに引っかけている一頭の雄羊を捧げました。

お見合い(創世記 23-25 章)

サラは嫁を見ることなく死にました。アブラハムは彼女のためにマクペラの地を買い、私有の墓地としました。彼が所有したカナンの地はマクペラの畑地だけです。アブラハムはイサクの嫁を探すために、しもべをアブラハムの生まれ故郷まで遣わします。そのしもべは神様の導きによってリベカという女性と出会い、彼女をアブラハムのところまで連れてくることで、イサクは結婚ができます。アブラハムは 175 才まで生きました。

双子ヤコブとエサウ（創世記 25-36 章）

「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」(25:23)という神様の御告げがあった後に、イサクとリベカは双子を産みました。エサウとヤコブですが、ヤコブは悪巧みでエサウと父親イサクを騙し、長子の権利を得ます。騙されたことを知ったエサウがヤコブを殺そうとしたので、ヤコブは母親リベカの兄ラバンがいるカランに逃げます。ヤコブがベテルに着き、寝ていた時に「その頂は天に届いた一つのはしごが地に向けて立ち、神の使いたちがそのはしごを上り下りしている」のを見ます。そこで神様はヤコブに、「･･･見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」(28:15)と約束します。ヤコブは叔父ラバンのところで成功を収め、12 の息子を持ちます。12 の息子が後のイスラエルの 12 部族の始祖となります。

祝福を求める格闘(創世記 32 章)

ヤコブは帰郷の中でエサウと和解も出来ました。ヤコブはその間に神様と出会い、神様から祝福を求めて格闘をしました。その結果、びっこをひくようになりますが、ヤコブはイスラエル(神と戦い、人と戦って、勝ったという意、32:28)と改名されます。

夢見るヨセフ(創世記 37 章)

カナンの地に定着したヤコブは 12 名の子どもと安定した暮らしをします。しかし、ヨセフだけを偏愛することで、ヨセフは他の兄弟から妬まれます。ヨセフはよく夢見る者で、他の兄弟よりもすぐれた者になれるという夢のことで、その妬みは更に大きくなり、兄弟から商人に売られてエジプトの奴隷となります。

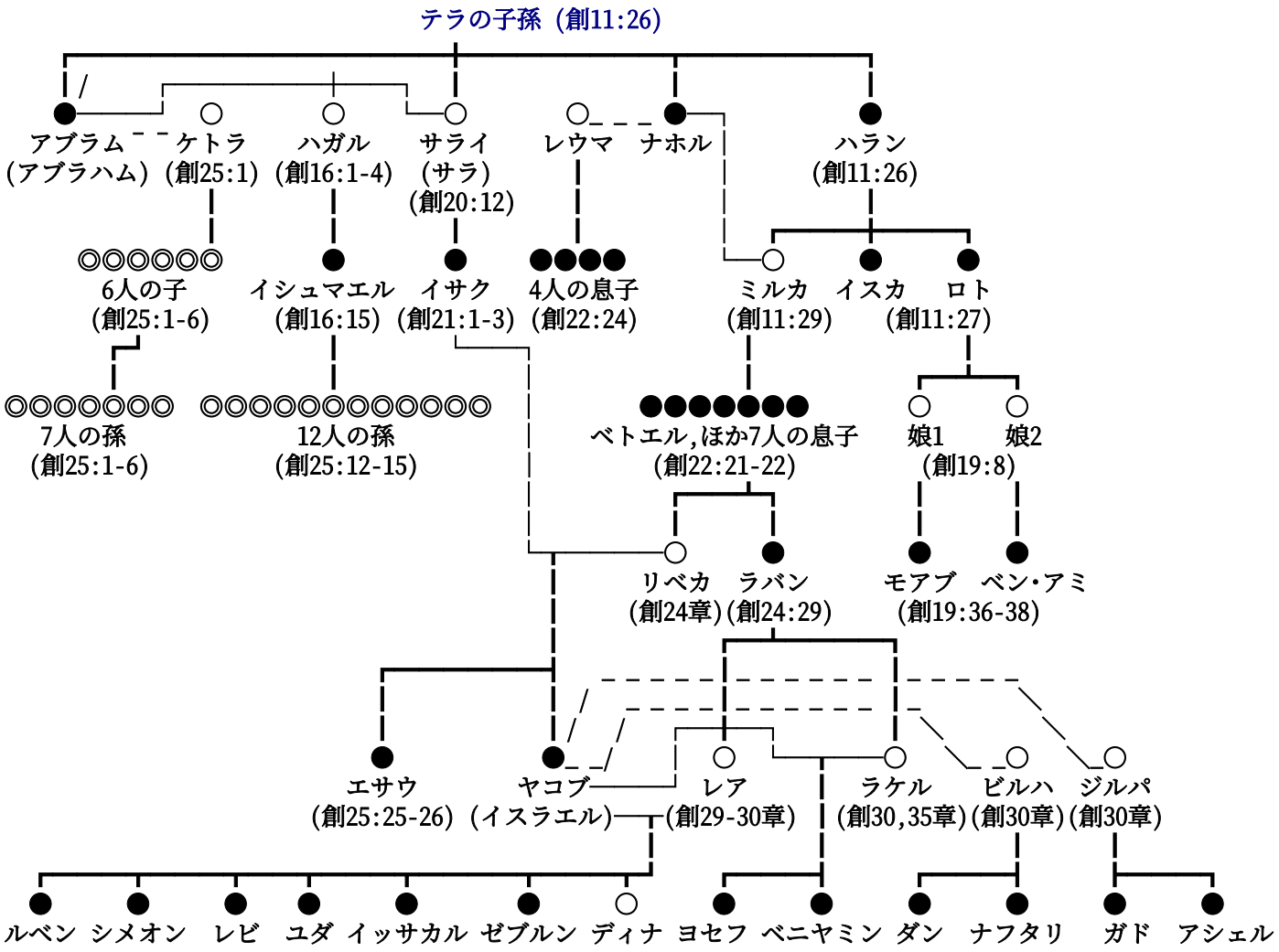
奴隷から総理へ(創世記 39-41 章)

パロの廷臣で侍従長のポティファルに買われたヨセフは、「主がヨセフと共におられたので、彼は幸運な人」(39:2)となり、ポティファルの全財産を管理するようになります。しかし、その後にもヨセフには多くの紆余曲折がありましたが、やがてパロの夢を解釈することができたことで、エジプトの総理となります。神様がパロの夢を通して示された七年間の豊作と七年間の飢饉を備えるためです。

劇的な再会(創世記 42-50 章)

七年間の飢饉はエジプトだけではなくカナンの地にまで及びました。それで、多くの人々は豊作の時に備えをしたヨセフに食料を求めて集まりました。その中にはヨセフを売った兄弟もいました。兄弟と再会できたヨセフは兄弟に、「神は私をあなたがたより先にお遣わしになりました。それは、あなたがたのために残りの者をこの地に残し、また、大いなる救いによってあなたがたを生きながらえさせるためだったのです。だから、今、私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、実に、神なのです。」(45:7)と告白し、神様の計画によって救われることを明らかにします。後に、ヤコブまでもエジプトへ連れて来て、イスラエルはゴシェンの地に定住します。ヤコブとヨセフはエジプトで死にますが、彼らの死身はアブラハムの時に買ったカナンの地、マクペラの畑地で葬られます。

アブラハムの旅程


テラの子孫（創11:26）
アブラム
（アブラハム）
ケトラ
（創25:1）
ハガル
（創16:1-4）
サライ
（サラ）
（創20:12）
レウマ
ナホル
ハラン
（創11:26）
6人の子
（創25:1-6）
イシュマエル
（創16:15）
イサク
（創21:1-3）
4人の息子
（創22:24）
ミルカ
（創11:29）
イスカ
ロト
（創11:27）
7人の孫
（創25:1-6）
12人の孫
（創25:12-15）
ベトエル，ほか7人の息子
（創22:21-22）
娘1
娘2
（創19:8）
リベカ
（創24章）
ラバン
（創24:29）
モアブ
ベン・アミ
（創19:36-38）
エサウ
（創25:25-26）
ヤコブ
（イスラエル）
レア
（創29-30章）
ラケル
（創30，35章）
ビルハ
（創30章）
ジルパ
（創30章）
ルベン
シメオン
レビ
ユダ
イッサカル
ゼブルン
ディナ
ヨセフ
ベニヤミン
ダン
ナフタリ
ガド
アシェル

05　第二と第三の律法の書：出エジプト記とレビ記

この章では、エジプトの王パロがイスラエルの子をみな殺すように命じた時、神様がどのように赤ん坊モーセを救い出し、エジプトの王子とし、そして、選民イスラエルをエジプトから救い出してくださったかを教えます。また、どうしてイスラエルの人々に律法を与え、約束の地であるカナンの地まで導いたかを教えます。モーセの生涯は、40年を周期に区別することができます。彼は40年間をエジプトの宮殿で、そのあとの40年はミデやんの荒野で、そして残りの40年は選民と共に荒野で生活しました。

新しい統治者の登場（出エジプト1章）

職場の生活の中で、上司が代わることがあります。よい上司の下での働きから意地悪上司に代わった時のように、イスラエルもヨセフやイスラエルに好意を持てた王が去り、敵意を持って接する人が新しくエジプトの王となりました。それで、どんな結果が起こるかは明確な事です。長い年月が過ぎ、イスラエルの民は70名から約200万人になりました。そのイスラエルを脅威と思ったエジプトの王パロやエジプト人は、イスラエルの人々を奴隷のように扱い、その子どもたちを殺すように命じました。しかし、助産婦たちは神様を恐れ、エジプトの王が命じたとおりにはせず、イスラエルの男の子を生かしました。それで、パロは「生まれた男の子はみな、ナイルに投げ込まなければならない。」と命じます。

泣かないで、わが子よ（出エジプト2章）

生まれた赤ちゃんを3ヶ月も隠して育つ事は大変なことです。モーセの両親はそのようにしました。しかし、もう隠しきれなくなったので、パピルス製のかごを手に入れ、それに瀝青と樹脂とを塗って、モーセを中に入れ、ナイルの岸の葦の茂みの中に置きました。パロの娘が水浴びをしようとナイルに降りて、川辺を歩いていた時、彼女は葦の茂みにかごがあるのを見ました。それをあけると、男の子が泣いていたので、彼女はその子をあわれに思い、宮殿に連れていき、エジプトの王子として育ちます。

モーセという名前は、本来は「……モセ」（～の子）というエジプト名でありましたが、ヘブル語との語呂合せと、水の中から救われ、し

かも選民イスラエルをエジプトの奴隷の地から、また葦の海（紅海）の水の中から引き出すという大事業を行った人物の名として、ヘブル語マーシャー「引き出す」に結びつけて、「引き出す者」という名となったと思われます。

はい、ここにおります（出エジプト3-4章）

モーセは当時の最高の教育を受けていたに違いありません。しかも自分がヘブル人であることを自覚し、奴隷の状態にある同胞のために心を痛めていました。しかし、まだ時が満ちず、モーセはミデヤンの地に逃れて、そこでさらに40年を過すことになります。

イスラエル人は労役にうめき、わめきました。彼らの労役の叫びは神様に届き、神様は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされました(2:23-25)。神様はそのためにホレブ山でモーセに現れます。柴の中の火の炎の中で神様はモーセに命じました。パロと会い、イスラエルの民が約束の地へ行けるように要求しなさいということです。しかし、モーセは自分は適任者ではないと言い続けますが、神様はご自身の手を伸ばし、エジプトのただ中で行なうあらゆる不思議で、エジプトを打つことと、モーセの兄アロンを代弁者にすると語り、モーセをエジプトへ向かわせました。

厳しさが増す苦役（出エジプト5-6章）

奴隷の生活をしていたイスラエルの人々は、モーセが神様と出あったという事で期待が高まりますが、状況はさらに厳しさが増します。それで、イスラエルの民はモーセにつぶやきますが、神様はモーセと民にイスラエルの先祖たちと結んだ契約を思い起こさせます。

10のしるし（出エジプト7:1-12:36）

イスラエルの人々がエジプトを出ることを求めたモーセに対し、パロは労働力を失うことを理由に拒絶し続けます。このパロがだれであったかは確かではありませんが、前1447年、アメンホテプ2世の時だったと思われます。前1720年頃から、人種的にイスラエルの人々と近いヒクソスと呼ばれた人々がエジプトを支配し、その支配は約150年間続きました。この時に、ヨセフを中心にイスラエル人がエジプトに移り住みます。そして前1570年頃から「ヨセフのことを知らないパロ」が第18王朝を創設し、イスラエルの人々に対する圧迫が始まり、特にトゥトメス3世（前1479―1447年）の時に激しい圧迫がなされました。それで、神様はエジプトに10の災害を下します。パロは頑なに神様のしるし

を拒みましたが、エジプトのすべての初子が死ぬ事で、イスラエルの民を追い出します。神様の10のしるしで、エジプトの民はイスラエルの人々に好意を持つようになり、モーセもエジプトの国でパロの家臣と民とに非常に尊敬されます(11:3)。

エジプトに下った10の不思議なしるし

第1は、ナイルの水が血に変ること（7:14-25）。

第2は、かえるがはい上がって、エジプトの地をおおう（8:1-15）。

第3は、ぶよが人や獣につき、エジプト全土もぶよであふれる（8:16-19）。

第4は、エジプトの家々や土地もあぶの群れで満ちる（8:20-32）。

第5は、エジプトの家畜が疫病でみな死ぬ（9:1-7）。

第6は、エジプト全土の人と獣にうみの出る腫物ができる（9:8-12）。

第7は、建国の日以来、今までになかったきわめて激しい雹を降らせる（9:13-35）。

第8は、いなごが地の面をおおい、野に生えている木をみな食い尽くす（10:1-20）。

第9は、エジプト全土は三日間真っ暗やみとなる（10:21-29）。

第10は、エジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいる捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも殺される(11:1-12:30)。

過越しの祭（出エジプト12:1-28）

神様は、エジプトへ第10の災害を与える時に、イスラエルの民にはほふった動物の血を柱とかもいに塗ること、イスラエルはその夜、家の外に出てはいけないこと、エジプトを打つために行き巡る滅ぼす者は血を見てイスラエルの家を過ぎ越す(pass over)ことなどを語りました。この日をイスラエルの人々は過越しの日(Passover)と呼ぶようになります。モーセやイスラエルの人々は、自分たちが神様の力と守りとの中で導かれている事、神様に心から叫び求めると神様があわれんでくださる事とを悟ります。

エジプトから出ては出たが（出エジプト12:37-18:27）

神様は、昼は途上の彼らを導くために雲の柱で、夜は彼らを照らすために火の柱でイスラエルを導きました。海辺まで辿りついたイスラエルが後ろを振り向くと、パロやエジプトの戦車が迫ってきました。神様が逃れるために道を与えてくださると信じていたモーセとイスラエルは、紅海をかわいた地を進み行くように渡ります。パロやエジプトの戦車も渡ろうとしましたが、海がもとの状態に戻り、飲み込まれてすべてが死にます。

イスラエルの民は荒野で行進しながらシナイ山に辿りつきますが、荒野は暑くて、乾燥し、食べ物も少ないところです。神様が民を荒野へ向かわせたのは、民が神様のおしえに従って歩むかどうかを、試みるため」(16:4)でありましたが、民はエジプトでの奴隷の生活がましだとつぶやき始めます。神様はそのようなイスラエルをあわれみ、マナ(15:23-　17:16)を与えました。多くの聖書学者は、このマナがいのちのパン(ヨハネ福音6:47-51)として来られたイエス様を描写していると語ります。

十戒（出エジプト19-31章）

十戒の要約

第Ⅰの戒め（信仰の原点の宣言）

あなたがたは、 わたしのほかに、 ほかの神々が あってはならない。	・神と結ばれた契約関係を確実にする教えです。 ・私たちが神を愛することに妨げるものになるかもしれないこと（権力・名誉・財産・健康など）を神以上に重要視してはならないことを教えます。

第Ⅱの戒め（礼拝の唯一の対象は神だけ）

あなたは 自分のために、 偶像を造ってはならない。	・造ったものによって神を礼拝することはいけません。 ・神の人格とそのわざにふさわしい礼拝をささげるべきことと、自分の思い込んだ形に神をはめ込んではならないことを教えます。

第Ⅲの戒め（神の御名は全地に正しく告げ知らせるべき）

あなたは、
あなたの神、
主の御名をみだりに
唱えてはならない。

・自分の利益のため御名を使うことはいけません。
・御名は礼拝や祈り、証しなどで用いられ、さらに広く語り伝えられるべきものです。
御名を汚すと、御名はそれにふさわしい尊敬を得られなくなります。

第Ⅳの戒め（私たちに聖別と献身が求められています）

安息日を
覚えて、
これを
聖なる日とせよ。

・イエスの復活によって完全な安息が与えられました。
・安息日はただ休む日ではなく、今までしていたことをやめる日です。即ち、他の日と区別して自分のためではなく、神の日としてとっておくことを教えます。

第Ｖの戒め（親に信仰の伝え手としての宗教的な意味を与えます）

あなたの
父と母を敬え。

・神の秩序として上に立つ権威に従うことを教えます。
・家庭は、信仰の継承が行われるところであって、親子の正しい関係は神との正しい関係につながります。

第Ⅵの戒め（命の尊さを宣言します）

殺しては
ならない。

・命を奪うことは神の権限への挑戦となります。
・殺人の原因は、愛の欠乏にあります。殺人は人の存在を奪いますが、愛は人のいのち生かし、その人の存在を生み出します。

第Ⅶの戒め（結婚の純潔を教えます）

姦淫しては ならない。	・姦淫は、結婚生活を分離させるものです。 ・この戒めは、性的堕落を阻止する目的があり、無知と無法性を束縛する手段となります。

第Ⅷの戒め（神と隣人のための価値ある生活を教えます）

盗んでは ならない。	・いろんな形の盗みがあり、注意深く守るべき教えです。 ・すべては神のものであり、私たちに与えられたものです。ですから、与えられたものを大事にし、活用して神に返すべきです。

第Ⅸの戒め（人は隣人と共存する存在です）

隣人に対し、 偽りの証言を してはならない。	・隣人の人格と名誉を尊重するように教えます。 ・神は真実な方なので、神と神の約束に対して確信を持つことができます。神を真実な方として信じる者にはそれにふさわしく、隣人に信頼を与えます。

第Ｘの戒め（心の綱領です）

隣人の家を 欲しがっては ならない。	・私たちには考え、所有できる限度があります。 ・思うべき限度を越えてはいけないことと、各々与えられた量りに応じ、慎み深く考え、所有すべきです。

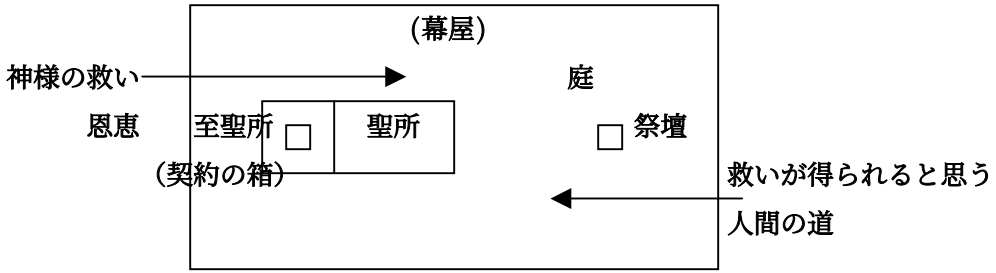
●幕屋(出エジプト 25 章)

幕屋は神様の命令によって造られました。その命令は、「彼らがわたしのために聖所を造るなら、わたしは彼らの中に住む。幕屋の型と幕屋のすべての用具の型とを、わたしがあなたに示すのと全く同じように作らなければならない。」(出エジプト記 25:8-9) というものです。神様の命令は、

①神ご自身が「イスラエルの民の中に住む」と語られたことで、神様のあわれみが示されました。民が神様のところに行くのではなく、神様が民のところに来られることが神様のあわれみです。

②幕屋は三つの区域で区別されます。至聖所と聖所 (26:33) と幕屋の庭(27:9)です。私たちが神様に近づく道は、庭→聖所→至聖所の順ですが、幕屋をもって神様は私たちに、至聖所の契約の箱から始まる神様の道を示してくださいました。ご自身の慈愛と赦しの恩恵が得られるところから幕屋が始まるようにしてくださいました。

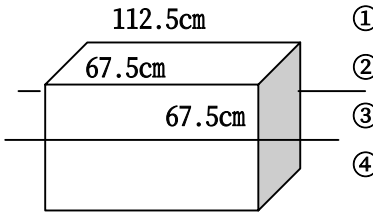
(幕屋の構造で分かる神様の恵み)



③しかし、幕屋を完成した後、示された契約にふさわしい者でなければ至聖所に入ることが禁じられました。それは、契約に反する者は聖なる神様に近づくことができないことと、その違反(罪)が贖われなければならないことを示します。幕屋には違反者(罪人)が贖われるための祭壇(27 章)がありました。ですから、祭壇は違反者を神様の慈愛と恵みへ招く恩恵であります。

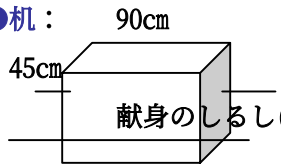
神様は、違反者を祭壇のいけにえをもって聖められた者と認めて下さいました。このことは、十字架で死なれた「イエス・キリストの贖い」の原理を示すもので、私たちは十字架で死なれたイエス・キリストの故に神様に受け入れられ、神様に近づくことのできる者となりました。

●契約の箱（あかしの箱、22 節、ヘブル書 9:4）：　（1 キュビトを 45㎝で計算）



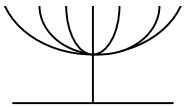
①神様のあかしがある(16 節、十戒の石の板で、神の公義)。
②後にマナとアロンの杖を入れる（生きるパンと復活を意味)。
③『贖いのふた』と両端にケルビムを造る(神の哀れみ)。
④幕屋の中心的なもので、神様のご臨在を示します(22 節)。

●机：



①皿、柄杓、小瓶、水差し：ぶどう酒の献げ物を捧げるため(29)。
②絶えず備えのパンを置くため：毎安息日ごとに 12 個を、一列 67.5㎝　に 6 個ずつ二列。神様への感謝と献身のしるし(ローマ 12:1,2)。
③パンとぶどう酒は、神様との交わりを意味する。

●燭台：



①純金 1 タラント(34kg)で、槌で打って作る(31,39 節)。
②アーモンドの花（起こす人、守る人という意味）の形から神様への希望と守りを表わす。
③七つの灯火(37 節)は、至聖所に光を放つもので、神様の導きを。
④燭台も神様との交わりを意味する(第 1 ヨハネ 1:5-7)。

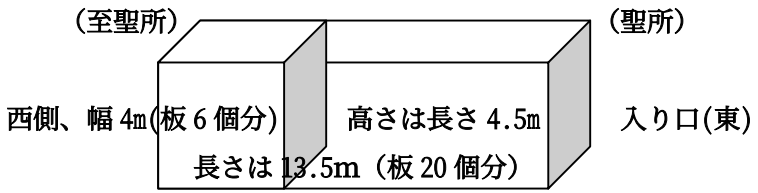
●一番内側の幕（出エジプト 26:1-6）：外側では見られない内側の幕のことで、今日のカーペットのように糸で織ったものです。移動のために 5 枚ずつつなぎ合わせで聖所を被せました。ケルビムを織り出して作ったことから、神様がおられることを表わしたものだと思われます。最高のもので、貧弱に見える外側に比べて内側に潜んである主の栄光、受け継ぐべき信徒の栄光を示したとも思われます。

●第 2 幕出エジプト（26:7-13）：内側の幕を被せる幕のことで、11 枚作り、5 枚の幕を一つにつなぎ合わせ、他の 6 枚を一つにつなぎ合わせました。材料はやぎの毛です。一般的にやぎの毛は防湿効果があると言われます。やぎの犠牲で作られることから、私たちへの贖いを意味することだとも思われます。

※参考；レビ記 16 章では贖いのために 2 匹のやぎが用いられています。1 匹は罪のためのいけにえで、ほふられるもの、もう 1 匹は生きているやぎで、そのやぎは民のすべての咎をその上に負って、不毛の地へ行かせるものです。荒野に放つヤギは、民の罪が忘れ去られたことを象徴する行為だと思われます。

●第 3 の幕（出エジプト 26:14）：赤くなめした雄羊の皮のおおいとその上に掛けるじゅごんの皮で造った幕のことで、その大きさは明確でありません。砂漠の気候の中で聖所を守る役割が大きかったと思われます。赤くなめしたことでそれが十字架での御血であると思う人がいます。また、試練の中で守ってくださる神様の恵みを表しているとも思われます。

●聖所の本体（出エジプト 26:15-30）：聖所を建てるための組み立て式の壁の板を 48 個（南側と北側に各々20 個、西側に 6 個、両隅に 2 個）作りました。はめ込みを 2 個ずつにし、板の固定のための銀の台座も 100 個作ります。このことから聖所の長さは 13.5mだと思われます。



●至聖所と聖所の垂れ幕（出エジプト 26:30-37）

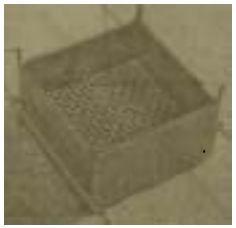
①4 つの糸で織った亜麻布でを作ります。これに巧みな細工でケルビムを織り出したもの。

②聖所と至聖所との仕切りのためで、4 つの柱を作り、垂れ幕を支えます。聖所の垂れ幕のためには 5 つの柱を作ります。

③ソロモン神殿の至聖所と聖所の比率が 2:1 であることから入り口から 9 メートルの位置にあったと思われます。

④至聖所には大祭司長だけが毎年一回だけ入ることができます(7 月 10 日、レビ記 16:28)。

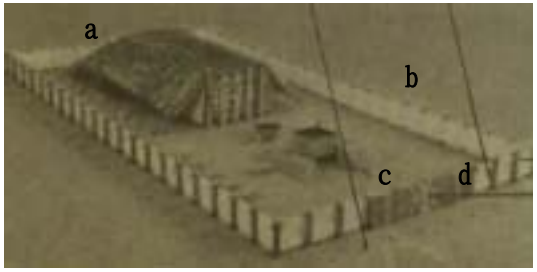
●祭壇の形と材料（出エジプト 27:1-8）：祭壇の用具は、みな青銅です。



・四隅の上に角を作る
・網細工の格子を作り
・長さ・幅 2.25m　　高さは 1.35m
・アカシヤ材の棒を作り、それらに青銅をかぶせる。

①祭壇の角は、いけにえを組むためのもので、犯罪者が角をつかむことで逃れの町の役割をしたこともあります（第 1 列王 1:52)。救いの角とも呼ばれ(詩篇 18:2)、青銅（熱に耐えるように）を被せて作ったことから青銅の壇とも呼ばれました。
②祭壇は、神様に贖いと感謝の供え物を捧げたところで、私たちと神様とを仲介するものです。ですから、私たちが祭壇の前に立つことは、神様の統治と権威を認め、そして私たちの持つべき従順と献身を表したことになります。
③古代オリエントではイスラエルだけでなく殆どの国が祭壇を信仰心の中心としました。しかし、彼らの祭壇信仰は非人格的で、反道徳的であります。ご利益のためとか快楽のための文化行事の次元を超えるものではありませんでした。それに対するイスラエルの祭壇は、神様の命じられた言葉によって作られたもので、神様に近づく道であり、自分自身を捧げる献身と従順のためのものでした。イエス様も祭壇へ行く前に必要なものとして、悔い改めと和解を教えました(マタイ 5:23-24)。
④神殿の時代には長さ･幅が 9m、高さが 4.5m でありました(第 2 歴代 4:1)。

●幕屋の庭造り（出エジプト 27:9-19）



a)22.5m(柱は 10 本)の掛け幕
b)45m(柱は 20 本)の亜麻布で織った掛け幕
c)9m の入口掛け幕(柱 4 本)
d)6.75m の掛け幕(柱 3 本)
　高さは 2.25m(聖所の高さは 4.5m)

①幕屋に入る一つの門、それは私たちの救いが唯一（キリスト）であることを教えます。

②荒野において幕屋のために約 300 坪の平地を探すことは大変なことです。イスラエルは幕屋のための平地を優先して確保したことで、自らの信仰を表しました。

③幕屋を建てたり移動させたりすることも大変なことで、信仰による従順を表します。

●灯火（出エジプト 27:20-21）

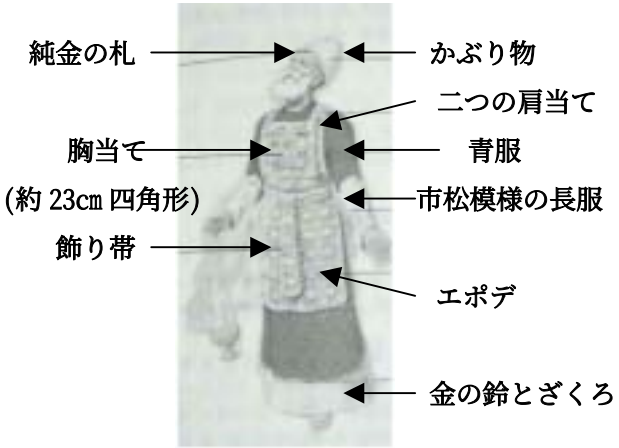
①上質の純粋なオリーブ油は、不純物をなくした油のことです(最善を尽くして作る油)。

②夕方から朝まで、暗い聖所を照らすものとしなければなりませんでした。

●祭司長(出エジプト 28 章)

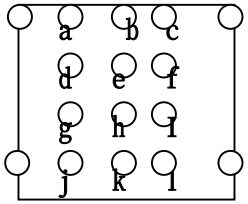
①罪ある人間が神様の前に出るためには、その罪を解決しなければなりません。そのために民はいけにえが、それに務める祭司たちには装束が必要でした。祭司たちの装束は、衣自体に何かの意味があるのではなく、神様によるものなので、「主への聖なるもの」とみなされるものです。このことは、私たちが神様に出るためにキリスト･イエスが必要不可欠であることを明確に示すことでもあります。

②大祭司長の装束



③28:6-14、エポデ：金色や、青色、紫色、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、巧みなわざでエポデを作ります。二つの肩当てに二つの宝石をつけ、12 部族の名を生まれた順に刻みます。それは、印を彫る形でするもので記念の石とするためです。神様が民を守られることへの印として理解します。

④28:15-30、胸当：胸当ては判決（法的効力をもつ判例の意味）を示すもので、形は約 23㎝ の正方形で二重になっています。二重になっているのは宝石の重さに耐えるためです。宝石は、胸当てに横 3 列、縦 4 列で金の枠にはめこみます。宝石はイスラエルの各部族を象徴するものです。



a)赤めのう、　b)トパーズ、　c)エメラルド(赤・黄・緑の色の宝石)
d)トルコ玉、　e)サファイヤ、　f)ダイヤモンド(青緑・青・青黄色)
g)ヒヤシンス石、　h)めのう、　I)紫水晶(紺・しま模様・紫色の宝石)
j)緑柱石(りょくちゅうせき)、　k)しまめのう、　l)碧玉(へきぎょく)(緑・しま模様・緑色の宝石)

金の環、純金の鎖によってエポデにつける。

胸に当てることは、イスラエルを神様が心に置くという象徴として理解できます。神様は私たちに対する心、つまり、大きな愛で導くことを示唆します。胸当てには、ウリムとトンミムを入れます。ウリムは光の複数形、トンミムは完全の複数形で、ルターは光と義という言葉で訳しました。材料や大きさに関する情報はありませんが、石のようなもので、さいころのようで、可否を決めていたと思われます。

●エポデの下に着る青服（出エジプト 28:31-35）：青服の裾の周りに金の鈴をつけたのは、大祭司長が職務を行っていることへの確認の意図で、神様に仕えることへの厳粛を示します。

●純金の札（出エジプト 28:36-39）：市松模様の長服、飾り帯：純金の札の上に印を彫るように、『主への聖なるもの』と彫り、青ひもにつけてかぶり物につけます。アロンの額の上あることで、ささげものに関する咎を負うことになり、ささげものが主に受け入れられるようになります。札の意図が明確に記されたことで、祭司長の装束が神様に向けられたものであることが分かります。つまり、装束は人に見せるための衣ではなく、神様へのものです。どんなささげものも元々咎のあるものであって、神様に受け入れられるものではありませんが、札によって

受け入れられるものとなります。

●祭司のための長服、飾り帯、ターバン、ももひき（出エジプト 28:40-43）：大祭司長とは異なる祭司の衣です。キリストと信徒の姿を示すかのような描写として理解する人もいます。油を注ぎは、王や預言者と共に祭司たちに許されたもので、メシヤの動詞形(マシャフタ)です。祭司たちの衣も人に見せるためではなく、神様に向かわせるためのものでした。

●祭司長の聖別と任職（出エジプト 29 章）

①29:1-37、任職式のために必要な動物とささげ物について：神様に近付く手段として欠かすことの出来ないものでもあります。アロンとその子らを幕屋の入口まで進ませ、そこで聖なる神の前に出るために水できよめを行います。 → 祭司の装束をそれぞれ身に着けます。 → 任職の油がアロンに注がれます。

②29:38-46、臨在の約束：「その所でわたしはあなたがたに会い、その所であなたと語る。」(42節)。それで幕屋を「会見の天幕」と呼ばれます。

●香壇（出エジプト 30:1-10）

①材料はアカシヤ材と金．香壇は至聖所のすぐ前に置かれます。

②ヘブル書では至聖所の中(9:4)と語り、象徴的には至聖所に属していると見なされます。

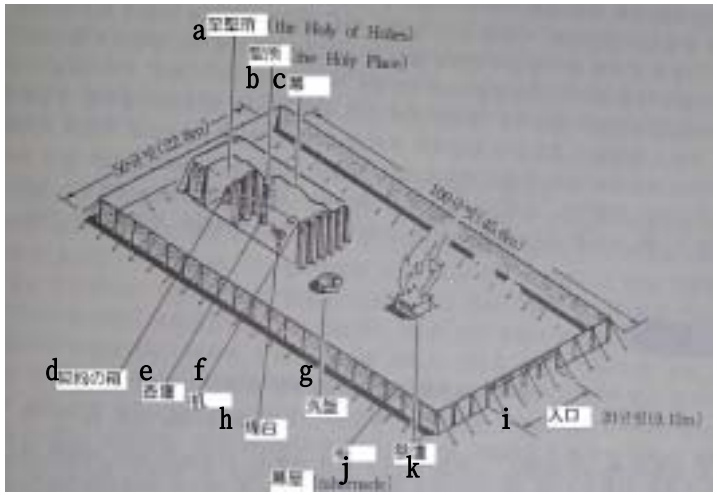
③香は恵みの御座に立ち上る民の祈りを表します（黙示録 5：8）。

④定められた香以外のものをたくことは厳しく禁じられました。

●洗盤（出エジプト30:17-21）： ①祭司が神様の前で奉仕をする時に手足と体をきよめるためです。

②洗盤は聖所の聖さを強調する役目を果しています。

●注ぎの油、香料（出エジプト30:22-28）：①最上のものが用いられた。②香油も香も「神礼拝のため」にのみ用いるものである。



a.至聖所
b.聖所
c.幕
d.契約の箱
e.香壇
f.机
g.洗盤
h.燭台
i.入口
j.板
k.祭壇

●契約の箱、机、燭台、香壇（出エジプト37章）

①契約の箱は神様を示します。

②12個のパンを絶えず捧げることは、神の恵みに対する感謝を表す。

③燭台は、神様の導き、交わりを表します。

④香壇は、神様に捧げる祈りを表します。

●祭壇、洗盤、庭（出エジプト38章）

①祭壇は、キリストの贖いと神様との和解を教える。

②洗盤は、きよめを表します。これは、女たちの鏡で作った(8節)もので、貧しさの中で豊かさを示す美談。

③庭は約300坪で、平坦な地を選びました。移住に伴い、300坪の平地を決め、そこを中心に定住したことから、大変な歩みであったともいえます。

④総制作費は、金が29タラント730シェケルで、銀は100タラント1775シェケルであった。これは、20才以上の603,550名の贖い金によるものであった。

●祭司長の装束と完成された器具（出エジプト39章）

●幕屋の奉献式（出エジプト40章）

①期間・約10ヶ月間（出エジプト12:2―19:1）：第一の月の一日は特別な日

②40:34-38神様が共におられる

ささげ物の規定（レビ記1:1 - 7:38）

1 - 7章の規定は、「ささげ物（コルバーン）についての規定」と定義されています（1:2）。内容的に言えば、1:1-6:7は「ささげ物に関する規定」、6:8-7:36は「祭司の施行細則、取り扱い規定」と区別されます。

●全焼のいけにえ(レビ記1:1-17)

口語訳では「燔祭」、新共同訳で「焼き尽くす献げ物」と訳されているいけにえです。これは、ささげられた家畜、鳥のすべてが「主へのなだめのかおりの火によるささげ物」（9、13、17）として祭壇の上で焼かれる「ささげ物」です。「主へのなだめのかおりの火によるささげ物」とは、本質的に「焼いて煙にする」ことです。このいけにえのために用いられる家畜は、傷のない雄の牛、羊、山羊、山鳩か家鳩で、生活のレベルに応じてささげられました。

全焼のいけにえは、「全焼のいけにえの頭の上に手を置く」（4節）動作が「罪のためのいけにえ」(16:21)と同様の祭儀的機能があります

が、それで「罪の転嫁」として説明されるべきかどうかは定かではありません。寧ろ、家畜がささげ物として認定される、適格性を示すとか、ささげる人物を特定する行為と考えられます。「贖う」という言葉も「きよめる」と理解することが出来ます。

礼拝・儀式には、必ず「全焼のいけにえ」がささげられました（6:9-13など）。これは、礼拝・儀式において最も基本的なささげ物であり、不可欠なものだと考えられます。旧約聖書はその意味については具体的に何も言及していませんが、罪を除くためではなく、より一般的な意味で「汚れた人間と聖なる神との交わり（礼拝）を可能にするささげ物」と考えられます（参照創8:20）。

●穀物のささげ物（レビ記2:1-16）

「穀物のささげ物」(口語訳では素祭)は、小麦粉でなければなりません。①料理していない場合（1-3）、②かまどで焼いた場合（4）、③平鍋（鉄板）で焼いた場合（5-6）、④鍋で料理した場合（7）などがありますが、いずれの場合にもオリーブ油と乳香が加えられます。しかしパン種（酵母）と蜜は加えられてはなりません(11-12)。

このささげ物は、通常「全焼のいけにえ」に続いてささげられました。神様は、「全焼のいけにえ」を通してご自身の民イスラエルを近付けられ、「穀物のささげ物」は、民のその恵みに対する「感謝のしるし」と考えられます。

●和解のいけにえ（レビ記3:1-17）

厳密に言えば、この和解のいけにえだけが、「いけにえ」と呼ばれているものでした。礼拝者は、「ささげ物の頭の上に手を置き」（2、8、13節）、それをほふり、脂肪などを燃やします。祭司は、その血を祭壇の周りに注ぎました。

「全焼のいけにえ」と比較すると、この「和解のいけにえ」の場合は、腎臓・脂肪・小葉だけが、祭壇の上で「主へのなだめのかおりの火によるささげ物」として焼かれ、その肉は礼拝者たちが食べることが出来た点にこのささげ物の特色があります。脂肪や血は決して食べてはならないと命じられました。

このいけにえは、それをささげた礼拝者が食べることの出来る唯一の「ささげ物」であります。この祭儀的機能は、「神様との食事、祝宴」、すなわち、「神様との交わりそのもの」です。申命記12:7に「あなたがたの神、主の前で祝宴を張り、あなたの神、主が祝福してくださった

あなたがたのすべての手のわざを喜び楽しみなさい」とありますが、旧約聖書が示している礼拝の本質として理解できます。この「和解のいけにえ」は、感謝として誓願の時に、更に贈り物としてささげられました。

●罪のためのいけにえ（レビ記4:1-5:13）

「罪のためのいけにえ」の規定は、4つのケースに分けて語られています。①油注がれた祭司（大祭司）の場合（2-12節）、②イスラエルの全会衆の場合（13-21節）、③上に立つ者(族長、首長)の場合（22-26節）、④一般の人の場合（27-35節）です。

ここで共通して語られていることは、「あやまって(故意ではない)罪を犯した」ことです。そして、「罪が明らかになった時（知らされたなら）」、このいけにえをささげなければなりません。「罪のためのいけにえ」は、誰が罪を犯したかによって、傷のない雄牛（祭司，イスラエルの全会衆）、雄山羊（上に立つ者）、雌山羊（一般の人々。雌羊でも可。32-35節）と、それぞれ異なります。

また、「証言をしなかった場合、動物の死体に触れた場合、汚れた人に触れた場合、誓いを破った場合」にもささげました。

祭司は、「罪のためのいけにえ」の儀式の執行によって、ささげる者を「贖い」、その結果、神様はその人の罪を赦されました。ここでは「血」が重要な役割を演じています。「贖い」には、「罪の贖い」（直訳、罪から）、また「犯した罪の贖い」という表現が用いられていますので、祭儀的な意味での「きよめられる」意味があります。この場合の「赦される」とは、具体的に「礼拝への資格が回復される」「聖なる会合に加えられる」ことを意味します。

●罪過のためのいけにえ(レビ記5;14 - 6:7)

「罪過のためのいけにえ」(新共同訳では賠償の献げ物)の規定は、3つの場合があります。

①聖なるものへの罪過（5:14-16）：「主の聖なるもの」とは、ささげ物の中の祭司の取り分、祭司への奉納物のことで、それを「ささげなかった、自分で食べた」ということです。この場合、聖所で定められた支払い額に相当する雄羊、ささげるべき物にその5分の1を更に追加したものを償いとして祭司のところに持って行きます。

②主の戒めに対する違反（5:17-19）：主の律法に1つでも違反した時に、たといそれを知らなくても、聖所で定められた相当額の雄羊を祭司のところに持って行きます。

③隣人に対する不正（6:1-7）：盗み、横領、着服、詐欺をしてそれによって損害を被らせた場合、被害者に損害総額に5分の1を加えて支払わなければなりません。聖所で定められた相当額の雄羊を祭司のところに持って行きます。

これらの「いけにえ」は、犯された罪に対して異なる次元において機能するものであると思われます。すなわち、「罪のためのいけにえ」は、「祭儀的きよめ」を意味し、他方「罪過のためのいけにえ」は、「弁償」を意味するものと理解できます（参照、民数記5:6-10）。

●「ささげ物」の意味：

旧約の時代の神様の民＝イスラエルの宗教生活の中心は、聖所で祭司を通してなされる「祭儀」です。「ささげ物」の規定は、神様の定められた制度であり、レビ記の「祭儀規定」が神様よりイスラエルに与えられたということは、「神様がイスラエルと交わる」ことの意思の表明であります。つまり、祭儀・礼拝は、「聖なる神様との交わり」です。

「ささげ物」は、それ自体では「神様と人との関係」を作り出せません。この祭儀・礼拝は、神様によって「聖」（交わりの資格）とされること、神様と人との「契約関係」が前提で成り立つものです。すなわち、祭儀は本質的に、すでに結ばれた契約関係を維持し、回復、更新するものであり、「ささげ物」は「交わりの媒体」であると言えます。

「ささげ物」は、その機能において2つに区別されます。全焼のいけにえ・穀物のささげ物・和解のいけにえの3つは、「主へのなだめのかおりの火によるささげ物」であり、「神様との交わりそのもの」のために機能し、罪のためのいけにえ・罪過のためのいけにえは、「神様との交わりの回復」のために機能します。「贖う」という機能は、「全焼のいけにえ」・「罪のためのいけにえ」・更に「罪過のためのいけにえ」が持っているものです。

祭司によるこの「贖い」が、聖なる神様のイスラエルにおける臨在と神様と人との交わり（礼拝）を維持し、回復させました。それも、儀式それ自体の効力によるのではなく、神様の御言葉（制定）の故であります。イエス・キリストの十字架の意味は、この「神様との交わりの回復」にあります（ローマ5:1-11、コロサイ1:20、ヘブル9:12-15）。また、このささげ物の一部は、祭司の家族の生活の糧となりました。

06　第四と第五の律法の書：民数記と申命記

これから民数記と申命記を読むと、モーセの律法学校を卒業することになります。

民数記：民を数える

人口調査は、国家と国民の現状を知ることだけではなく、将来のための計画を立てるのに有益な情報が得られます。民数記の内容から、人類は古くから人口調査を実行してきたことが分かります。民数記は、人口調査を実施したことから始まり(1章)、再び人口調査をした(26章)ことで終わるので付けられた名前です。

戦争に参加する男性の数（民数記1:1-10:10）

イスラエルの民はシナイ山で1年間を滞在した後、カナンの地に向かう旅を備えました。カナンの地までの旅程は長くかかるものではありませんでした。しかし、民数記が完了する頃にはイスラエルの民が長い旅程を必要としたことが分かります。モーセが民を連れてシナイ山を発つ前に、神様は20才以上の戦うことができる男の数を数えるようにと命じました。但し、レビ人の男や祭司たちは幕屋での働きなどで、数えませんでした。数えた総数は、603,550名でしたが(2:32)、訓練された兵士ではありません。

定住時の 12 部族による軍隊編成と配置とレビ族の配置(民数記 1-3 章)：

レビ人は幕屋の周りに陣営を敷き、他の部族は東西南北に 3 部族ずつ配置され陣営を敷きます。エフライムとマナセはヨセフの子どもですが、ヨセフの代わりに 12 部族に入り、数えられました。

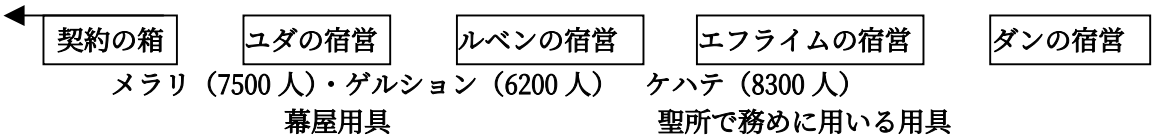
東側：ユダの宿営（ユダ部族、イッサカル部族、ゼブルン部族）

西側:エフライムの宿営（エフライム部族、マナセ部族、ベニヤミン部族）

南側：ルベンの宿営（ガド部族、シメオン、ルベン部族）

北側：ダンの宿営（ナフタリ部族、アシェル部族、ダン部族）

移動時の 12 部族による軍隊編成と配置とレビ族の配置（民数記 10 章）



絶えずつぶやく民（民数記 11-25 章）

イスラエルの民の呟きは世代が代わっても続きました。彼らは過去の経験を通して、神様が守ってくださることと、彼らの呟きは深刻な問題になることとを学びませんでした。

①民は、「ああ、肉が食べたい。エジプトで、ただで魚を食べていたことを思い出す。きゅうりも、すいか、にら、たまねぎ、にんにくも。だが今や、私たちののどは干からびてしまった。何もなくて、このマナを見るだけだ。」と、食物のことで呟きました(11 章)。

②モーセの兄弟アロンやミリヤムも呟きます(12 章)。

③カナンの地を偵察した 12 名の中でヨシュアとカレブを除いて、「私たちはあの民のところに攻め上れない。あの民は私たちより強いから。ネフィリム人、ネフィリム人のアナク人を見た。私たちには自分がいなごのように見えたし、彼らにもそう見えたことだろう。」(13 章)という報告の故に民全体が呟きました。エジプトへ帰るための指導者を選ぼうともしました。その結果、神様は出エジプトの世代の中ではヨシュアとカレブだけがカナンの地に入り、イスラエルの民は 40 年間を荒野でさ迷うと語りました(14:22-24)。

④民はモーセとアロンに対して反乱を起こしました(16 章)。その中でコラとその仲間 250 人は、モーセとアロンの権威に逆らって反乱を起こしたことで死にます。

⑤民は水が足りないということで呟きます（20 章)。

⑥民はマナを「このみじめな食物に飽き飽きした」と語り、呟きました(21 章)

⑦神様に対する不従順は、モアブの娘たちと淫らなことをし、モアブの偶像にいけにえをささげるところまでいきます(25 章)。

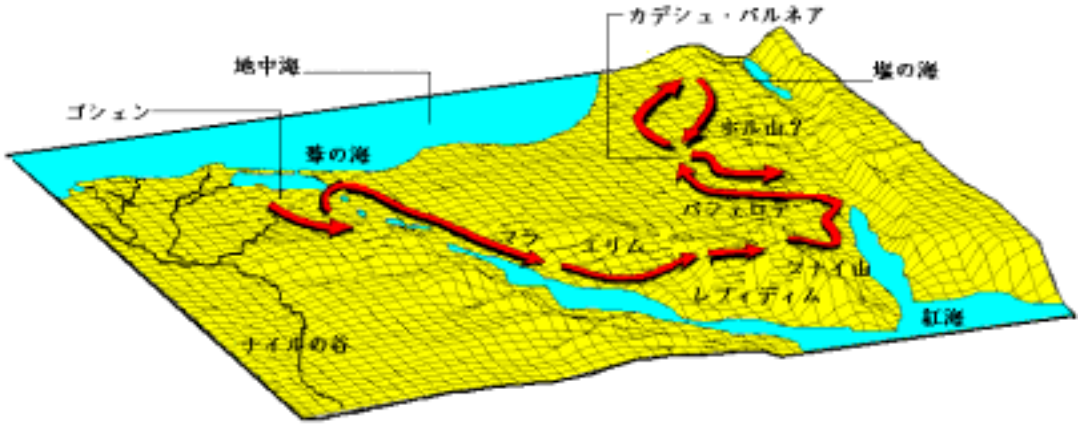
モアブの草原での計画(民数記 26-36 章)

民数記 26 章から 36 章までは、2 回目の人口調査といくつかの規定、カナンの地に入った時の分配、アロンの死、カナンの人々を追い出し、彼らの偶像を拒む必要性などが書かれています。

人口調査について(民数記 1 章と 26 章)

荒野での人口調査は、単なる国力を知るためのものではなく、神様がアブラハムに約束されたこと（創世記 12:2,15:5）が成就されたことを示すためです。男性だけでも 60 万人を超え、女性や子どもを含むと約 200 万人に上るイスラエルの民の人口は、神様の約束は変わらないものであることを教えます。

エジプトの地から出て来たイスラエル人の旅程（民数記 33 章）



１月 15 日に、ラメセスから旅立った。すなわち過越のいけにえの翌日、イスラエル人は、全エジプトが見ている前を臆することなく出て行った。スコテに宿営し、エタムに宿営し、ピ・ハヒロテのほうに向きを変え、ミグドルの前で宿営し、海の真中を通って荒野に向かいマラに宿営、エリム、⑦葦の海のほとりに宿営し、シンの荒野に宿営、⑨ドフカに宿営し、アルシュに宿営し、レフィディムに宿営し、シナイの荒野に宿営し、キブロテ・ハタアワに宿営した。その後、ハツェロテに宿営し、リテマに宿営し、リモン・ペレツに宿営し、リブナに宿営し、リサに宿営し、ケヘラタに宿営し、シェフェル山に宿営した。ハラダに宿営し、マクヘロテに宿営し、タハテに宿営し、テラに宿営し、ミテカに宿営した。ハシュモナに宿営し、モセロテに宿営し、ベネ・ヤアカンに宿営し、ホル・ハギデガデに宿営し、ヨテバタに宿営し、アブロナに宿営し、エツヨン・ゲベルに宿営し

た。カデシュに宿営し、ホル山に宿営した（123 才でアロンは死ぬ。40 年目の第 5 月の 1 日で）。ツァルモナに宿営し、プノンに宿営し、オボテに宿営し、イエ・ハアバリムに宿営した。ディボン・ガドに宿営し、アルモン・ディブラタイムに宿営した。アバリムの山々に宿営し、モアブの草原に宿営した。

申命記：約束の地に入る準備

第二の律法という意味の申命記（Deuteronomy）には、モーセがヨルダン川の東側で語った最後の説教も書いてあります。約束の地を目の前にしたイスラエルの新しい世代に、モーセは彼らの市民的、社会的、宗教的生活を導く律法の再教育の必要性を痛感したことでしょう。

歴史と律法の教訓（申命記 1-26 章）

モーセは、「全道中、人がその子を抱くように、あなたの神、主が、あなたを抱かれたのを見ているのだ」と語り(1:30)、神様がイスラエルの民を変わらぬ愛を持って接してくださったことを確信し、説教をしました。120 才のモーセの声は、感激と感動で溢れたことでしょう。モーセは律法に従うべき理由を明確に提示します。

契約更新の命令（申命記 27-30 章）

新しい所に引越しをすると、ごみの捨て方から垣の高さ、車の止め方などなど、その町の独特な規定に従うようになります。同じように、モーセも民に新しい地での生活に必要な規定を教えました。モーセはイスラエルの民が約束の民であることを強調し、神様は必ず約束を守られることとそれを信じる信仰を持たなければならないと語りました。また、律法に従うことは祝福されることであり、律法に従わないことは裁かれることをも語りました。

申命記の結論（申命記 31-34 章）

モーセはヨシュアを後継者に任命し、神様と神様の摂理とに関する歌をイスラエルの民に教えた後、イスラエルの子孫を祝福します。神様

はモーセに、アバリム（かなたの地方の意味）高地（標高 1000m 前後）のネボ山（800m）に登るように命じ、イスラエル人に与えて所有させようとしているカナンの地を見せます。モーセはその場所で召されました。

イスラエルの人々にとってカナンの地の意味は？

本来、創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記はモーセ五書、あるいはトラといい、一冊のものです。このモーセ五書は、人類の先祖がエデンの園から追放されることから始まり、モーセがネボ山でカナンの地を展望することで終わっています。エデンから追放されてカナンの地に入る直前までの内容です。このことから、モーセ五書が語ろうとすることはイスラエルの人々がカナンの地に入ることはエデンの園の回復を意味することでもあります。神様の御臨在を体験し、神様の約束は変わりがなく、エデンの園での祝福を与えられることを民は知ったことでしょう。

07　征服、無意味な教訓となった歴史、愛の物語
（ヨシュア記、士師記、ルツ記）

ヨシュア記からルツ記までのイスラエルの歴史を読むと、卓越したヨシュア（主は救いという意味）の指導力の下にあったイスラエルがどん底に落ちていく姿を見ることができます。ヨシュアを中心としてカナンの地に入った時のイスラエルは良かったですが、士師の時代には神様を信頼せず、その命令にも従わずに、各々が勝手に神々を信じ、自分の目に正しいと見えることを行ないました（士師記 17:6,21:25）。ヨシュア記は、ヨシュアの指導下で領土や国々を征服する姿が書かれてありますが、士師記は高慢になったイスラエルが周囲の国家によって征服され、奴隷となっていく姿が書かれています。

ヨシュア記：征服

指導者に従いなさい（ヨシュア記１章）

神様はモーセの後継者としてヨシュアを任命し、イスラエルの民を約束の地であるカナンの地に導きました。ヨシュアは、「強くあれ。雄々しくあれ」という言葉を繰り返し、「モーセの命じたすべての律法を守り行なえ」と語り、右にも左にもそれずに進む人物でした。

エリコの城の占領：遊女ラハブ(ヨシュア記2-6章)

ヨシュアは最初の攻撃目標としてエリコの城を選び、2人の斥候を送りました。しかし、彼らを見破った者がいたので、２人の斥候は城壁にあった遊女ラハブの家に入り、彼女が匿ってくれたので助かります。ラハブは、神様はこの地をイスラエルに与えておられると信じ、イスラエルと運命を共にすることを決意していました。2章12節の「真実」は、「好意」「親切」とも訳せますが、本来神様と人との契約的誠実を表現する言葉で、ラハブは救われます。

エリコの城が陥落され、ヨルダン渡河の時が来ました。ヨルダン渡河は、神様の約束が神様のみわざによって成就することを表すシンボル的なものです。見えざる神様の臨在のしるしとしての契約の箱を祭司たちによって先頭を切るということは、民に先立つ神様ご自身を象徴しています。刈り入れの間中、岸いっぱいに溢れるヨルダン川に契約の箱を担う祭司が足を踏み入れた時、川の水はせき止められました。イスラエル全体は、かわいた地を通り、ついにすべてヨルダン川を渡り終わりました。それで、ヨシュアは部族ごとに1人ずつ、12人を選び、これに石12個を運ばせて記念の石を立てました（4章）。そして、ヨシュアはイスラエルの男子に割礼を施し、過越しの祭を行います。その日の後、マナは降ることはありませんでした(5章)。

予断を許さぬ暗黒（ヨシュア記7、8章）

エリコ攻略という大勝利を想起しながら、そこに予断を許さぬ暗黒が伏在していることをまず示唆しています。イスラエルの子らは、聖絶のもののことで罪を犯してしまいます。アカン個人の奉納物を私物化した犯罪ですが、民全体の連帯責任が問われ、アイの城の攻略に失敗します。

ギブオン人の懸命な装いや巧みな言葉（ヨシュア記9章）

カナンの人々の中でギブオンの住民は、これまで自分たちが奉じていたであろう異教の神々が自分たちを救うことが出来ないと知って、何とかして滅びから救われようとイスラエルを騙します。近隣の国々と契約を結んではならないという命令を神様から受けたにもかかわらず騙されたイスラエルは、ギブオンの人々と契約を結び、彼らを主の祭壇のために主が選ばれた場所でたきぎを割る者、水を汲む者として共に住みます。

各所での勝利（ヨシュア記10-12章）

ヨシュアとイスラエルは神様の助けによって戦うすべての戦争で勝利を収めました。神様は雹を降らせて、敵に壊滅的打撃を与えたり、日と月がとどまるという前代未聞の奇蹟を起こしたりしてカナンの土地を征服させました。イスラエルの民のカナン征服は、世界の支配者であり主権者である神様によるものであることを、提示するための意図をも持っています。

土地の分与(ヨシュア記13-22章)

士師記1章によれば、カナン征服また土地分与の事業はヨシュアのもとでは完了していません。この後も先住民との確執は続き、雑居的状態でイスラエルは定着することになります。「こうしてヨシュアは，その地をことごとく取った」（11：23）というような表現は、神様の約束に対する成就を強く意識したものであります。従って「すべて主がモーセに告げたとおりであった」と続き、残っている地は、ほぼ南から北へと順次挙げられています(ヨシュア記13:2-6)。ヨシュアは、12部族にすべての土地を分配し、そこに住む部族がカナンの原住民を追い払うようにと命じました。

（12部族の割り当て地）

老兵は死なず（ヨシュア記23、24章）

カナンの占領が一向も進まない状況の中ではありますが、年を重ねて老人になったヨシュアは遺言を語ります。ヨシュアは司令官としての自らの功績をいささかも取り上げてはいませんでした。寧ろ、最後までその使命に生き、「戦ったのはあなたがたの神、主」だと語り、土地の獲得の戦いは、主の戦いであり、主の勝利であったと確認します。そして、揺ぎなき律法厳守を命じます。民イスラエルが神様に対して誠実であるよう彼らを決断の場に立たせ、契約を更新させます。これらのことの後、主のしもべ、ヌンの子ヨシュアは百十歳で死にました。

士師記：無意味な歴史的教訓

イスラエルは歴史という科目を落第しました。士師記はこの落第したイスラエルを掲示板に公表された成績表のようなものです。

先頭に立つユダ部族（士師記1、２章）

イスラエルの民は神様に、「だれが最初に上って行って、カナン人と戦わなければならないでしょうか」と聞きました。神様は、「ユダが上って行かなければならない」と答えました。それでユダ部族は割り当てられた地で戦い、そこの住民を追い払いました。彼らは戦略的な町エルサレムまで占領しました。しかし、他の部族はユダ部族と同じ結果を得ることができませんでした。戦火の煙が消えていても多くのカナンの原住民はイスラエルの割り当て地でそのまま住んでいました。占領していなかった領土が多くあったからです。

悪循環（士師記3-12章）

イスラエルの民は、神様を信じないカナンの人々と共に住むことで多くの問題を抱えました。その中でも異教徒との結婚は深刻な問題で、その結果多くの人々が偶像崇拝に走りました。このような信仰における堕落は神様の審判を招きました。神様はイスラエルに警鐘を鳴らすため、イスラエルを敵に手に渡します。敵によって苦しむとイスラエルは神様に悔い改め、助けを叫び求めます。そのイスラエルを神様はあわれみ、士師(さばきつかさ)を送り、彼らを救いました。しかし、平穏な生活に戻るとイスラエルは、再び異教の生活に戻りました。このような「信仰の堕落（背信）ー敵に苦しむ（神の審判）ー悔い改めー救い（士師により）」という悪循環が繰り返されています。

ナジル人士師サムソン（士師記13-16章）

ナジル人として髪に剃刀を当てていなかった士師サムソンは、妻として迎えたペルシテ人デリラによって髪が剃れる時までは超人的な力を持っていました。しかし、デリラに騙され、髪を剃ったサムソンには超人的な力はなく、ペルシテの奴隷となり、ダゴン神殿の柱に縛り付けられました。サムソンは自分の罪を悔い改めたので、神様は彼の髪が伸びてきた時、彼に再び力を与え、神殿に集まったすべてのペルシテ人を殺しました。

士師サムソンの物語は、どん底まで落ちた捕囚の民、神様の民に対して励ましのメッセージを持っています。神様はあわれみ深く、イスラエルが神様の主権を認め、悔い改めて祈る時にさばきを変え、サムソンの髪が伸びてきた時のように救いを実現して下さいます。

前科記録（士師記17-21章）

士師記の結論部分では、「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なう」ことの悲劇が繰り返し皮肉に描かれています。外敵からの圧迫に対して士師たちが立てられたが、次第にイスラエルは戦う意欲を失っていき、終結部分においては内部からも崩壊していきます。殺人、窃盗、性的堕落、拉致などは断片的な事例に過ぎません。このような告発状は、道徳規範を無視していくすべての社会に厳しい警鐘を鳴らすものです。

ルツ記：愛の物語

士師記を読んだ後にルツ記を読むと、まるで汚染された大都市を離れて空気の澄んだ田園都市に来たような、茨の中できれいな花を見つけたような思いを抱きます。士師記は神様に従わなかったイスラエルの記録で、ルツ記は神様に従った異邦人の女性の記録です。

未亡人たちの話し合い（ルツ記1章）

ユダのベツレヘムに住んでいたエリメレクとナオミは飢饉（外敵による）を逃れて二人の息子を連れてモアブの野に行き、そこに滞在することにしました。移住後約10年の間、エリメレクだけでなく、そこでモアブの女性と結婚をした二人の息子も死んだので、ベツレヘムに帰る

決心をします。二人の嫁には自分たちの母の家へ帰るようにと勧め、決別を求めました。それで、未亡人の会が始まり、弟嫁オルパは実家へ帰ることを選びますが、兄嫁ルツは「あなたの民は私の民，あなたの神は私の神」(1:16)といい、姑ナオミと一緒にすることを選びました。

ルツとボアズ（ルツ記2章）

貧しい者や在留異国人のために落ち穂を拾うことが許されていたので、ルツは落ち穂を拾い集めました。彼女が行った畑はエリメレクの一族に属するボアズの畑で、ボアズは彼女の噂を知り、手厚く保護してあげます。

ボアズの妻となるルツ（ルツ記3、4章）

私たちにとっては理解できない当時の求婚を見ることができます。ルツの側からの積極的なアプローチの形（足のところをまくって、そこに寝なさい）をとっていますが、ボアズの主観的な決断が事を決する求婚の方法です。恐らく二人の間にはかなりの年齢的隔たりがあったと思われますが、「買い戻し（ゴーエール）」という恵みによって結ばれました。

ユダの嫁タマルの子ペレツから紹介されている系図はイエス様の系図につながりますが、エリコの城のラハブの子ボアズが美しいモアブの女性ルツと結婚をし、生んだ子がダビデの祖父であったことは、神様の見事な摂理をよく示す物語です。

08　三人の人と一つの王国（サムエル記）

ヘブル語聖書でのサムエル記は一巻のもので、後の 70 人訳聖書で列王記と纏まりになって、サムエル記は「王国の第 1、王国の第 2」に、列王記は「王国の第 3、王国の第 4」と呼びました。サムエル記は、士師の時代の末期からダビデ王の末期までの歴史が含まれています。サムエルの意味は、「神の名」です。サムエルは、本書全体の著者ではありませんが、本書の主要な登場人物です。他の主要な登場人物であるサウルとダビデも、サムエルにより油を注がれて王に任命されました。サムエルはキングメーカーであり、士師の時代から王制への過渡期に神様に用いられました。

本書には、どのような人物が神様に用いられ、どのような人物が退けられるかが鮮明に描かれています。著者は、神様の御旨にかなう王が、そして王国がどのようなものであるかを伝えようとしました。また、人間である王の有為転変を記すことにより、不変の神様の真実、神様の民に対する変わらない愛を伝えようとしました。

ハンナが真剣に祈った理由（第1サムエル1-7章）

一人の夫に二人の妻が仲良く過ごす事は難しいようです。もう一人の妻ペニンナから心の傷口に塩をすり込むようなことを言われた不妊の妻ハンナは、夫の彼女に対する愛でも癒されることなく、時間があれば神殿に上り、神様に祈りました。ハンナの祈りは黙祷ではありましたが、余りにも熱心にささげられたので、祭司エリの目には酒に酔っていると見えました。酔っているどころか、真剣にその心を神様の前に注ぎ出して祈っていたことを知ったエリは、その祈りが聞かれることを語りました。ハンナの祈りは応えられ、彼女に男の子が生れました。彼女はその子をサムエルと名付けました。そして、彼女が以前神様の前に誓約した通り、サムエルをナジル人として神様にささげました。祭司エリには二人の息子がいましたが、彼らは不非行と不信仰の故に(2:12-17)、神殿で働くことはふさわしくなかったので、神様はサムエルをイスラエルの預言者、士師と任命しました(3章)。

ペルシテ人はイスラエルを攻撃し、神の箱を奪い、祭司エリの2人の息子を含む3万人のイスラエル人を殺しました。しかし、エベン・エゼルの神様は奪われた契約の箱を用い、サムエルの霊的支援(祈り)によってイスラエルに勝利をもたらせます(5-7章)。

王を求める民（第1サムエル8-15章）

これまでのイスラエルの不安定は、実は不信仰がその原因でありましたが、民は士師制に問題があると考えました。特に、サムエルの老齢化と息子たちの不信実を見て、他国のように王制を取り入れたいと申し出ました(8:20)。神様はサムエルに、民が捨てようとしているのは士師ではなく、イスラエルの神ご自身であり、これは出エジプトの時以来一貫して示してきた民の態度であると語ります(8:8)。そして、王制に伴う「王の権利」（8:10-18）をあらかじめ説明して警告するよう命じられました。

王制に伴う王の権利：王制を支えるためにはその下に仕える兵士、隊長、下働きの女性、家来が必要であり、民の息子や娘が徴用され、それらの任に当らせられる事実を覚えておかねばならない。非生産人口が新たに増加するので、そのために土地、家畜、収穫物の中から、これまでの10分の1に加えて、新たに10分の1税が重くのしかかってくる。後悔して泣き叫ぶ時が来ても、主はお聞きにならない。

しかし、民はすでに夢見る者となっていました。異教の国々がそうであるように、我々にも立派な一人の王が立てられるべきで、彼は裁判を行い、戦争が始まれば先頭に立ってりりしく突き進み、我々の戦いを戦うという図式が民の脳裏にはすでに描かれていました。神様はサムエルに、イスラエルの最初の王として一番美男子であり、誰よりも背が高かった**(9:2)**サウルに油を注ぐように命じました。サウルはアモン人に大勝利を納めたことで、イスラエルは彼こそ理想的な王だと思いました。しかし、サウルは良いスタートを切ったにもかかわらず、不従順の罪を重ねていくうちに、もはや神様の御声を聞けない状態となり、次第に深みにはまり、ついには滅びてしまいます。彼は、サムエルにだけでなく、自分の家族、家来たち、そして民に対して、むごい仕打ちを行います。こうしてイスラエルは、サムエルを通して与えられた神様の警告を無視して始めた王制の重圧を、すでに第一代の王から、嫌というほど感じていきます。

ダビデ：羊飼いから王へ**(**第１サムエル**16:1-**第**2**サムエル**10:19)**

聖書は、ダビデは神様の心にかなう人だ(使徒の働き13:22)と語ります。サムエルは羊飼いであったダビデに油を注ぎ、イスラエルの王となることを告げました(第1サムエル16:1-　13)。ダビデはサウル王の廃位と自分の王位継承を知っていましたが、サウル王が苦しむ度に、ダビデは立琴を弾き、その病状を治めました。

また、ダビデはペルシテの代表戦士ゴリヤテをたった1個の石を用いて倒す、といういう胸躍る戦果を挙げます。「生ける神の陣をなぶった」

ゴリヤテも、動物の1匹のように必ず打ち殺されるとダビデは確信していました(17:37)。ゴリヤテへの勝利を目の当りにして、サウルはダビデを誇りとし、喜びましたが、それは長くは続きませんでした。自分の王位を脅かすライバルとして、ダビデをねたみの目で見るようになったからです。結局、ダビデはサウルから離れ、逃避生活をしました(18-30章)。

ダビデの逃避生活に終止符を打つ時が来ました。サウルが戦死したからです(第1サムエル31章-第2サムエル1章)。サウルは死に、ダビデはもはやペリシテ人の地にとどまる必要はなくなり、ヘブロンへ戻り、ユダ部族の王となります(第2サムエル2章)。そして、後に全イスラエルもダビデを王として認め、「ダビデの町エルサレム」で国を治めることとなります(第2サムエル5-7章)。

預言者ナタンは、ダビデではなく、神様がダビデのために「一つの家」を造られると預言します。これは一つの家系であり、王朝で、ダビデの死後起される世継ぎが王国を確立し、彼こそが主の名のために一つの家を建てます。その王座は主によってとこしえまでも固く立てられると約束します(第2サムエル5:6-7:29)。この約束は、ソロモンの治世に成就しますが、更に深く遠大な成就は、イエス・キリストのうちに見られます。

姦淫と殺人（第2サムエル11-20章）

忠実な部下たちが戦場に赴き、激しい戦闘のさなかにあった時、ダビデは王宮にとどまり、怠惰な生活をしていました。そこに付け入られて、ダビデは大きな罪を犯してしまいます。また，それを塗り隠そうとしたために殺人の罪にまで引きずり込まれます。良心の麻痺してしまっていたダビデに預言者ナタンが遣わされ、たとえ話を用いて、鋭くダビデに迫ったので、ダビデは神様の前にひれ伏し、悔い改めます。この時を境として、ダビデの家は乱れ、ダビデ王国も揺ぎ始めました。

09　王国の分裂（列王記）

私たちは列王記を学びながら、イスラエルを南ユダ王国、北イスラエル王国と呼ぶようになります。場合によっては北イスラエル王国をサマリヤと称します。列王記は古代イスラエル王国の分裂の話をすばやく伝えています。二つの王国の分裂と崩壊の過程を精密に取材し、その原因に対する分析までも列挙しています。

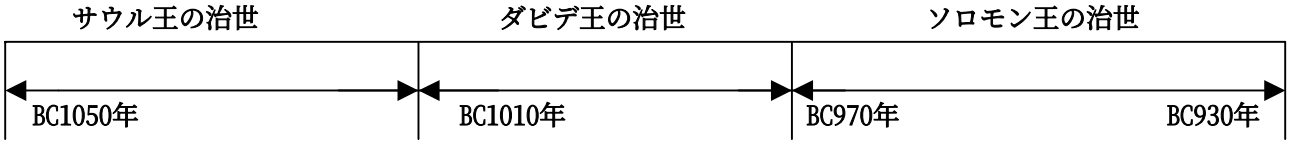
賢い王の愚かな結婚（第1列王記1-11章）

ダビデの死によって正式にソロモンが王位を継承します。ダビデは死の前にどうしても片付けなければならないものをソロモンの手にゆだねます。ソロモンは主の目の注がれたダビデ王朝の傑出性を前面に出し、予想通りの処理を緻密に完成させていきます。ダビデは死ぬ直前、若きソロモンに律法を守り、神様の道を歩むように(第1列王記2:1-9)遺言を残します。ソロモンはダビデの話に聞き従い、神様から「知恵の心と判断する心、富と誉れ(1列王記3:　9-14)が与えられます。第1列王記4章はソロモン王国の拡張と繁栄と平和を語っています。ソロモンは、知恵と富に満ち、三千の箴言を語り、彼の歌は一千五首もありました(第1列王記4:21-32)。

ソロモンが神殿を建築したことは有名です(第1列王記5-8章)。しかし、彼は結婚の問題については愚かでした。彼には「七百人の王妃としての妻と、三百人のそばめ」（第1列王記11:3）がありました。彼女たちの殆どは神様を知らなかった異邦人で、彼女たちはイスラエルに偶像崇拝をもたらせました。その結果、イスラエルは分裂する結果を招きます。

簡単な王の歴史

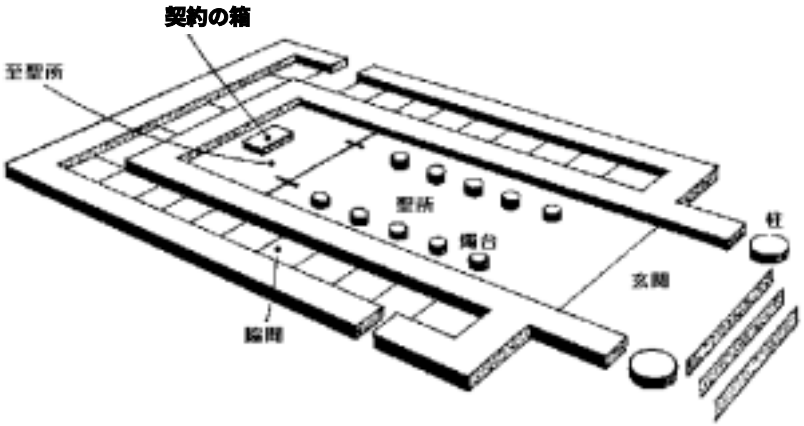
①分裂以前の統一国家



②王国の分裂

	北イスラエル王国	南ユダ王国
初代の王	ヤロブアム(前930-913年)	レハブアム(前930-909年)
最後の王	ホセア(前732-722年)	ゼデキヤ(前597-586年)
存続期間	約200年	約350年

ソロモンの神殿



王国の分裂（第1列王記12-16章）

高い税金を喜ぶ民はいません。ですから、ソロモンの息子であってもレハブアムの支持率は急降下しました。イスラエルの12部族の中で10部族が王国から脱退し、ヤロブアムを王とする新しい国、「(北)イスラエル王国」を作りました。ユダ部族とベニヤミン部族だけがレハブアムに忠誠を誓い、「(南)ユダ王国」と名づけました。ヤロブアムは北イスラエル王国の民が礼拝のためにエルサレム神殿へ行くことを嫌い、金の子牛を二つ造り、ベテルとダンに置いて礼拝するように命じました(第1列王記12:28)。北イスラエル王国は偶像崇拝により滅亡への道を

歩むようになります。また、南ユダ王国も偶像崇拝に走ります。しかし、彼らは悔い改めたことで、一時的ではありますが神様の祝福を回復し、国の寿命を伸ばすことができました。

信仰の山脈：エリヤとエリシャ（第1列王記17章-第2列王記13章）

預言者エリヤと彼の弟子エリシャはまるで大きな山脈であるかのようにイスラエルの堕落した王たちと腐敗した道で対立しました。預言者エリヤはアハブ王の治世に活動しました。預言者エリヤは神信仰から離れてバアル崇拝をするアハブを叱り、850人のバアルの預言者とアシェラの預言者をカルメル山に集めて宗教対決を行い(第1列王記18:18-)、エリヤの祈りによって「主の火が降って来て、全焼のいけにえと、たきぎと、石と、ちりとを焼き尽くし、みぞの水もなめ尽くしてしまった」ので、イスラエルは神様に立ち返ります。しかし、預言者エリヤは自分を殺そうとするアハブの妻イゼベルの話を聞き、ユダの荒野まで逃げ、えにしだの木の下で「自分の命を取ってくださる」(第1列王記19:4)ことを祈ります。神様はエリヤに新しい力を与え、神様が全てを統べ治めるお方であることを確信させた後に、エリヤに二人の王と新しい預言者エリシャに油を注ぐようにと命じました。

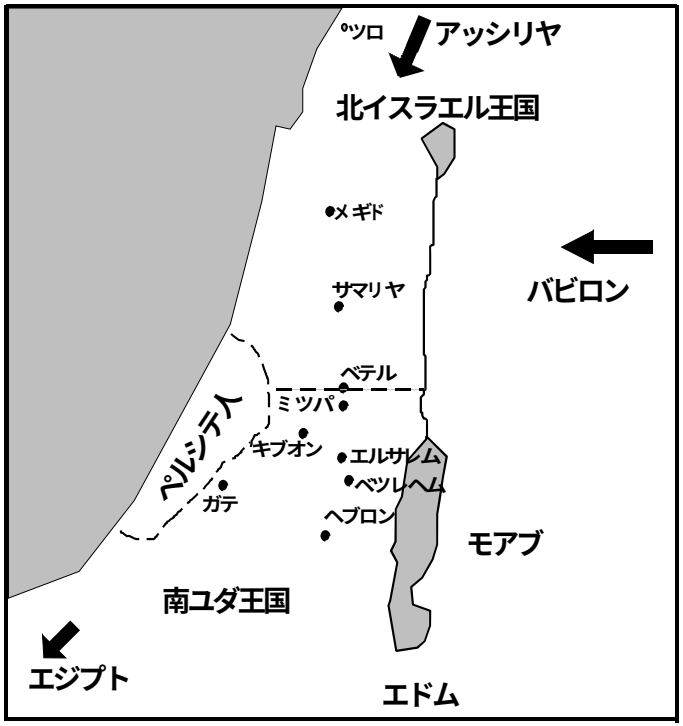
預言者エリヤは死なずに、天から下って来た一台の火の戦車と火の馬に乗って天へ上って行きました(第2列王記2:11)。第2列王記2-13章は、預言者エリシャの働きが詳しく書かれています。預言者エリシャはエリヤに「あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように」と求め、その通りになったと思われます。彼が多くのしるしと働きをなしたからです。預言者エリシャは北イスラエル王国だけではなく、南ユダ王国にまで王たちと指導者たちの悔い改めを求めました。これらすべては、イスラエルの霊的にすさんだ状態とそこに干渉せざるを得ない神様のあわれみの御手が預言者エリヤとエリシャを通して現われたことです。

北イスラエル王国と南ユダ王国（第2列王記14-25章）

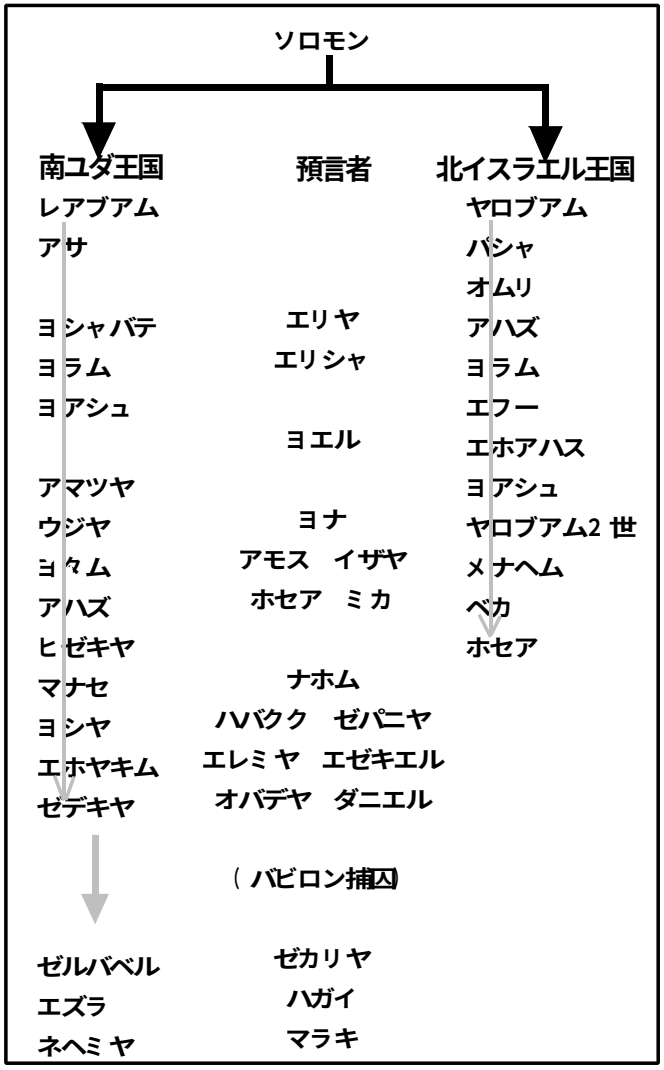
背信の王の罪の羅列に終るなら、「列王記」の意味はありません。結果はどうであれ、王国存続に具体的意味を与えるのは預言者たちであり、彼らの活動によって王国は辛うじて生き延びています。北王国は南王国存続とのバランス関係の中にあって、その位置の故に他の多くの預言者たちから大きな力を与えられていいます。

王と預言者たちの概略

イスラエル王国（紀元前約1100ー586年）



イスラエルは、サウル、ダビデ、ソロモンの時代には、全体が一つの王国でした。ソロモン以後、王国は、南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂しました。北イスラエル王国は、神に従わなかった故に、アッシリヤに滅亡されます。民も囚人としてアッシリヤへ連れて行かれます。南ユダ王国は、神のあわれみの故に、存続されますが、預言者たちに耳を傾けない姿は、北イスラエル王国と同じでした。それで、バビロンによってエルサレムが破壊（紀元前586年）され、民も捕囚としてバビロンへ連れて行かれます。



歴代誌とはどんな書物ですか？

ヘブル語聖書では歴代誌は一冊の書物です。その内容は、第2サムエル記と第2列王記と似たもので、反復しているような感じがします。しかし、歴代誌は明確な特徴があります。それは、書かれたのがバビロン捕囚から帰還した後であることです。イスラエルの民は、ペルシャの捕虜帰還政策によりバビロンから70年ぶりに帰還します。しかし、そこには異邦人が住んでいた荒地でした。それで、イスラエルは民族のアイデンティティの必要性を感じ、民族のルツを明らかにしようとしました。第1歴代誌は9章まで系図を書き記しています。また、事件そのものよりも事件の意味と重要性を強調する記述をしています。特に、歴史的理解よりも神様との霊的関係に焦点をおいて解釈しています。

第1列王記は平和と繁栄を求める統一王国から始まっています。しかし、第2列王記は敵に負けた無残な二つの王国の話で終結しています。第1列王記は知恵の王ソロモンがイスラエルを統治した話で始まりますが、第2列王記は外国の王が統治した話で終っています。統一王国の初期に建てられた神殿は分裂王国の末期には破壊されています。ただ微かな希望だけを残して列王記は終結しています。それは捕囚からの帰還に関す約束です。

10　捕囚から帰還（エズラ、ネヘミヤ、エステル）

イスラエル民族の国は南北に分裂してそれぞれの道を歩んで行きましたが、宗教的には数回の改革的な活動があったにもかかわらず、堕落の一途をたどって行きました。神様の警告を無視した結果、北イスラエル王国はアッシリヤ帝国により（前722年）、南ユダ王国はバビロニヤ帝国により（前586年）滅ぼされました。聖書の記事だけでなく、アッシリヤやバビロニヤの記録からも知られるように、多くの人が捕囚となり、神様の約束の地を後にして、異教の地へと移されて行きました。しかし、神様はイスラエルを見捨てたのではありません。捕囚が70年に及ぶというエレミヤの預言（エレミヤ25:11-12）と、クロス王の命令によって帰還することまで約束されました。

荷造りをしなさい（エズラ記1-6章）

神様はクロス王の命令によってバビロン捕囚から帰還すると、約200年前から約束しました（イザヤ45:1-13）。バビロンは3回にわたって（前605年、597年、586年）、イスラエルの民を強制的に移住させました。しかし、アンシャン出身のアケメネス朝のクロス王はバビロニヤ帝国を倒して（前539年）、ペルシヤ帝国を揺ぎない世界帝国にしました。

エズラ記は、クロス王がイスラエルの民を友好的に扱っていることとゼルバベルとエズラにより帰還することが書かれています。ダビデ王の子孫であったゼルバベルはエルサレム神殿の再建と政治的指導者としての役割を果たし、祭司出身の書記エズラは神殿礼拝を確立し、民に律法を教えました。

クロス王は、それまでの覇者のような民族の強制移住による反乱の防止、人材の登用という占領政策を廃して、むしろ捕囚になっていた諸民族を帰国させ、それぞれの宗教を尊重することによって、国の平穏を図る政策を採用しました。前538年にはイスラエルの帰還を命じ、それに応じた約5万人のユダヤ人は帰還し、ゼルバベルの指導下で神殿再建の工事をしました。しかし、工事は順調ではありませんでした。特に、イスラエルがアッシリヤに滅ぼされた際に他の地域から移住させられた人々の子孫で、後のサマリヤ人の祖である人々からの妨害があったからです。長期間にわたって(クロスの時代からダリヨスの治世の時まで)神殿工事を中断することになりましたが、神殿再建を終え、奉献式（エズラ6:16-18）まで行うことができました。

第2次帰還（エズラ記7-10章）

ゼルバベルが49,697名を連れて帰還して80年後、エズラが1758名のユダヤ人を連れて帰還しました。彼らはバビロンからエルサレムまでの約1500㎞の道程を護衛隊も付けずに帰還しました。当時の長途の旅行は決して安全とは言えず、強盗や野獣に襲われる危険が多かっことから、信仰の冒険の道程でした。出発後、約4ヶ月でエルサレムに到着したエズラは混宗婚を禁止(エズラ9:1-5)、律法に聞き従うように教えました。

この時代の主な年代

バビロン捕囚の70年は概数だと思われます。別の解釈によると前586年のエルサレム崩壊と前515年の第2神殿の完成の間の年数であると言います。また、ある学者は強制移住させられた前605年から神殿の基礎が置かれた前536年の間の年数であると言います。バビロン捕囚の時代の主な出来事とその年代をまとめました。

①第1次バビロンへの強制移住(前605年)
②第2次バビロンへの強制移住(前597年)
③第3次バビロンへの強制移住(前586年)
④バビロンの滅亡(前539年)
⑤クロスの勅令(前538年)
⑥1次捕囚からの帰還(前538年)、ゼルバベル
⑦神殿の基礎が置かれる(前536年)
⑧神殿の再建が完成される(前516年)
⑨2次捕囚からの帰還(前458年)、エズラ
⑩3次捕囚からの帰還(前444年)、ネヘミヤ

ネヘミヤの悲しみ(ネヘミヤ1:1-2:10)

献酌官は重要で有力な特権的地位でした。王の後宮で仕える者は通常宦官であったことから、ネヘミヤも宦官であった可能性もあります。アルタシャスタ王の献酌官であったネヘミヤは、ある日彼はエルサレムの荒廃した様子と民の悲惨な状態について知らされます。ネヘミヤはエルサレムの城壁を建て直すために王に請い、帰国の許しを得て、総督に任命されました。しかし、サマリヤの総督サヌバラテとアモンの役人トビヤはネヘミヤを歓迎しませんでした。

城壁の再建(ネヘミヤ2:11-7:73)

ユダヤの総督としてエルサレムに来たネヘミヤは城壁の状態を調べ、信仰的な面だけではなく、王が与えた許可や援助を具体的な証拠で示して政治的な不安を取り除き、ユダヤ人の計画実行の意欲を引き出しました。城壁の再建には妨害、重労働、困難などが伴いました。反対者たちは、ネヘミヤを殺害または失墜させてエルサレム再建を中断させる計画を立てましたが、城壁の突貫工事は52日で終わりました。

民の信仰も再建する（ネヘミヤ8-13章）

城壁再建が完成した感謝と奉献を行なう前に、エルサレム警備の命令と霊的準備が必要でした。エズラは特別なイベントを通して民の信仰をも再建しました。エズラの特別イベントの中で目立つものは、モーセ五書を朗読することでした。そして、聖書の明快で力強い解き明かしは、民の心を鋭く探り、深い罪の自覚をもたらしました。悲しみの涙にくれる民に、ネヘミヤたちは、ラッパを吹き鳴らす聖なる日として、神様の赦しの憐れみと恵みの故に喜ぶようにと命じます。

王の大宴会(エステル1-2章)

ペルシヤの王アハシュエロス(クセルクセス1世、前486―465年在位)は、首長たちのための盛大な宴会を催しました。多分ギリシヤ遠征に必要なものの調達と遠征中の帝国内での反乱の防止などの意図での宴会であったと思われますが、すべて事がうまく運んだので、王妃の美しさを自慢するためにワシュティを宴会に呼びました。彼女がどうして拒否したかは定かではありませんが、王の命令に従わなかったことで失脚されます。

恐らくギリシヤ侵攻に失敗して大敗し、失意のうちに帰国してから、敗戦の痛手を慰める王妃がいないので、一層の寂しさと悲哀をかこっていた王を見兼ねて、側近が新しい王妃の選定を提案します。エステルは王妃候補者に選ばれ、やがて王妃となりました。ペルシヤの宦官であったモルデカイはエステルに彼女自身の生まれを明確にしないようにと助言をします。王の暗殺計画をエステルがモルデカイの名で報告したことで、エステルとユダヤ人であるモルデカイの間に行き来があることが知られても、明らかにしないでおくようにとの配慮からです。

挨拶を拒むモルデカイ(エステル3-4章)

エステルが王妃となってから4年後、アマレク人の王アガグの子孫ハマン（エサウの子孫）が王の信任を得て新しい権力者となります。ハマンの地位がモルデカイより高かったので、モルデカイはそれに応じた礼をすべきでしたが、拒みました。モルデカイは、ハマンが王に取って代ろうとする野望を疑っていたのかもしれません。モルデカイの勇気ある態度に、親ハマン派はもちろん、面従腹背の思いでハマンにひれ伏していた者も、自分たちの怯懦を非難しているように見えるモルデカイがいつまで強気でいられるかを見るために、わざわざハマンに報告しました。特に、モルデカイがユダヤ人であることをハマンに告げ、ユダヤ人の宗教的、歴史的敵意でハマンにはひれ伏さないと言っていたので、ハマンはユダヤ民族の根絶を計画しました。王も許可を下します。

ハマンの意図のようにはならず（エステル5-7章）

ハマンにひれ伏さなかった理由が何であれ、このユダヤ人虐殺の命令が自分のハマンに対する態度から発しているのを知っていたモルデカイは、王妃エステルに知らせます。民族の抹殺という危機に対してエステルは命をかけて王に会いに行く決意をし、計画を立てます。それは王とハマンだけの宴会を催すことですが、ハマンはその間、モルデカイを殺すための準備をします。「主は王から眠りを奪った」と記されている外典のエステル記（ギリシャ語）もありますが、王は不眠の故に年代記を読み、モルデカイが王の生命を救う働きをした記録から、彼に褒賞が与えられていなかったことを知りました。それで王はモルデカイに最高の栄誉（ハマンの提案で、王と全く同じ姿をすることで市民に栄誉を知らせるという大胆な提案）で報います。処刑するはずのモルデカイを王が最高の栄誉で報いたことで、ハマンは自分の没落を予感し、エステルに命請いをしますが、王の目には王妃を乱暴するような姿として映り、ハマンはモルデカイを殺そうとして準備していた柱で殺されます。

ユダヤ人の勝利(エステル8-10章)

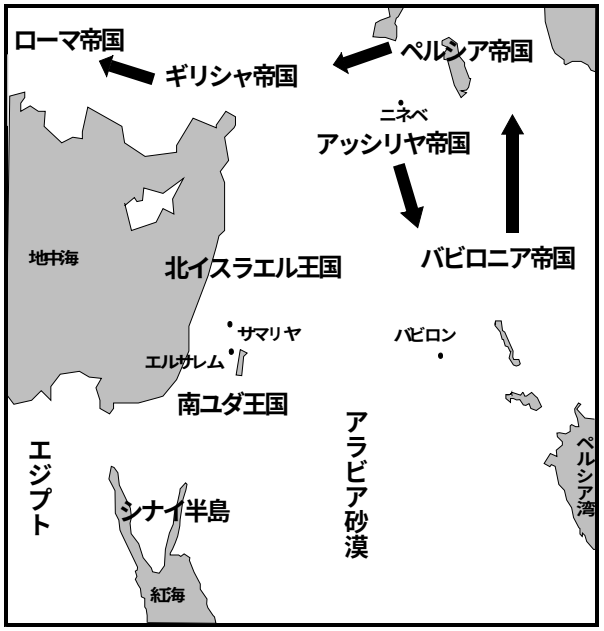
ハマンが処刑され、禍根は絶たれましたが、王の名で公布された法令はまだ有効でありました。それで、王はユダヤ人を殺そうとする者に抵抗して正当防衛のために殺してもよいという新しい法令を王の名で公布して、実際上、先の法令を無効にする策をとることにしました。形勢はユダヤ人に有利になりましたが、シュシャンではハマンの息子たちを中心にした反ユダヤ人派が結集して侮りがたい勢力になっていたこ

とが、戦死者数とこの町に限って2日間にわたる戦いが認められたことから知られます。

ユダヤ人は生存と勝利の祝宴を行って喜びました。そして、祝祭の意義を正しく記念するように、ハマンの計画やその破綻、ユダヤ人の勝利を要約し(9:24-25)、発端となったくじ、プルからこの祝日をプリムと命名しました(9:30)。

パレスチナの支配者たち

①イスラエルの分裂王国（前922年）
②北イスラエル王国の滅亡（前721年、サマリヤ陥落）
③南ユダ王国の滅亡（前586年、エルサレム陥落）
④アッシリヤ帝国（前1100～612年、ニネベ陥落）
⑤バビロニア帝国（前612～539年、バビロン陥落）
⑥ペルシア帝国（前539～333年、帝国の崩壊）
⑦ギリシャ帝国（前333年～63年、帝国の崩壊）
⑧ローマ帝国のパレスチナ支配（紀元前63年～）



11　詩歌（ヨブ記、詩篇、箴言、伝道者の書、雅歌）

旧約聖書の各書巻は、「モーセ五書」・「歴史書」・「詩歌」・「預言書」という 4 つの区分に沿って並べられていて、ヨブ記はそのうち詩歌に入れられています。このような区別は紀元 4 世紀のウルガタ訳聖書以来の伝統であります。

試練に会うヨブ（ヨブ記2-3章）

「ウツの地」がどこなのかはよくわかりませんが、70人訳の追加文には、シリヤ語の書物によると断りながら、エドムとアラビヤの境にあるアウシティスだとしています。ヨブについては、エゼキエルが義人の代表として名前を挙げている(エゼキエル14:14、20)のと、ヤコブが耐え忍んだ人の例として挙げている(ヤコブ5:11)だけです。ヨブという名は、ヘブル語の語源から「敵意を持たれた者」「嫌がられた者」、アラビヤ語の語源から「神に立ち返った者」と意味付けることができますが、正確な意味や語源は不明です。ただ最近の研究から、ヨブは前2千年期の西方セム語族のごく一般的な名前だったことがわかりました。ですから漠然としたものですが、ヨブは前2千年前のアブラハム時代の、アラビヤ砂漠の境辺りに住んでいたイスラエルとは関係のない人物だと思われます。

ヨブは、いつも神様を畏れ、悪から離れた人で、一人の妻と7人の息子と3人の娘を愛した家庭を築きました。ヨブは羊7千頭、らくだ3千頭、牛5百くびき、雌ろば5百頭などなど、巨富でした。しかし、世界を行き巡り、人を監視し、鋭くその罪を暴き、神に訴える者サタン(敵対者、告訴する者という意味)はヨブが主に従っているのは、主が神であるからではなく、家族や財産を与えられ、守ってもらっているからではないかと鋭く批判します。これは、人は自分の利益にならないのに神様を畏れるものではないというサタンの人間理解を表しています。神様はサタンの訴えを受けて立たれ、ヨブを試みることを許します。

この場面はヨブ記を理解する上で決定的な意味を持っています。これからヨブの苦難の理由を巡って、ヨブと友人たちとの議論が展開されていきますが、この場面にはその本当の理由が提示されているからです。ヨブ記は、最初から真相がわかっていて、登場人物が真相を発見する過程を描いた書物です。ヨブ自身はその真相を知らない、知らないからこそ信仰上の葛藤であり、信仰の試練と言えるものです。

ヨブには1つの災いの報告が終らないうちに次の災いの報告が届くという具合に、矢継ぎ早に災いが起り、しかもその程度が次第に激し

くなり、突風による家の倒壊で息子たちが圧死するという事件で頂点に達します。そして、皮膚が象の皮のようになる象皮病のような皮膚病で苦しみました(ヨブ2:7、13、7:5、30:30)。更に、心身共に衰弱したヨブに、最も信頼している者の言葉「それでもなお、あなたは自分の誠実を堅く保つのですか。神をのろって死になさい。」(ヨブ2:9)によって致命的な打撃を受けます。しかし、ヨブは神様をのろわず、「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか」(ヨブ2:10)と妻を説得し、罪を犯すようなことはしませんでした。

ヨブの3人の友人(ヨブ記3-37章)

ヨブの惨事を聞き付けて、遠くから3人の友人がやって来ました。みなヨブと同じように遊牧民の豪族であったと思われます。友人たちの来訪と共にサタンはどこへともなく姿を消しますが、サタンの試みが終ったわけではありません。ヨブは彼らとの対話によって、心の奥にあった神様に対する深い疑問や反発が引き出され、激しい内面的な葛藤を経験します。最初の試練はヨブの周りのものをはぎとり、第2の試練は肉体と人間的な頼みをはぎとりましたが、友人たちとの対話は信仰的確信をはぎとろうとしました。3人の友人は純粋にヨブのためを思っていましたが、知らずして、サタンの道具となっていました。

3人の友人とヨブの対話の要約

1.ヨブの嘆き(3章)

2.第1回弁論(4-14章)

①エリファズの弁論(4-5章)：エリファズの主張には、「不幸には必ず原因がある(因果応報)、4:7」と「人は神の前に正しくありえようか」(4:17)という2本柱があります。

②ヨブの答え(6-7章)：ヨブは友人たちに対しては自分の潔白を主張しましたが(6:24、29-30)、神様に対しては自分の罪を認めています。ヨブにとって潔白であることは、完全無欠であることではありませんでした。しかしヨブは、将来に何の希望も持てないのに苦しみに耐えなければならない自分の悲惨を嘆き、死を願います。

③ビルダデの弁論(8 章)：「神は正義を貫かれる方だから、子供たちが罪を犯して、苦難にあったとしても、熱心にかつ純粋な心で神にあわれみを請うなら、神はすぐにヨブの家を回復し、繁栄させて下さる」と言います。これはエリファズが言ったことの要約にすぎません。

④ヨブの答え(9-10章)：「神は悪者を滅ぼされるが、潔白な行いをし、あわれみを請うなら、神は祝福を回復される」ということは、ヨブ自身が信じていることです。しかし、ヨブの問題はどうすれば祝福されるかではなく、潔白な者がなぜ苦難にあわなければならないかであります。そこでヨブには神様が言い分も聞かず、潔白な者を罪に定めることが不条理に思われました(9:32-35)。ヨブは自分を助けてくれる仲裁者を見付けることができないまま、なぜ命を与えられたのかと直接神様に不平をぶちまけます。

⑤ツォファルの弁論(11章)：「ヨブが自分は潔白なのに、神が一方的に罪に定められる」というのを聞いて、ツォファルは「あなたはあざけるが、だれもあなたを恥じさせる者がない」と、神様に不満をぶちまけたことを非難します。

⑥ヨブの答え(12-14章)：ヨブは、「あなたがたは人だ．あなたがたが死ぬと，知恵も共に死ぬ」（2節）と、彼らの知恵が人間の知恵にすぎないこと、人間と共に死に絶える知恵であることを指摘します。更にヨブは、「荒らす者の天幕は栄え、神を怒らせる者は安らかである」(6節)と、友人たちの主張する因果応報が経験的事実に合わないことも指摘します。

3.第2回弁論(15-21章)

①エリファズの第2回弁論(15章)：エリファズはヨブの言葉をむなしい知識、無益な言葉だとけなし、彼の罪を証明しようとします(4節)。7節からはヨブの高慢を責めます。

②ヨブの答え(16-17章)：ヨブは、「あなたがたはみな，煩わしい慰め手だ」(2節)と反発します。そしてもし立場が逆だったら、自分も同じように立派な言葉を並べ、「口先だけであなたがたを強くし、私のくちびるでの慰めをやめなかったことだろう」(6節)と皮肉ります。6節からはヨブの嘆きが神様への訴えへとつながっていきます。

③ビルダデの弁論(18章)：「不正をする者の住みかは、まことに、このようで」(21節)あると、型通りの因果応報説を繰り返します。彼は、すっかりヨブを悪者と決め付けていて、ヨブの無罪の叫びは全く理解しようとしません。

④ヨブの答え(19章)：因果応報の決り文句を繰り返すビルダデに、ヨブは飽き飽きしたように、「いつまでそんな論法で私を悩ませるのか」(2節)と言い、誤って罪を犯したことがあるとしても、こんな苦難に値するようなことは何一つしていないと反論します。そして、神様が正義を曲げ、不当な扱いをされたのだとまで言い切っています。

⑤ツォファルの弁論(20章)：ツォファルは、ヨブが19:25で「私を贖う方は生きておられる」という劇的な告白をしたことには何も触れていません。彼は人類の創造以来、因果応報は確立しており、ヨブが悪人であることははっきりしているのに、よみにおいて無罪宣告を受けることを想像するヨブを蔑みます。

⑥ヨブの答エ(21章)：ヨブのこれまでの弁論はどちらかというと自己弁護でありましたが、この章から友人たちの因果応報説に対して全面的な反論に出ます。「私を贖う方は生きておられる」という信仰的確信を持って今度は友人たちと同じレベルに立って、真正面から議論します。

4.第3回弁論(23-37章)

①エリファズの弁論(22章)：「人は神の役に立つことができようか。･･･あなたが正しくても、それが全能者に何の喜びであろうか」(2-3節)を言って、ヨブの潔白を、たとい潔白だとしても、それが神様にとってどんな意味があるかと主張し、ヨブを責めます。

②ヨブの答エ(23-24章)：ここではエリファズに対する反論というよりも、心の中の思いをありのままに述べています。ヨブは、「きょうもまた、私はそむく心でうめき、私の手は自分の嘆きのために重い」(2節)と、その心境を吐露します。ヨブの心には絶えず神様に対する反感が込み上げてきて、抑え切れないような状態でありました。ヨブは、「ああ、できれば、どこで神に会えるかを知り、その御座にまで行きたい。私は御前に訴えを並べたて、ことばの限り討論したい」(3-4節)と、その願望を述べます。

③ビルダデの弁論(25章)：ビルダデは、神はあらゆる点で絶対的に掛け離れた方であり、人はたとい人間のレベルでは聖くても、その神の前では聖くあり得ないと語ります。

④ヨブの答エ(26章)：ヨブは痛烈な皮肉をもって答えます。それは、誰の霊によって示された言葉か、神様の霊によって示された言葉では

なく人間の言葉にすぎないではないか、だから神様を知りたいと思う者の本当の助けにはならないのだと論じます。

⑤ヨブの最後の弁論(27-31章)：ヨブはツォファルが語り出すのを待ちましたが、彼は語りませんでした。そこでヨブは自分の潔白を主張し続けます。そしてヨブの罪を責める友人たちに対しては、「あなたがたを義と認めることは，私には絶対にできない」(5節)と言い、自分の正しさに固執し、友人をさばくような姿勢を鮮明にします。

4. エリフの弁論(32-37章)

ヨブが長い弁論を終えた時、エリフという人が突然現れ、弁論を始めます。彼に対して「ラム族のブズ人、バラクエルの子」ということ以外何も説明しません。今突然話し出した理由を、「ヨブが神よりもむしろ自分自身を義としたから」、また友人たちが「言い返すことができなかったから」（3節）とし、怒りを燃やし、若輩なので遠慮していたが、抑え切れなくなって口を開いたと説明します。エリフはほかの友人たちと同様、ヨブの言葉を本当には理解していない面もありますが、ヨブが陥っていたある霊的高慢に気が付いていました。エリフは、ほかの友人たちのように因果応報の法則からその罪を説くのではなく、苦難の訓練としての目的と神様の義の高さを語って、その霊的高慢を指摘します。エリフは、ヨブが神様に出会うための橋渡しの役割を果すことになります。

宇宙の統治者であられる神様(ヨブ記38-42章)

ヨブは友人たちの話を聞いた後、神様から啓示を受けます。神様はヨブに、人は宇宙の全てを知ることのできないと教えます。同時に、霊的神秘はなお更のこと、人がその全てを理解することは出来ないと教えます。ヨブは、自分の心の中に潜んだ自分を神と対等にしようとした高ぶりを掘り起し、何も知らないのに、全能の神に意見し、そのやり方を批判するという、造られたものの分際を越えた高ぶりを告白します。

詩篇

ヘブル語聖書の名称は「賛美の本」で、「詩篇」という名称はギリシャ語聖書から由来しました。詩篇は、個人的な信仰を生々しく描写したもので、人間の心から生まれ出た神様に対して直接的な詩的感情を表現しています。勝利や喜び、希望のみならず、恐れ、疑い、悲劇など、信徒が味わうすべての宗教的な感情をも表しています。また、救いの経験を多く語り、過去の救いの経験を覚えやすく語ることで、試みられる時に励ましを得させます。神殿の賛美歌でもあることから、個人の信仰経験のみならず神礼拝にまで導きます。

詩篇は全部で 150 篇ですが、詩篇 90 篇はモーセが、ダビデは 73 個の詩を、アサブの詩(50,73-83 篇)やヘマンの詩(89 篇)、ソロモンの詩(72,127 篇)などがあります。また、詩篇の中には「アクロスティク」(アルファベットの順で、覚えやすくするため)があります（詩篇 119、9-10 篇、111-112、145 篇など)。詩篇の中で一番長いのは 119 篇で 179 節、一番短いのは 117 篇で 2 節です。

詩篇はモーセ五書の構成のように区別されてきました。

①第Ⅰ巻(1-41 篇)　　― 創世記(創造)
②第Ⅱ巻(42-72 篇)　― 出エジプト記(贖い)
③第Ⅲ巻(73-89 篇)　― レビ記(礼拝)
④第Ⅳ巻(90-106 篇)　― 民数記(荒野でのさ迷い)
⑤第Ⅴ巻(107-150 篇) ― 申命記(神様の御言)

詩篇の概略

第Ⅰ巻(1-41 篇の概略)

詩篇 1 篇；義人と悪者の道・律法の中心点でもあり、詩篇の中心的な教え。
詩篇 2 篇；キリストの勝利への歌(ヘブル 1;5 参照)
詩篇 3 篇；希望がない時、神様には希望があることを歌う。

詩篇 4 篇；危機が去り安堵の中での夕べの祈り。神様による喜びの大きさを歌う。
詩篇5篇；偽善的な者たちからの苦しみを訴えて神からの緊急の助けを求める祈り。
詩篇 6 篇；主に懲らしめられた後(病)の救いを求める祈りと確信を歌う。悔い改めの祈り。
詩篇 7 篇；義なる裁判官に自分の無罪が立証されるように求める。
詩篇 8 篇；神様の慈愛を歌う。創造と人間、美しさも歌う。
詩篇 9 篇；9 篇は 10 篇と共に、不完全ながらアルファベット詩であって、70 人訳では 1 つの詩篇とされる。9 篇は国々に対する主のさばきの宣言である。
詩篇 10 篇；国内での主のさばきを求める祈りである。直ちに悪者を裁くように祈る。

詩篇 11 篇；困難と命の危険の中で真のより所は社会的な法や正義ではなく神であると歌う。
詩篇 12 篇；人の言葉は不誠実だが、神様の言葉は変わらない真実だと歌う。
詩篇 13 篇；すぐ救われなくても心は救いの確信でいられることへの歌。
詩篇 14 篇；堕落した人類に神の国が建てられることを祈る(53 篇と似ている)。
詩篇 15 篇；神様に礼拝することができる者への確信。
詩篇 16 篇；信仰による交わりの喜びを歌う。危機の直面しても神様に信頼できること。
詩篇 17 篇；今の艱難の中での救いを求める。
詩篇 1 8 編；サウルからの完全な勝利への感謝の歌（第 2 サムエル 22 章が背景)。
詩篇 19 篇；自然を通して神様を賛美。そして神様の支配を歌う。
詩篇 20 篇；戦いの臨む前の詩。とりなしの祈りで勝利への確信を歌う。

詩篇 21 篇；20 篇の続きで、圧倒的な勝利に対する感謝の歌。
詩篇 22 篇：見捨てられた者の救いへの祈り。ダビデにはこのような経験がない。

詩篇 23 篇；神様の守りと完全な交わりを歌う。主はわが牧者として有名な歌。
詩篇 24 篇；大きな勝利―永遠の門に入れることが許された者の歌。
詩篇 25 篇；民への慈愛と赦しを求める。謙虚な信仰者の祈りでアクロスティクの詩。
詩篇 26 篇；自分の完全性と神様からの立証を求める詩。
詩篇 27 篇；敵の前でも神を待ち望むことで力を得る。勇気ある信頼を歌う。
詩篇 28 篇；悪者と義人との区別への確信を歌う。
詩篇 29 篇；自然現象も神様の力によると語り、偶像崇拝者を論破する詩。
詩篇 30 篇；致命的な危険からの脱出と回復を歌う。神殿への賛美として用いられる。

詩篇 31 篇；極度の苦しみの中でささげた祈りを、後に救いの喜びと感謝をもって歌う。
詩篇 32 篇；罪を告白するまでの苦しみと悔い改め、赦された喜びの中での決意の歌う。
詩篇 33 篇；敵からの救いを歌ったもので、神様に信頼できることを歌う。
詩篇 34 篇；自分の誇りを捨てて主に信頼する時に主の素晴らしい恵みを味わうことを歌う。
詩篇 35 篇；迫害の下にあっても信仰の行いを続けようとする者の祈りと誓いの詩。
詩篇 36 篇；神の恵みのうちに生きる幸いを歌う。
詩篇 37 篇；神様に信頼して善を行う者に神様が必ず豊かな報いを与えて下さることを歌う。
詩篇38篇；神様に向かってあわれみと赦しを求め続ける詩。
詩篇 39 篇；明るい笑顔と心で人生を全う出来ることを寄留の者として願い求める詩。
詩篇40篇；今の苦境の中で、以前の神様の恵みを感謝し、服従を決意し、救いを確信する。

詩篇41篇；弱者に対する神様のあわれみと高慢なお者に対する報いを求める歌。

第Ⅱ巻(42-72 篇の概略)

詩篇 42 篇;問題に直面した時、問題の現象ではなく本質を考えるべきことと賛美することへの希望を歌う(本来は 43 篇と 1 つだと思われる)。
詩篇 43 篇；思い乱れていることを抑え、聖なる山への渇望を歌う。
詩篇 44 篇；苦難の中にある国民の叫び，国の救いのための祈り。
詩篇 45 篇；詩篇の雅歌。「ゆりの花」(愛の歌)と呼ばれる。
詩篇 46 篇；神様の都、ゆるがないエルサレムが大きな励ましであったことを歌う。
詩篇 47 篇；偉大なる神様への賛歌。神の国の到来（神の民として集められること）を歌う。
詩篇 48 篇；万軍の主の都エルサレムを愛される神様への喜びの賛歌。
詩篇 49 篇；神様に望みを置く者の死後に関する確信を歌う。
詩篇 50 篇；審判者であられる神様を歌う。十戒の神礼拝と隣人愛をも歌う。

詩篇 51 篇；悔い改めの模範的な祈り。
詩篇 52 篇；悪人と義人を対照し、主の御名を聖徒たちの前で待ち望む。
詩篇 53 篇；14 篇と類似。神様の王国が立つことを渇望しながら歌う。
詩篇 54 篇；悪者から神様の救いに対する感謝の歌。
詩篇 55 篇；親しい者に裏切られた信仰者が重荷を神様に委ねて救われる事を歌う。
詩篇 56 篇；亡命者(聖所から遠く離された人々)の歌。
詩篇 57 篇；神様に哀れみを求める。それで神様の栄光が、全世界で崇められることを祈る。
詩篇 58 篇；神様の公正な裁きを求める歌。不義の裁判官に対して呪う。
詩篇 59 篇；弱者のと救いへの確信、そして敵の審判を求める祈り。
詩篇 60 篇；戦闘への祈り(勝利は神様にあることを歌う)。

詩篇 61 篇；神の都エルサレムから離れた状況と、神の幕屋に帰ることを願い確信する歌。

詩篇 62 篇；神を信頼することと人間を信頼する不安定を対照した歌。

詩篇 63 篇；61,62,63 篇は荒野での詩。エルサレムから遠く離れたことで慕う歌。

詩篇 64 篇；義人の敵に神の審判が下されることを求める歌。それで神様を更に信頼する。

詩篇 65 篇；収穫感謝の歌。

詩篇 66 篇；感謝の歌。13 節からは 1 人称になって、王が民を代表し神様に感謝をささげる。

詩篇 67 篇；あなたの御救いがすべての国々の間に知られることを求める歌。

詩篇 68 篇；勝利と復讐に対する感謝の歌。

詩篇 69 篇；懺悔の後に救いを求める。豊かなあわれみに従った救いを歌う。

詩篇 70 編；直ちに救いを、そして感謝の歌を。

詩篇 71 篇；年輩者による歌で、祈りに答えられたことを感謝しつつ祈る。

詩篇 72 篇；神様の統治を歌う。集められた詩だとも思われる。

第Ⅲ巻(73-89 篇の概略)

ヘマン、アサフ、エタンはレビ人でダビデ時代の音楽担当者である（第 1 歴代誌 15:17,19）が、聖所の廃墟の記述などからバビロンの時代の人物だと思われる。神名エローヒームが多く用いられ、また礼拝と神殿が中心テーマとなっている。

詩篇 73 篇；信仰の試練と聖所における信仰の回復・勝利の歌。

詩篇 74 篇；廃墟の聖所の前で過去に哀れまれた民を思い起こし、助けて下さることを祈る。

詩篇 75 篇；勝利を祝う感謝の歌。神様の審判で悪人は滅ぼされ、義人は救われると確信。

詩篇 76 篇；神様の審判が知られたことと、神様の威厳を歌う。

詩篇 77 篇；苦しみの解決策としてたましいを省み、訴えている。

詩篇 78 篇；イスラエルの歴史を通して、神様の恵みを忘れないようにと訴えている。

詩篇 79 篇；74 篇と類似性があり、廃墟の神殿のために祈る。

詩篇 80 篇；イスラエルの祝福と裁きを葡萄の木で描写し、神様による救いを求める。

詩篇 81 篇；祭り(新年の祭と仮庵の祭)の日の感謝の歌。
詩篇 82 篇；神の代理人としての裁判官たちの審判を語る。
詩篇 83 篇； ユダを滅ぼうとする敵の前で神の救いが示されることを歌う。
詩篇 84 篇；詩篇 42、43 と同じ篇で巡礼の歌で、神殿に近付くことが出来る喜びを歌う。
詩篇 85 篇；神様の約束(神の王国の復興と確立)に対する確信を歌う。
詩篇 86 篇；敵の前での救いを求める歌。救いによって更に確信をもつ。
詩篇 87 篇；詩篇 86:9 の延長の歌。シオンが神の都として世界の首都となることを歌う。
詩篇 88 篇；悲しみの中での歌。個人的な苦しみの中からの訴えの歌。
詩篇 89 篇；神の約束と真実を信じ期待する信仰の歌。

第四巻(90-106 篇の概略)
詩篇 90 篇；神の人モーセの祈り。人間の虚しさと神様の永遠性を対比している詩。
詩篇 91 篇；困難の中で神による救いと解放を確信する歌
詩篇92篇；安息日のための歌。永遠の安息を確信し、悪が栄える現実の世界で神様を賛美。
詩篇 93 篇；神様の主権的支配を告白する 95-100 篇のグループの序論。理想的な王としての神様の支配に感謝する歌。
詩篇 94 篇；神様の王としての正しい審きと支配を求める祈り。神による正義の勝利を確信。
詩篇 95 篇；礼拝への招きと不従順に対する警告の典型的な賛美の歌。
詩篇 96 篇；主の王国の普遍性と支配を歌う。
詩篇 97 篇：主の到来の結果として展開される主の主権と義の確立を歌う。
詩篇 98 篇；バビロンからの解放に対する賛歌。96 篇の初めと終りに似ている。

詩篇 99 篇；聖なる統治者、祈りに慈愛を持って答える方に賛美を。
詩篇 100 篇；神殿奉献(前 516 年)の時に歌われたと考えられる感謝の賛歌。

詩篇 101 篇；主の王として来臨を願い、世界の支配者の都をきよめて準備したいとの告白。
詩篇 102 篇；自分の嘆きを主の前に注ぎ出した時の悩む者の祈り。
詩篇 103 篇；神様の赦しと救いに対する大きな喜びと感謝にあふれている歌。
詩篇 104 篇；自然と歴史が創造における神の力と知恵と恵みを歌う。
詩篇 105 篇；アブラハム契約に対する神の誠実さを歴史的に回顧し感謝している詩。
詩篇 106 篇；イスラエルの不信仰と不従順の歴史を回顧してざんげし，国の復興への祈り。

第Ⅴ巻(107-150 篇の概略)

詩篇 107 篇：ビロン捕囚から帰還した人々に対し、神様が様々な危機に際して恵みを示された例を挙げ、感謝をささげるように呼びかける。
詩篇 108 篇：周囲の敵意の中で助けを求める。感謝と共に霊的戦いに対する勝利を願う。詩篇 109 篇：詩人は貧しい者、弱い者を代表し、悪人への報復を祈る。
詩篇 110 篇：祭司的王に関する権威ある託宣。メシヤ詩篇だと呼ばれる。

詩篇111篇：111、112篇は共にアルファベット歌で、構造・内容・用語に共通点がある。神様のの力・善意・義・救いのわざに対する賛美。
詩篇 112 篇：神様畏れる者の繁栄・祝福の様を歌っている。
詩篇113篇：113-118篇は、「エジプトのハレルヤ詩篇」と呼ばれ、礼拝用として用いられる。天におられる主なる神様が弱者をあわれむことに対する感謝の歌。
詩篇 114 篇：過去の出エジプトを想起しつつ、新しい国家の誕生を喜び、主の恵みを賛美。詩篇 115 篇：周囲の敵意と偶像礼拝の空しさを意識し、主に信頼し，主の栄光を求める歌。

詩篇 116 篇：死の不安や絶望的な苦悩から救い出された個人的な感謝の歌。
詩篇117篇：全世界に主の礼拝への招きの歌。最も短い詩篇
詩篇 118 篇：喜びと感謝の言葉が最高潮に達している歌。
詩篇 119 篇：神の言葉への愛を語っている歌。各文字を 8 節ずつ用いて 176 節にまとめた。
詩篇 120 篇： 平和を願い、神様との交わりを求め、エルサレム神殿に上る巡礼の歌。

詩篇 121 篇：巡礼者を守られる神様を賛美。都上りの第 2 の歌。
詩篇 122 篇：巡礼者がエルサレムの町を眺めながらエルサレムの平和のために祈る。
詩篇 123 篇：嘲りと蔑みの中で、神に目を向けて助けを求める祈り。
詩篇 124 篇：救いに対する感謝の歌。
詩篇 125 篇：主の民が主の確かな防護壁によって守られ保持されるという確信の歌。
詩篇 126 篇：種を蒔くことと豊かな収穫で主の慰めを確信する歌。
詩篇 127 篇：神様への依存と神様からの祝福が全生活の基盤であることを歌う。
詩篇 128 篇：エルサレムの再建と繁栄の基盤が家庭の祝福にあり、家庭の祝福の基盤は、主を畏れ主の道に歩むことだと歌う。
詩篇 129 篇：歴史的な体験を通して迫害者から主が守って下さることを歌う(**124 篇と類似**)。
詩篇 130 篇：主の前にイスラエルの罪を告白し赦しを請い求める祈り。

詩篇 131 篇：現実の困難の中で平安と幸いを得る秘訣は信仰から来る謙虚さであると歌う。
詩篇 132 篇：ダビデ契約に基づく祝福を求める祈り。 巡礼者たちと先導者の応答形式の詩。
詩篇 133 篇：エルサレム住民の礼拝を通しての結合を喜び祝う歌。
詩篇 134 篇：巡礼者は神殿の祭司やレビ人に挨拶を送り、祭司は彼らに祝福を祈る。
詩篇 135 篇：134 篇を展開したもので、真実で偉大な主を賛美せよとの呼びかけ。

詩篇136篇：135篇と似ていて、神様の支配とイスラエルに対する救いのわざが歌われる。詩篇137篇：エルサレムでの礼拝の再開と破壊者バビロンに対する主からの報復を祈る。

詩篇 138 篇：捕囚からの解放への感謝と主による回復への確信の歌。

詩篇 139 篇：神様の全知、遍在、全能性を歌う。

詩篇140篇：敵の悪い企みからの救いと，敵の破滅及び正しい者に対する主の守りを祈る。140-143篇は類似点が多い。

詩篇 141 篇：試練と誘惑の中で、罪からの守りを求める夜の祈り。

詩篇 142 篇：主に希望を託し、救いを待ち望むイスラエルの祈り。

詩篇 143 篇：罪を悔い改め、速やかな赦しと恵みを昔のように期待し求める祈り。

詩篇 144 篇：勝利を与えて下さる主の恵みの故に平和と繁栄を確信する歌。

詩篇 145 篇：主の普遍的な恵みに全地の賛美を求める祈り。詩篇と呼ばれる詩。

詩篇 146 篇：神を助け手として信頼する者の歌。

詩篇 147 篇：エルサレムの復興を感謝する詩で、主の恵み深さを歌う。

詩篇 148 篇：全被造物が共に主を賛美するようにと呼びかける詩。

詩篇 149 篇：勝利の喜びと敵の敗北の両面が伴う神の支配を歌う。

詩篇150篇：最後の詩篇は詩篇全体の頌栄。「主をほめたたえよ」アーメン。

箴言

箴言は、「ことわざ」とか「格言」という意味で、人間生活や自然現象などを観察して得た知恵や知識に基づいて語った言葉であり、簡潔な表現を用いて人の心を打つような道徳的あるいは霊的真理を語っています。箴言は「主を恐れることは知識の初めである」と多くの箇所で強調しています。

知恵に耳を傾けなさい(箴言 1-9 章)

箴言 1:1-7 で本書の目的を記述した後、8 章まで 13 の知恵ある教訓に耳を傾けさせます。そして、9 章では知恵を受け入れる時と知恵を拒む時の結果(9:12、18)を語ることで、読者に知恵を心に留めるようにします。13 の知恵ある教訓は、

①知恵は災難から逃れさせ、安全に住まわせる(箴言 1:8-32)
②知恵は道徳的に有益である(箴言 2 章)
③知恵は信頼できるもの(箴言 3:1-12)
④知恵を得る者への祝福(箴言 3:13-20)
⑤知恵ある者と他者との関係(箴言 3:21-35)
⑥知恵の大切さ(箴言 4:1-9)
⑦知恵の道は、あけぼのの光のようだ(箴言 4:10-19)
⑧知恵ある者への祝福(箴言 4:20-27)
⑨不倫と貞潔に対する知恵ある教訓(箴言 5 章)
⑩知恵のない者への教訓(箴言 6:1-19)
⑪知恵により守られる生活(箴言 6:20-35)
⑫知恵ある者と誘惑(箴言 7 章)
⑬知恵がもたらせるもの(箴言 8 章)です。

格言の海(箴言 10:1-22:16)

この書物にある箴言の大部分の著者ないし収集者はソロモンで、ソロモンは 3 千の箴言を語ったと伝えられています（第 1 列王記 4:32）。その中で 374 の箴言がここに収録されています。ここにある箴言は大部分が 2 行から成っており、15 章までは 1 行目と 2 行目が対照をなす反意的並行法の形式のものが多く、16 章以下は 2 行目が 1 行目と同義的であったり、1 行目の意味を補足したりする内容のものが多くあります。私たちはここの箴言から生活の礎石となる多くの知恵を見つけることができます。

・正しい者と悪者(箴言 10:3、12:7、13:5、6、21)
・知恵ある者と愚か者(箴言 10:8、13:1、10、20、14:16、15:31、16:23、17:16、18:15)
・悟りある者と嘲る者(箴言 14:6、33、15:14、16:21、18:15、19:25)
・利口な者と弁えのない者(箴言 14:15、18、19:25、21:11)
・いのちと死(箴言 10:2、17、27、11:4、19、12:28、13:14、14:27、16:25、19:16)
・貧しさと富(箴言 11:4、28、13:11、14:20、18:11、19:4、7、22)
・原因と結果(箴言 10:4、13:11、18、19:15、20:13、21:5)
・言葉の影響力(10:19、11:9、12:18、23、14:3、15:1、16:27、17:27、28、18:13,20)
・法廷の倫理(箴言 17:23、26、18:17、21:15)
・訓戒と懲らしめ(1 箴言 0:17、12:1、13:18、15:33、16:22、22:15)
・怒りと争い(箴言 10:12、14:17、29、15:18、19:11、20:3)
・王権と政治(箴言 14:28、16:12-15、19:12、20:2、26、22:11)
・家族と友人(箴言 17:17、21、25、18:24、19:7、13)
・勤勉な者と怠け者(箴言 10:5、12:24、27、13:4、19:15、20:4)
・謙遜と高ぶり(箴言 11:2、13:10、15:25、16:18、18:12、21:24)
・喜びと悲しみ(箴言 12:25、13:12、14:13、30、15:13、30、17:22、18:14)
・偽善(箴言 12:9、20:6、25)

知恵のある者の言葉（22:17-24:34）

この部分は10:1以降の「ソロモンの箴言」が2行の対句から成っていたのに対して、大体において4行詩の形式をとっています。「わが子よ」という表現が何度も用いられていること（23:15、19、26、24:13、21）からも、「ソロモンの箴言」の部分と異なっています。30の箴言を「知恵のある者」が語り、神様の御言葉に耳を傾けさせます。

ヒゼミヤの労苦（箴言 25-29 章）

ソロモンより約 200 年後のヒゼキヤ王(前 715-686 年)の時代に、彼の書記たちが編集して「書き写した」ものです。もしかしたらこの時代に預言者として活動をしていたイザヤとミカがこの作業を手伝ったかもしれません。

・王の前に立つ者の注意すべき点(25:1-15)　・隣人と敵に対する教訓(25:16-28)
・愚か者に対する教訓(26:1-12)　・怠け者に対する教訓(26:13-28)
・今日と明日のための教訓(27:1-16)　・飽くことのない人の目(27:17-27)
・正しい者と悪者に対する教訓(28 章)　・誠実をもつ王座(29 章)

アグル、レムエルの箴言(箴言30-31章)

アグルは、人間の悟りでは神様の品性と摂理を究明することができないと教えます。また、人が良い品性を持つことの大切さを語り、悪者を無礼な者、偽善者、高慢な者、貧しい者を食い尽す者だと語ります。また、4 つの微物(蟻、岩だぬき、いなご、やもり)を通して知恵を語ります。レムエルは、不道徳と酔っ払いに対する警告と、しっかりした妻に対する美しい詩を語っています(31:22-各節の最初の語の最初の文字はヘブル語のアルファベットの順序に従っている)。

道端の先生(伝道者の書)

「伝道者の書」のヘブル語聖書の表題はコーヘレスで、「集会を召集する者」とか「集会で語る者」という、ある種の先生を表します。人生について聖書以外の書物を読む必要はありません。神様は、「伝道者の書」を通して、人生の考えや他の宗教が見つけることのできない人生の意義と目的を書き記しました。この書は、著者ソロモンが神様から離れた時に得た経験をもって語っています。ソロモンは知恵ある人です。しかし、その知恵に従いませんでした。ソロモンは、神様を捨ててこの世の思想に従う、つまり、日の下にある哲学や科学を通して満足を求めた故に味わう虚しさによって、すべてが虚しいという結論を出しました。この書のメッセージは、神様から離れた人生は失望や虚しさだけが残るということです。

ソロモンの当面課題は、どのようにすれば神様から離れても幸せと満足を得ることができるかということでした(伝道者の書 1:1-3)。科学(1:4-11)も、哲学(1:12-18)も満足は与えませんでした。それで快楽(2:1-11、酒・建築・富・音楽)を求めましたが、満足を得ることはできませんでした。また彼は、唯物論(2:12-26)や運命論(3:1-15)、自然神論(3:16-4:16)や宗教(5:1-8)、あるいは富(5:9-6:12)や一般論(7:1-12:12)に走りましたが、満足を得ることができませんでした。ソロモンは結論として、「神を恐れ、神の命令を守ることが人間にとってすべて」だと語ります(12:13)。

人生の意味は何でしょうか(伝道者の書 1-2 章)

伝道者は、人生は無意味であると結論を下しました。知恵や快楽、富や名誉の中から人生の意味を見出そうとあらゆる努力をしましたが、すべては失敗で終わってしまいました。彼はそれらがすべて虚しいことで、風を追うようなものだと告白しています。

人生の意味を見つけ出す(伝道者の書 3-4 章)

伝道者は、「神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた」と語り、神様のなさるわざを知り、永遠の思いが満たされる人生が意味ある人生だと語ります。

富に気をつけなさい(伝道者の書 5-6 章)

「金銭を愛する者は金銭に満足しない。富を愛する者は収入に満足しない。これもまた、むなしい」と、富によって満たされる人生はないと

語ります。特に、自分の労苦によって得たものを、お墓に何一つ手に携えて行くことができない人生だと教えます。富のために生きることは痛ましいことで、それも風のために労苦するものだと語ります。

周囲を見回しなさい(伝道者の書 7-11 章)

伝道者は、人生という大きなものを解剖して、各々の断面の扱いを教えます。彼は、良い評判を得ることと、人の話に耳を傾けることが大切だと教えます。「配偶者を大切にし、誠実に働きなさい。いつも心に平常心を保ちなさい。すべてに寛容でありますように。」という言葉は、現代人にとって必要な教えで、この教えに従うことでストレスや犯罪、離婚率が極めて低くなり、高血圧により薬を飲む必要もなくなり、騙された心を癒すこともない、などの予防につながります。

誰でも歳をとる(伝道者の書 12 章)

結論で伝道者は、私たちが若くても創造者なる神様を心に据える(心の中に思い起こす、心の中に留める、記憶する)ことを強調しています。老年になることは私たちが予想することよりも早く迫ってきます。短い人生が終わると、「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて。すべてのわざをさばかれる」ことを覚え、「神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである」と教えます。

美しい愛の歌(雅歌)

雅歌はソロモンの歌だと言われています。ユダヤ人は過越の祭りに雅歌を読んでいます。

完璧なカップル(雅歌 1:1-3:5)

一つのカップルが結婚することを誓い、相手のための恋歌を歌います。彼女は本当に美しい人です。彼女の声を聞くことだけでも彼の心は彼女に奪われます。彼にはすべての女性が慕うほどの丈夫な体、外貌、富み、愛を持ち、誰にでも自慢できる人でした。夢の中で見られる王子で、彼女はそのような彼との愛が完成される日を待ち望んでいます。

結婚の話(雅歌 3:6-8:14)

ソロモンの結婚の家庭について描写しています。結婚式が終わることを望んでいたカップルに、大きな試練が来ました。それは、彼がいなくなったことです。しかし、二人は互いの愛でこの問題を克服します。G.L.カーは本書を次のように分けています。

①1:2-2:7、期待　　②2:8-3:5、発見し、見失い－発見する

③3:6－5:1、頂点　　④5:2－8:4、見失い－発見する

⑤8:5-14、宣言

つまり、①を A、②を B、③を C、④を B、⑤を A とすることができ、③を中心にして前後が対称に構成されていることになります。

12　預言者たちの叫び声（イザヤ書からマラキ書まで）

車で山岳地帯を運転する時には多くの交通標識を見ることになります。減速、急カーブ、危険標識などなど一般道路では見られないものや数の多さに驚きます。旧約聖書の預言者たちも山岳地帯の警告標識のように、イスラエルやユダ王国、周囲の国々に警告を発しました。無謀なスピードで下り道を走ると破滅を招くという警告です。彼らは神様の権威あるメッセージを通して人々に悔い改めを求めました。しかし、預言者たちを通して語られたメッセージに人々は耳を傾けず、北イスラエル王国やユダ王国は破滅の道へ進みます。

大預言書と小預言書

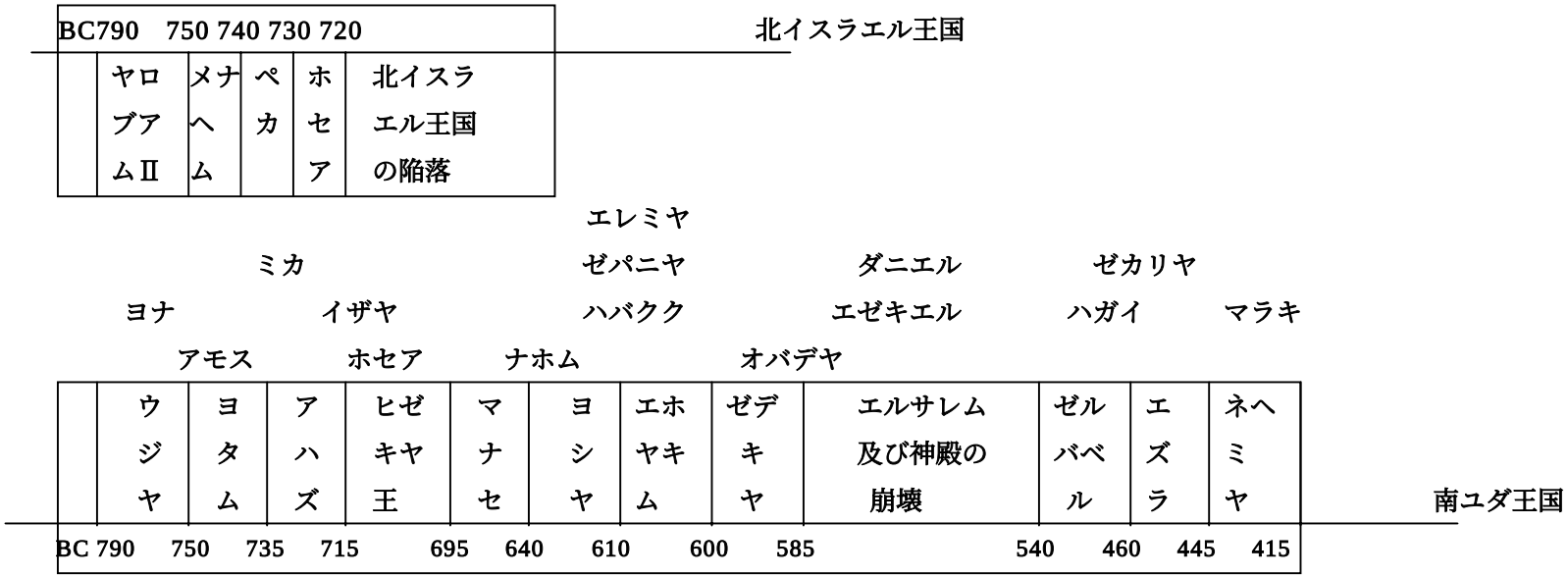
預言者は、神様がご自身の民にメッセージを与えるために用いられた人々です(第2列王記17:132)。預言書は、書物の長さによって大預言書と小預言書で分けられます。

・大預言書：イザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書

・小預言書：ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、
　　ハバクク書、ゼパニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書

預言者の時代的背景と活動の時期、対象によって分けられます。

・イスラエル王国に対して　：アモス、ホセア
・ユダ王国に対して　：アモス、イザヤ、ミカ、エレミヤ、ハバクク、ゼパニヤ
・帰還したユダの民に対して：ハガイ、ゼカリヤ、マラキ
・ニネベの人々に対して　：ヨナ、ナホム
・バビロンに対して　：ダニエル、エゼキエル
・エドムに対して　：オバデヤ



悪いお知らせ（イザヤ1-39章）

イザヤは南ユダ王国で約60年間(紀元前740-680年)預言者活動をしました。彼はウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ王の時代に人々に悔い

改めを宣布しました。しかし、イザヤは民に歓迎されませんでした。エルサレムとユダの民は、彼らが悔い改めなかったら北イスラエル王国がアッシリヤに滅亡されたように災害を受けるという預言者イザヤのメッセージに耳を傾けなかったあらです。伝承によると、イザヤはマナセ王によって殺されたといわれています。

イザヤ6章は、イザヤが預言者として召命を受けたことを語ります。ウジヤ王が死んだ年に一番偉大な王であられる神様と出会いました。そして神に代って代弁する預言者と任じられました。旧約の福音伝道者と呼ばれたイザヤは、不信仰と不道徳的な民に厳しく叱り、神様に立ち返らなければ神様から審判を受けると語りました。このように1-39章までは審判の雨雲がイスラエルを覆いますが、その間から希望の光も照らされています。イザヤがメシヤ、つまり赦しと和解を成し遂げる方が来られることを預言したからです。

良いお知らせ(イザヤ40-66章)

イザヤ書40章は、神様がご自身の民を慰める言葉から始まっています。実は、イザヤ書40章以後の貫く中心主題は神様の慰めです。イザヤは敵国であるバビロンが滅亡されてイスラエルの民が慰められることと、メシヤが来られることで神様が本来意図していたものへの回復を預言しています。

イザヤ書の簡単な概略

①1-6章：ウシヤとヨたム王政の中で

・偶像礼拝（2:6-9）：実が無いブドウの木で、今まで忍耐して来たがこれからはさばくことと間もなく異邦の王に滅亡されることを預言

・イザヤの召し（6:1-13）

②7-14章：アハスの王政の中で

・神様を信頼せずにアッシリアを依存、依存した国に滅亡が（7:17-20）。

③15-66章：ヒゼキヤ王政の中で

・ヒゼキヤ6年：イスラエルの滅亡（ＢＣ722年、ユダは586年）

・8年：侵略されるユダ　　・14年：侵入と病気

・神との正しい関係の回復（31:6）　　・同盟国を嫌う（31:1）

④栄光の未来（44-66章）慰めの本という別名

・神のしもべの渡来　　・神のしもべの苦難

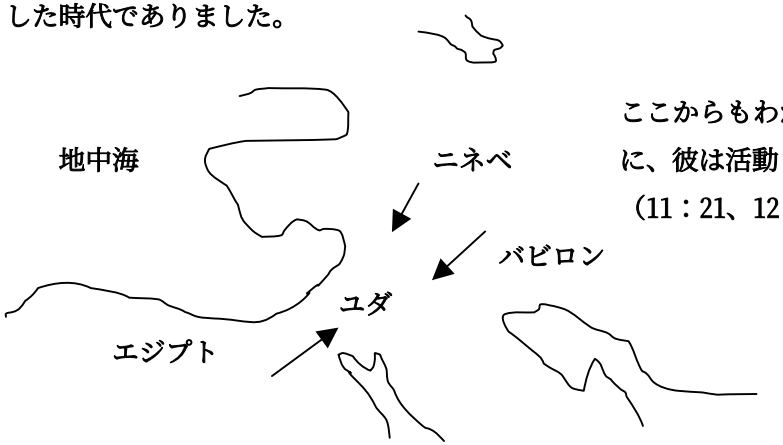
・イスラエルの栄光（60-66章）：神の善（61､62章）、繁栄（63-65章）

私はくちべたです(エレミヤ1章)

エレミヤは若かった時に預言者として召されました。しかし彼は、自分は若く、くちべたなので預言者としては相応しくないと思いました。そのようなエレミヤに神様は、「今、わたしのことばをあなたの口に授けた。」と語り、恐れることはないと約束しました。エレミヤはユダの王ヨシヤの時に預言者としての召命をうけ（エレミヤ1:4-100、多分前625年頃）ました。そして、エホヤキム王を経て、最後の王ゼデキヤ王の時のエルサレムの滅亡（39:1-10、前587年）の後まで、約59年もの長い間を活動しました。

歴史的背景

エレミヤの生きた時代はパレスチナを取り巻く強力国家エジプト、アッシリヤ及びバビロンの間における戦いと政治的崩壊と策略との錯綜した時代でありました。



ここからもわかるように、ヘブル人にとっても、その歴史のうちで最も多難、危機の時代に、彼は活動しました。エレミヤは、故郷のアナトテにおいても、エルサレムにおいても（11：21、12：6）敵視されていました。

声を上げて伝えなさい(エレミヤ2-45章)

エレミヤは孤独な預言者でした。神様は彼の結婚を許しませんでした(エレミヤ16:1,2)。彼は嘲られたり、反逆者として誤解されたり、裁判にかけられたりしました。彼の預言活動には多くの苦しみと悲しみが伴ったので、エレミヤは「涙の預言者」だという別名を持っています。エレミヤは北イスラエルがアシリヤに滅亡される後、南ユダが滅亡へ走り出していた時にその歴史的現場にいました。預言者イザヤが死んでから60年後、人気のないメッセージを伝えました。エレミヤは、ユダが神様と神様の律法の無視して、結局はバビロンに滅亡されることと、民が捕虜として連れ去られることとを預言しました。それで、彼はユダの指導者たちにバビロンに降伏することを忠告しました。

エレミヤのユダの滅亡に関する預言の中には明るい未来の約束もありました。エレミヤは、神様が新しい世代と新しい契約を結び、「わたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(エレミヤ31章)というメッセージを伝えました。

周囲国家に対する預言(エレミヤ46-51章)

エレミヤは、神様の審判はユダだけではなく、ユダの周囲にいる9つの国家にもあることお預言しました。しかし、その中で4つの国家に対しては回復への希望を伝えました。9つの国家は、エジプト(46章)、ペリシテ人(47章)、モアブ(48章)、アモン人、エドム、ダマスコ、ケダルとハツォル(49章)、バビロン(50-51章)です。

付録（エレミヤ52:1-34）

ゼデキヤ王とエルサレム、エホヤキンの最後のことについて記されています。この記事は、第 2 列王 24:18-25:30 と同じ内容です。神様の怒りのもとにこのようにみじめな姿となったユダ王国の王家の中に、列王記記者とともにエレミヤによって、歴史的事実として取り上げられているユダの最後の王エホヤキンのうけているパビロンにおける好遇の記事で最後（31-34 節）が結ばれていることは、ユダの血統の上への将来における大いなる希望をほのめかす大切な一点ではなかろうかと思われます。

悲しい。また悲しい(哀歌)

聖書における25番目の書物である哀歌は、５つの詩から成り立っています。

１章では、エルサレムの荒廃の姿が描かれています。２章では、神様による「怒り」の恐ろしさを述べています。最も美しかったものの腐ってしまった惨めさがエルサレムでした。最も汚れ果てた姿への深い嘆きと、神様からの刑罰の悲惨さは、哀歌が聖書の中で一番悲しい書物だといわれる理由です。

3章は、ヘブル語のアルファベット文字（３節ずつ）の順になっています。ここには、この書が悲惨さにみなぎる書物にもかかわらず、やはり、イスラエル民族の中に打ち抜かれて走っていると思われる信仰の叫びが表れています。「私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む（望みを抱く）。私たちが亡びうせなかったことは、主の恵みによる。主の哀れみは尽きないからだ。それは朝毎に新しい。あなたの真実は力強い。」(2:21-23)

4章は、2章に似ていますが、悲惨の原因である罪が強く取り上げられています。また、以前のエルサレムが持った栄光と今の姿が対比されています。

5 章は、永遠なる統治者である主(１、14 節)に思いをいだし、「思い出してください。顧みてください。」の語を持って始まり、「主よ、あなたのみもとに帰らせてください。私たちは帰りたいのです。私たちの日を昔のように新しくしてください。」(21 節）という言葉で終っていることから、この書はやはり強い信頼を教えている生命の書であるといえます。このことから本書は哀歌でありますが、哀歌を越えている書物です。

大きな輪(エゼキエル1-3章)

エゼキエルは25才頃（BC597年）捕囚となってバビロンへ移されました。そして30才頃(BC593年)召しを受け、エルサレムが陥落する時(BC586年)には預言活動をし、更にエルサレムが陥落してから20年後までその活動は続きました。エゼキエル書1-3章は、エゼキエルが預言者として召しを受けた時の場面を描写しています。彼は大きな生き物と輪が登場する幻を見ながら神様から召しを受けました。

災難を受けながらも警告を無視する（エゼキエル 4-24 章）

エゼキエルが預言者活動をしている時に既にイスラエルは捕囚となっていました。エゼキエルは間もなくエルサレム神殿が破壊されることと、捕囚が長くなることとを預言しました。しかし、イスラエル民は預言者のメッセージには耳を傾けずに悪く悪を重ねました。

周囲国家に対する預言（エゼキエル 25-32 章）

イスラエルの周囲の国家もバビロンによって滅亡されました。エゼキエルは、神様がバビロンを用いてアモンとモアブ、ペルシテとツロを審判すると預言しました。

まだ終わりではない(エゼキエル 33-44 章)

バビロン帝国は神様の約束を無効にすることも、神の民をなくすこともできません。なぜなら、エゼキエルを通して、神様がイスラエル民を霊的に新しくし、ユダとエルサレムを回復し、神様の栄光で満ち溢れる神殿も再建されると預言したからです。これはイスラエル人を暗闇のような捕囚から救い出されるという希望のメッセージでした。

干しからびた骨に命じる（エゼキエル 37 章）

エゼキエルは谷間に多くの干しからびた骨の幻を見ました。彼は、神様の仰せによって干しからびた骨に命じました。すると、骨は動き出し、骨と骨がつながり、その上に筋がつき、肉が生じ、皮膚がその上をすっかり覆いました。再びエゼキエルが預言をすると、骨に命が吹き込まれ、生き返った多くの骨は巨大な群れとなりました。これはイスラエルの回復が神様の恵みによることを示します。神様はこのような幻を通して、ご自身の民が回復されることを明確に示しました。

妥協か非妥協か（ダニエル**1-6**章）

4人の若くて敬虔な信仰者が神様とは全く無関係の、また律法とは全く無関係の国で暮らすようになったことを想像してみてください。彼らが信仰を守り貫くことができるでしょうか。ダニエルと3人の友たち(ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤ)がそうでした。彼らは信仰生活を守り貫くことが大変な状況に置かれていました。バビロンは彼らの名前を改名し、バビロンの偶像からベルテシャツァル、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴという名前をつけました。これは、バビロンが彼らの文化や信仰を抹殺し、バビロンの宗教や文化に慣れさせようとした

意図的な政策の一環です。また、彼ら4人は優秀な若者だったので、バビロンのネブカデネザル王の宮廷に仕えるために選ばれました。それで、神秘的な祭儀で祭司の用いる聖なる言葉であったシュメール語を始め、天文学、占い、魔術の知識を学び、王の食物とぶどう酒が供給され、宮廷人としてのしつけを身に着けなければなりませんでした。特に、王の食卓から疑いなく偶像崇拝と結び付いていた食べ物と飲み物をとるかとらないかの問題にぶつかった彼らは、宦官の長に十日間、野菜と水で過ごせるようにと願い、自分たちの健康が損なわれることで信仰の試練を乗り越えることができました。

ある日のことです。突然夢で目を覚したネブカデネザル王は宮廷の先見者たちにその夢の解き明かしを求めました。しかし、王は夢とその解き明かしの両方を要求したので、誰も答えることができませんでした。ただダニエルは祈りの中でその夢と夢の解き明かしが示されたので、王に答えることができ、ダニエルは高い位(バビロン全州を治め、バビロンのすべての知者たちをつかさどる長官)に就けられて重んじられ、彼の友人たちもバビロン州の事務をつかさどる者となりました。

ダニエルの四つの王国に関する解き明かし(ダニエル2章)

ネブカデネザル王が夢見たものは、「純金・銀・青銅・一部が鉄で一部が粘土質の落ちる各種の金属」で出来ている巨大な立像のことで、奇妙なことに、足の部分が最も弱いで、「1つの石が人手によらずに」像の足を打ち、その結果、像全体が破壊されるという夢です。この夢をダニエルは神様の啓示によって解き明かします。4つの異なった金属と粘土で出来た像の4つの部分は、4つの相次いで興る国を表している、と説明します。金はネブカデネザルを代表とする新バビロニヤ帝国(ダニエル2:37)のことです。銀はメド・ペルシヤ連合帝国(ダニエル8:20)であり、第3の青銅はアレクサンドロス大王のギリシャ帝国(ダニエル8:21)のことです。鉄と粘土はローマ帝国のことです。そして、一つの大きな石が像を破壊するのは、神様がこれらの国々を滅亡させることです。

燃える炉と獅子の穴から救われる(ダニエル3章、6章)

3章はネブカデネザルの宮廷における王と3人のユダヤ人との衝突の物語です。ネブカデネザル王は1つの巨大な金の像を立てました(高さは約27m)。そして、その像を拝むように命じ、服さぬ者には火の燃える炉の中に投げ込まれるという刑罰が付け加えられました。しかし、シャデラク，メシャク，アベデ・ネゴは、像を拝まなかったので、彼らは縛られて炉に投げ込まれました。神様が彼らを守ってくださったので、王は彼らがその頭の毛も焦げず何の害も受けていないのを見て驚き、彼らの信仰を認めました。

新しい政体のもとで就いていた高い地位のダニエルにも信仰の試練がありました。国政についてダニエルには何の怠慢も不正もなかったので、周囲の人々はダニエルを非難し訴えるために、彼の信仰生活を利用する以外にありませんでした。彼らは王に、向う1か月間、ダリヨス王のみが神として崇められなければならないという趣旨の禁令を制定するよう進言しました。しかし、ダニエルは日に3度エルサレムに向かって祈るという日々の個人礼拝の習慣をそのまま続けていました。それで、ダニエルは獅子の穴に投げ込まれた。神様が彼を守ってくださったので、ダニエルは翌朝、獅子の穴から救い出されました。

壁に文字が書かれる（ダニエル5章）

新バビロニヤ帝国の最後の王であったベルシャツァルは大宴会を設け、エルサレム神殿から奪って来てマルドゥクの神殿に運び入れておいた聖なる金と銀の器で酒を飲みました。その時、突然人の手の指が現われ、王座の背後の壁に文字を書きました。ダニエルは壁に書かれた文字『メネ、メネ、テケル、ウ・パルシン』を読み、なぞの言葉を解き明かしてバビロン崩壊を預言しました。「メネ」は、王の治世を数えて終わらせられたと、「テケル」は、はかりで量られて目方の足りないことがわかったと、「ペレス」国が分割され、メディヤとペルシヤとに与えられると、解明しました。王はその晩、夜襲を受けて殺され、王国は崩壊しました。

未来に関する幻（ダニエル7-12章）

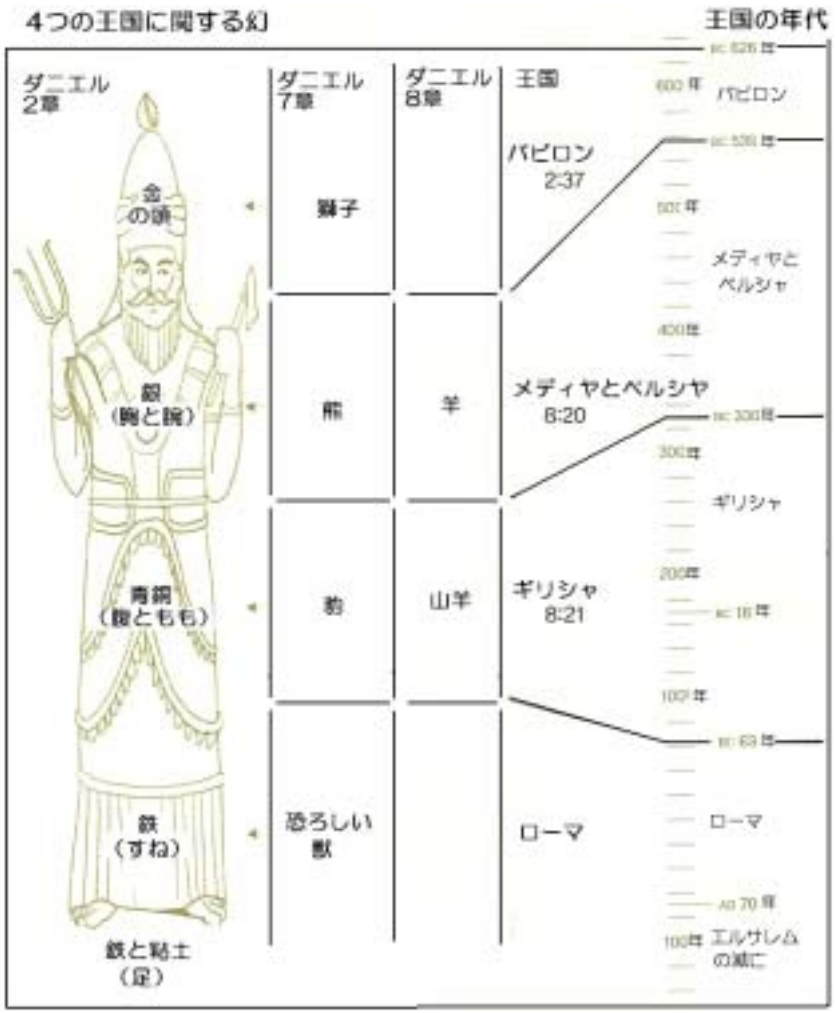
①第1の幻、4頭の獣（ダニエル7章）；海から上がって来た4頭の大きな獣(4つの国のこと)は、神とその創造の目的に対抗しますが、すべて制せられたことを明らかにしようとします。

②第2の幻、雄羊と雄山羊（ダニエル8章）；2本の角をもつ雄羊はメディヤとペルシヤで、雄やぎはギリシャ王で、著しく目だつ1本の角はアレクサンドロス大王のことです。大王の死後、ギリシャ帝国は4人の将軍によって分割され、常供のささげ物を禁止することによって，エルサレム神殿は冒涜されます。ダニエルは神の計画の啓示に圧倒されます。

③第3の幻、70週の幻（ダニエル9章）；ダニエルが祈り続けている時、神様はダニエルに知恵と悟りを与えるためにガブリエルがを遣わしました。それが70週の幻で、この預言は、旧約聖書全体の中でも最も難解なものであり、色々な解釈があります。70週が定められた目的は、罪を終らせ、罪と咎を贖い、永遠の義をもたらし、すべての預言的言葉を成就し、至聖所に油を注ぐことです。初めの「7週」は、クロス

の勅令が出て民が捕囚から帰還することと、エルサレムの城壁再建の許可がネヘミヤに与えられた年と関係します（前538-445年）。長い62週の後にメシヤの十字架刑が来ます。最後の1週の間に、メシヤによる契約の更新と神殿の神聖冒涜があります。

④第4の幻、神の幻と啓示（ダニエル10 - 12章）；ダニエルの見た終りの幻です。11章は初期の幻を基礎とした、詳細な歴史の概観を示します。11章36節に登場する王は自らを高くし、思いのままに振舞うすべての王、反キリストの精神を示しています。12章は、反キリストの犠牲者たちに関心が向けられています。それは、神様の救いのことで、聖徒たちの苦難の間、ミカエルが聖徒たちを守るという約束です。



偉大なメッセージを伝えた小預言者ら（ホセア書ーマラキ書）

旧約聖書の最後の12冊を小預言書だと言います。小預言書は、量が少ないので（エレミヤ書は全部で1346節、小預言書1050節）付けられた書名ですが、内容においては民への覚醒と神の審判を語ることなど決して軽くない主題を扱っています。

姦淫の妻を娶りなさい(ホセア書1-3章)

ホセアは、イスラエル王国に滅亡の期が近づきつつあった時に活動をしました。政治的には不安定、宗教的には退廃という暗雲が漂っていたイスラエルとユダの民に、偶像崇拝を断ち切り、神様に立ち返ることを訴えました。ホセアが活動した紀元前8世紀は世界が混沌の状態に入る再編の時代だったので、イスラエルとユダは政治的な立地を固めるために周囲の国家に同盟関係を求めていましたが、ホセアは神様に信頼すべきだと語りました。しかし、イスラエルとユダは預言者の話を無視し、異邦の国家と同盟関係を求め、条約を結びます。聖書は、そのような行為を、神様を無視し、裏切った行為とし、神様に対して姦淫を犯したことだと語ります。

神様は、イスラエルの民に自分たちの放蕩な姿を悟らせるため、ホセアに姦淫の妻ゴメルを娶るように命じ、ホセアは彼女と結婚をしました。結婚したホセアに3人の子供が授けられました。ホセアは自分の子供たちの名前を付けるために苦労する必要がありませんでした。神様が名前を付けてくださったからです。長男は、イズレエル(神は蒔くという意味)で、神のさばきの象徴としてエフー王朝の終末と北イスラエルの滅亡を表す名前となりました。娘はロ・ルハマ(あわれみを受けない者)で、わたしはもう二度とイスラエルの家を愛することはなく、決して彼らを赦さないからだ、という神様の気持ちを表す名前となりました。次男はロ・アミ(わたしの民でないという意味)で、あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないことを宣言するメッセージを持っていました。

神様はイスラエルを滅亡させます。そして彼らをあわれむことはありません。なぜなら、何度も彼らを赦し、愛したにもかかわらず、彼らが神様を拒み続けたからです。これから神様はイスラエル人をご自身の民として扱いません。

ホセアの妻ゴメルはイスラエルの民のように新しい恋人を求めます。彼女は家族を捨てて恋人の後を追いました(2:5)。しかし、ホセアは神様の命令によって彼女を探し出し、奴隷となった彼女のために、銀十五シェケルと大麦一ホメル半を払って買います。神様も終わりの日に、イスラエル人を恵み、回復してくださいます(3:4-5)。

イスラエル人の犯罪記録（ホセア書4-10章）

イスラエルの犯罪の記録です。彼らは、殺人、窃盗、姦淫、暴行、偶像崇拝、高慢などの罪を犯し、神様の御名を汚し、神様との契約を破りました。しかし、神様はイスラエル人が立ち返ってくるように続けて語っています。

希望（ホセア書11-14章）

イスラエルは神様に信頼を置くのではなく、異邦の国家を信頼して力と平和を得ようとしました。イスラエルはアッシリアと外交協定を結びながらアッシリヤの敵対国エジプトとは貿易をしていました(12:1)。その結果、イスラエルは強大国の争いの真中に立たされる運命となります。

ホセアは、イスラエルが悔い改め、ユダが偶像を捨てれば、神様が彼らをあわれむと伝えました。神様がイスラエルを愛していることの故に彼らを捨てることはしないが、神様の提案を拒むと神様の審判が下ることを、ホセアは絶えず語りました。ホセア書は、将来イスラエルが回復され、神様との間に愛と信頼の関係が結ばれることで終っています。

いなごの襲撃（ヨエル書1:1-2:11）

ヨエル（主は神様だという意味）は、南ユダ王国で預言者活動をしました。彼はいなごにより荒廃となったユダの悲惨さを書き記しました。いなごをイタリア人は小さい馬、ドイツ人は草馬と呼んでいますが、いなごのように何でも食い尽くす侵略者たちによりユダの地には何も残りません。彼はいなごの災難を通して、主の日が臨む時、ユダが侵略者たちによって神様の審判を受けることを示そうとしました。

神様のあわれみ(ヨエル書2:12-3:21)

神様は、ユダがその罪から立ち返ってきたら、彼らを回復し、彼らを守ってくださると約束しました。また、神様は彼らの救いを約束し、民の霊的回復について、物質的な満足と共に、霊的回復を約束しています。

召される羊飼い(アモス書1-2章)

アモスが神様から預言者として召されたのは、彼がエルサレムから南へ約16㎞離れたテコア地方で羊の群れを飼っていた時のことです。アモスの働きは、イスラエルとユダ、そして、周囲国家に対する一連の警告で一貫します。彼は、イスラエルとユダ、周囲の国家の興亡は神様によって決まると語り、彼らの行為に対する解明を求めています。

災いの責任と回復の約束(アモス書3-9章)

イスラエルの人々は、諸国家が神様の裁きを受けることは当然だが、自分たちはそうではないという考えを持っていました。それは、①イスラエルは神様に選ばれた民族であり（3:2)、②ベデルやギルガルといった神様を崇拝するところでいけにえを捧げたり、所得ごとに十分の一や感謝の捧げものとを好んで、進んで神に捧げるなど神信仰をもっていた（4:4-5、5:21-26）ことと、③主の日に対する希望(メシヤ待望信仰)をも持っている(5:18)ので、「災いは私たちに近づかない。私たちまでは及ばない」と言って(9:10)、偶像礼拝や犯罪を妥当化しました。

しかし、アモスはイスラエルとユダが持っている考えは間違いだと教えます。

①神様の審きは、すべての民族が各々犯した罪の故に行なわれるものです。特に、選民に対する審きの根拠は、神様との関係がその根拠となります。神様の御名を汚していることや神殿を汚すこと、神礼拝と偶像礼拝を共にすることなどで(2:7-8、5:21-26)、イスラエルはさばかれます。神様は、ご自身を信じる者には重り縄を持って審くのです(7:7-9)。

②イスラエルに対する神様の審きは、神様が彼らを特別に愛したからです。

③3章の７つの例え話を持って、神様の審きは当然だと語っています。それは、神様が彼らのために預言者たちを送り、彼らに神様の御心を示されたことです。

神様の審きの特徴の一つは、御言の飢饉です（8:11-14)。また、二度と起き上がれない審きですが(5:２)、全く根絶やしにはしないものです(9:8)。残り者(9:12)や捕われ人を帰らせて(9:14)、ダビデ王朝を起こし、建て直すこと恵みも含まれています。ここで私たちは、神様の愛が何かを知ることができます。神様は、愛されるべき者だから愛するのではなく、愛される者でもないのにかかわらず、愛してくださいます。神様の特別な愛は、特別だから大切にしなければならないものなのです。

最後の勝利（オバテヤ書）

エドムに対する神様の審判を宣言しています。エドムが審かれるのは、彼らの高慢さの故です。高慢という言葉はジド(沸騰して溢れる)から由来したもので、ズドンと言います。赤い煮物をナジドと言うので、創世記25:29を思い起こさせます。エドム人はイスラエルと仲が悪く、南王国ユダの滅亡(前586年)を喜びました(エゼキエル35:15、36:5)。赤ん坊イエスを殺そうとしたヘロデ大王もエドム人です(前37-4年在位)。神様は人間の姿勢(態度)に直ちに問責しませんが、必ず諸國を審くために裁判席に座ります。その時、誰一人神の審きから逃れることができません。神様の審判の時は必ず来ます。

何でそんなことをしたのか（よナ書）

大きな魚のお腹に飲み込まれたヨナの話は有名です。預言者ヨナは、当時のアッシリヤの首都ニネベへ行って伝えなさいとの命令を神様から受けましたが、それに従わずタルシシ行きの船に乗って逃れようとしました。その時に起こった出来事としてヨナは魚に飲み込まれ、三日三夜その魚の腹の中にいました(3:17)。しかし、神様のあわれみによって陸に吐き出されたヨナは、ニネベに再び送り出されます。彼はニネベで宣教を続きましたが、ニネベの人々は王を始めみな立ち上がり、悔い改めをなしたことにより、神様はニネベに対する災いを思いかえられたことを見ることになります。

しかし、ヨナは、神様が敵国ニネベに対する災いを思いかえったれたことを見るに耐え難く、不機嫌になりました。それで、神様はとうごまを用いてヨナを悟らせます。4章10節の、「あなたは労せず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして私は12万あまりの大きなニネベを惜しまないでいられようか」という句によって、神様の恵みは、イスラエルに陥り易い利己的な民族主義的なものに留まるものではなく、遥かに広いもの、つまり、イスラエルの神は全人類の神でもあるとの事実を、ヨナを通してイスラエルに示しています。ヨナ書は、歪曲された選民意識を正す意図を持っています。

不正な政治家と腐敗した宗教指導者（ミカ書 1-5 章）

預言者ミカはイザヤと共にユダ王国で活動しました。北イスラエル王国では預言者ホセアが活動をしていた時です。ミカはイスラエルとユダの腐敗と堕落を重点的に取り扱いました。当時の権力者たちや宗教指導者たちは、悪巧みを計り、民や貧しい者の土地や家を収奪しようと計画し、熱心に悪事を企みました。必ず彼らは神様の審きを受ける筈です。しかし、イスラエルに対する神の審判には希望があります。審判の時が過ぎて回復の時が来るからです。その時、神様はメシヤを遣わし、ご自身の民をあわれんでください。

法廷のドラマ(ミカ書 6、7 章)

ミカ書の最後の 2 章は法廷を舞台にしてメッセージを伝えています。神様が告発すると、民を代表してミカは答えます。論争が終わり、ユダとイスラエルに下った判決は有罪で、刑罰も加えられます。しかし、ミカのメッセージは、神様はご自身の民を回復してくださるという確信で終わっています。

ミカ書の内容の要約（全 7 章、105 節）

1-3 章、神様の審判　　4-6 章、恵みと回復

7 章、　預言者の祈り

悟らない人々（ナホム書）

クアラルンプには、マレーシア人、中国人、インド人、アラブ人、ユーラシアン、ヨーロッパ人など多くの人種が共存する国際的な都市です。１月にあるタイプサムという祭りでヒンディ教信徒たちはカバディを着、バツ洞窟までの 11 キロを行進し献身を心掛けます。カバディは木や鉄でできたものでそこにつけた針などを肌に刺して着るもので、ある人は舌やほっぺに箸のような鉄棒を刺したりする人もいます。また宗教的な献身ということで、火の上を歩く人もいます。彼らは、神が人々にそのような行動を願っていると信じています。それとは正反対に、ある人々は、神は自分を信じる者の祈願や機嫌を満足させるために存在していると信じています。彼らは、神は何でも恵んでくださる方であり、どんな命令も、懲らしめもなさらないと信じています。　このように神様に対する様々な誤った考えがありますが、ナホムはニネベに、神様の恵みの真理は、神様の公義という事実と分離することが出来ないと教えます。

アッシリヤの首都ニネベは、ヨナの宣教を通して一時的に悔い改め、審判から免れ、神様の哀れみを受けましたが、彼らは再び高慢になり、イスラエルに全く哀れみを示さなかったので、神様はニネベに対してあわれみのない審きで報うことを告げます。

ナホム書の内容：

1 章、神様の審判の宣告

1)表題(1:1)　2)神のあわれみと神の怒り(1:2－8)

3)神の審判の宣告(1:9－14)　4)神の民への救いの宣告(1:15)

2 章、ニネベの滅亡の描写

1)包囲されるニネベ(2:1-6)　2)略奪されるニネベ(2:7-9)

3)徹底的に破滅されるニネベ(2:10-13)

3 章、ニネベ破滅の必然性

1)ニネベの恥(3:1-7)　2)ノ・アモンとの比較(3:8-10)

3)絶望的なニネベ(3:11-19)

神に問いかける預言者（ハバクク書）

この書物は、預言者ハバククと神との問答や神の啓示、ハバククの祈りが記されています。ハバククという名前は、「抱きしめる」という意味で、ルターは、「ハバククは、泣く赤ん坊を抱きしめるように自分の民を抱きしめ、神がなさろうとすれば、この民は直ちに癒されるという確信から民を慰めた」と語りました。

この書物の大半は、ハバククと神との問いかけと答えが記されています。ハバククは、「イスラエルの民の腐敗と混乱を訴えること」と、「彼らに対する神の沈黙について」、そして、「異教徒を用いて彼らを裁くことは、神の聖さに矛盾するのではないか」という問いかけをします。しかし、神の答えを通してハバククは、神の裁きに対して私たちはただ神のあわれみを求めるべきだということを悟ります。また、私たちが神の審きの中にあっても神を信頼して行くべきであることを語り、神に対す変わらない信仰を教えます。

ハバクク書の内容（全3章、56節）

1．預言者と神との問答（1:1ー2:4）

1)表題(1:1)　2)預言者の悩み(1:2-4)

3)神の答え(1:5-11)　4)預言者の疑問(1:12-2:1)

5)神の答え(2:2-4)

2．カルデヤ人に対する神の審判（2:5ー20）

3．預言者の祈りと賛美（3章）

1)ハバククの祈り(3:1-2)　2)裁き主の現れ(3:3-7)

3)恐るべき裁き(3:8-15)　4)信仰の勝利(3:16-19)

主の日が近い（ゼパニヤ書）

改革者ヨシヤの努力にもかかわらず、マナセ以来の罪の積る中で、ユダへの神のさばきは必至で、「…主の日が近い」ことが強調されています。しかし、ゼパニヤは悲観論者ではありません。彼は迫ってきた神のさばきの向こう側にもっと優れた山を見ることができました。神は、ご自分の民がすべての人にご自身の恵みを示すためには火の試練を通らなければならないことを示しています。

ゼパニヤはまず民に迫ってくる神のさばきによって徹底的に滅亡されることを宣言します。そして、そこから真実な人に対して話題を変え、彼らに恵みの希望を伝えながら、もし彼らが今まで主を待ち望んだのであれば続けて忍耐を持っていることを勧めています。シオンの娘への喜びの呼びかけは、本書の大きな特色となっています。

導入部分の理解（ゼパニヤ書1:1）

預言者ゼパイヤの役割を理解するためにはアモンとヨシヤ王について知る必要があります。預言者たちは突然の啓示によって語る者ではなく、彼が住んでいた地域や社会、政治、宗教、国際情勢などと深く係っています。

アモンはマナセの子です。マナセは、紀元前697-642年の間エルサレムで統治しましたが、神信仰を捨てて偶像礼拝を民に勧めたり、異教徒の儀式のために自分の息子までもささげたり、死んだ人の崇拝や星崇拝などが盛んだ状況を産み出した張本人です。彼はそのことで神からさばかれ、ユダヤの全土もさばかれます（参考、第2列王記21:1-18）。マナセが死んで22才の息子アモンが王になりました（21:20-22）。しかし、彼も親のように神を捨てて偶像に走ります。２年も過ぎないうちに謀反が起こり、暗殺せれ、その後にアモンの子ヨシヤ（当時8才）が王になります（21:23-24）。幼子ではありましたが、彼は正しいことを行ないました（22:1-2）。偶像をなくし、神殿を回復しようとしました（第2歴代誌34:1-8）。ゼパニヤは、ヨシヤを助ける人として初めて登場しますが、彼は民の宗教的な熱心が一時的であり、迫ってくる神のさばきから逃れることができるほどの真実なものでないことを悟ります。それで、彼は神の霊によって預言するようになったのです。

あなたがたの現状をよく考えよう（ハガイ書）

バビロン捕虜の生活からエルサレムの再建を許されたイスラエルは、帰国して神殿の再建に取り込んでいましたが、10年という期間を過ごしても再建の可能性が見られなかったので、民は、神殿を建てる時期ではないと諦めていました。実際、彼らの関心と物資と努力は他の目的のために使われていました。自分たちのことを優先したことで中断されたのです。昔ダビデは、「私は杉材の家に住んでいるのに、神の箱は

天幕の中にとどまっています」（第2サムエル7:2）と語り、神殿建築への熱情を表しました。しかし、帰還したユダヤ人にはダビデのような神殿への熱望を持っていなかったのです。ですから、彼らの神殿再建を後にしました。また、昔のソロモンの神殿と比較しながら以前のようなものではないと言いながら、その熱気を踏みつく者もいました。このようにイスラエルが自分たちの生活を優先することを把握したハガイは、神殿再建に新たなる献身が必要であることを宣言するようになりました。「あなたがたの現状をよく考えよう」

宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、わたしの栄光を現わそう（ハガイ1:8）

神殿再建を通して神様はイスラエルに三つのことを保証しました。①神の臨在(1:12－14、2:4－5)、②救い主への希望（2:6－9、神の願うことは必ず成し遂げられます。その過程において、天と地がゆり動き、その後神殿に神の栄光が満たされ、平和を与えることを約束していますが、この約束はメシヤを指すこととして理解できます。キリストが現れる時、すべての人々は希望に向かって一つになり、二番面の神殿は輝きに溢れるようになるという、言葉通りです。）③最後の勝利（2:20－23）です。

メシヤが来られる(ゼカリヤ書)

預言者ゼカリヤ祭司の出身です。彼の名前の意味は、神が覚えるというもので、ハガイより２ヶ月遅いダリヨス王の第２年8月に預言者活動を始めました（紀元前520年)。ゼカリヤの活動はハガイと同じ神殿再建の激励とすべての敵対に勝利の時期が来るということでしたが、その内容はハガイを遥かに越えるものです。本書には多くの幻が記録されているので、旧約の黙示録だとも呼ばれます。ゼカリヤ書にはメシヤ(キリスト)の人格と活動について多くのことが語られています。

この書は3つで分けられます。幻について（1-6章)、問いかけ（7-8章)、警告（9-14章）です。また、この書が語る預言には3つの帝国が登場します（ダリヨス、9章のギリシャ、12と14章のローマ)。

神の熱心(ゼカリヤ書1-8章)

ゼカリヤは帰還の民に対する神殿再建についての神の熱心を8つの幻を通して語ります。最初の3つの幻ではゼカリヤは、旧エルサレム市街

が見渡せる所にいました、第4、第5の幻では大祭司の仕える神殿の庭にいます。

1)序(1:1-6)：本書全体の序論は、イスラエルへの悔い改めと告白の招きをもって始まります。それは、神の約束に対する確固たる基盤を提供することです。「わたしに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたに帰る」(マラキ3:6でも引用)の言葉のように、契約を破った民が帰るなら、神も彼らのところに帰ると語っています。

2) 8つの幻（1:7-6:8）：一夜に神は8つの連続した幻をもってご自身の計画を示します。

①ミルトスの木の間にいる馬上の人（1:7-17）：周囲の諸国がイスラエルを抑圧していても、神はエルサレムをねたむほど愛し、ご自身の民、町、神殿を回復されると約束する幻です。

②4つの角と4人の職人（1:18-21）：敵対国家は依然として強力でしたが、帰還民たちは弱く、彼らを守る城壁もありませんでしたが、神のご計画はユダを脅かす国々を覆すことでした。

③測り綱を持つ人（2:1-13）：エルサレムは超自然的な火の城壁で奇蹟的に守られ、主はそこに住むと約束する幻です。測り綱はエルサレムと神殿の再建と回復の象徴です。

④大祭司の礼服（3:1-10）：祭司の国(出エジプト19:6)としてのイスラエルの回復が預言されています。神のイスラエルに対する将来のプログラムは、メシヤの地上への来臨によって完成します(14章)。この黙示的幻を前に、大祭司ヨシュアは国家イスラエルの罪を示しています。しかしイスラエルの罪はきよめられ、章を追うにつれて祭司の国へと回復されます。

⑤金の燭台と2本のオリーブの木（4:1-14）：燭台はあかしの意味を表すものと思われます。イスラエルは、世界の国々に対して神のあかしとして用いられるために立てられます。神殿再建は神の御霊によって完成させると約束されます。

⑥空飛ぶ巻物（5:1-4）：律法を破る者は律法によってさばかれることが書かれています。長さ約9m、幅4.5mの巻物は誰もが読めるように非常に大きいもので、罪に対する明確なメッセージであることを明らかにします。

⑦エパ升の中の女（5:5-11）：イスラエルから罪悪が一掃されることが書かれています。頑なな罪人は絶ち滅ぼされるだけでなく、罪を犯す組織全体が取り除かれ、罪悪の葬られるにふさわしい地であるシヌアル(バビロン地方の古代名)へ移されることが書かれています。

⑧4台の戦車（6:1-8）：戦車は国々へのさばきを執行する神の手段となる御使いの勢力で、4は四方あまねくの意で、普遍的なさばきを意味すると思われます。

3）大祭司ヨシュアの象徴的戴冠（6:9-15）：ヨシュアはメシヤの予型(若枝)として登場し、大祭司ヨシュアの戴冠は、メシヤ的王 - 祭司へと関係付けるものです。

4）断食の問題と将来の約束（7:1-8:23）：ゼカリヤの意図は1:3-6に明らかなように帰還民の霊的刷新でした。ここではこの問題を更に突き詰めます。7-8章の目的は、過去のさばきを振り返り、将来の栄光を望みつつ、正しく生きる必要を彼らの心に悟らせることです。

メシヤ王の到来(ゼカリヤ書9-14章)：

1)第1の宣告（9:1-11:17）：メシヤの到来と拒否

イスラエルはさばき(9:1-8)が語られる中で、解放を見出します(9:8)。しかし、祝福(9:9-10:12)のうちにあっても悲しみを経験します(11:1-17)。メシヤは到来しますが、拒絶されます。

2）第2の宣告(12:1-14:21)：メシヤの到来と受容

ゼカリヤは次に、最初のさばきと最後に来る解放、回復、そして祝福を対比することにより、神の契約の民を励まします。「その日」という表現は、第2の宣告において17回も出ており、ほとんど終末を示すことに用いられています。宣告は2つの情景を中心として展開します。エルサレムの最終的占領、そしてメシヤの再臨によるイスラエルの敵の打破、神の国の確立です。こうしてすべての国がメシヤを礼拝するシーンをもって偉大な黙示的預言は閉じています。

信仰を捨てた者へのメッセージ(マラキ書)

旧約聖書の最後の書物であるマラキ書は紀元前443年に書かれたものです。帰還から約100年が過ぎた後の記録です。預言者マラキは一連の質疑応答を通して神の民の腐敗を明らかにしています。待っていたメシヤが来ないことで民は神の契約を軽んじ、神に対する民の感謝の思いはもはや冷め、礼拝は形式主義に堕し、律法に無関心でした。そのような民にマラキは契約に関する神の誠実さを伝え、悔い改めへの招きます。そして、「従順には祝福、不従順には呪い」をもたらすという神とイスラエルとの契約関係を強調しています。

13 収税人が伝える福音(マタイによる福音書)

新約聖書の最初の書物はマタイと呼ばれた収税人が書いたものです。この書物はすべての人々に「よい知らせ」（福音）を告げています。この地上にメシヤが来られましたが、ユダヤ人はイエス様を約束されて来られたメシヤだと信じませんでした。彼らは、メシヤは自分たちを救ってくださり、この地上ですばらしいイスラエルの国を建ってくださると信じていました。しかし、イスラエルの指導者であったパリサイ人やサドカイ人は、大工の息子として来られたイエス様や、自分たちを否定するイエス様の教えに反感を持ち、殺す陰謀を立って、十字架で殺しました。しかし、十字架で死なれたイエス様は三日目によみがえり、そして多くの弟子たちによみがえられたご自身の姿を示した後、天に上られました。

それから約 30 年が経った頃、収税人出身のマタイがイスラエルの人々に、イエス様が旧約聖書で約束されたメシヤであったことを教えるために、福音書を書きました。それがマタイによる福音書（マタイ福音書）です。マタイ福音書には、イスラエル人がよく知っていた旧約聖書を多く引用し、メシヤはイスラエルの独立のためではなく、すべての人々の贖いのために来られた方であることを強調します。

イエスの誕生（マタイ福音１章）

イエス様は旧約聖書が預言された通り、ダビデの子孫として生まれました。イエス様は、聖霊によって処女マリヤより生まれました。ヨセフは自分の婚約者が妊娠したことで驚きましたが、御使いの知らせにより、赤ん坊の誕生を受け入れ、その名も御使いが告げた通りにイエス（訳するご自分の民をその罪から救ってくださる方）としました。

星の導きに従って（マタイ福音２章）

東の博士たちはユダに王が誕生したことを告げる星を見て、その王の誕生を祝うために贈り物として黄金、乳香、没薬を持ち、エルサレムに来ました。当時のヘロデ王はミカ書 5:2 で、新しい王の誕生地がベツレヘムであることが分かりました。東の博士たちはイエス様の誕生を心から喜び、祝いましたが、ヘロデ王は自分の王座を脅かす新しい王の誕生を嫌い、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺しました。

イエス様の受洗と誘惑（マタイ福音 3:1-4:10）

バプテスマのヨハネは、イエス様にバプテスマを授けました。その時、彼はイエス様がメシヤであるという確信を得ました。イエス様の受洗は、神の御心にかなうこと（罪人の立場に立つことで、やがて十字架上で人々の罪を負うイエスであるから）であり、人の目から隠れた生活からメシヤとしての公生涯への転換点でもありました。その後に、イエス様は御霊の導きに従い、荒野に行かれます。そこに「試みる者が近づいて来」ました。神に近づこうとする者に対し、それを阻もうとする悪魔のことです。イエス様は悪魔の誘惑を聖書の言葉で退けられました。

弟子選びと山上の垂訓(マタイ福音 4:12-7:29)

イエス様は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と宣教の言葉を伝えました。そして、漁師であったペテロとアンデレに「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」と呼びかけ、弟子としました。そして、山に登り大勢の人々に有名な八つの幸いを中心とした山上の垂訓を教えられました。

多くの奇跡を行う(マタイ福音8-9章)

イエス様は群集を見て哀れみ、らい病人、百人隊長のしもべ、ペテロの姑、悪霊つかれた者など、旧約聖書の預言通りに多くの病人を癒されました。また、大暴風や湖までも従わせました。中風の人を癒した後、そこを去って道を通りながら、収税所にすわっているマタイをご覧になって、イエス様は彼に「わたしについて来なさい」と語り、マタイは立ち上がって、イエスに従ったという記述もあります。

宗教指導者とヘロデ王の攻撃(マタイ福音11-16章)

多くのイスラエル人はイエス様のしるしを見て歓迎しましたが、宗教指導者であったパリサイ人は自分たちの権威を認めないイエス様の教えに反感を持ちました。また、自分の罪を指摘したバプテスマのヨハネを殺したヘロデ王も、イエス様に対する憎悪心を持っていました。イエス様は周囲の多くの反対や抵抗に屈することなく、天の御国の教えを伝えながら、をの働きを続けられました。

栄光の姿(マタイ福音 17-25 章)

ある日、イエスさまはペテロとヤコブとヨハネを連れて山に登りました。イエス様は弟子たちの目の前で、姿が変り、顔はまぶしく光り輝

き、着ていた衣まで白く光りました。そして、モーセとエリヤが現れイエスと語り合っていると、天から「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい。」という声がしました。

イエス様はこれから弟子たちや従うすべての者たちに重大な教訓を与えようとしました。赦しに関する教訓、仕えること、謙遜、教会に対して、結婚と離婚の問題、永遠の報い、宮をきよめる必要性、そして、十字架から再臨の時までの終末に対して教えられました。

王の受難(マタイ福音26-27章)

王の復活と王の命令(マタイ福音28章)

14 イエスの活動が中心である福音書（マルコによる福音書）

古代ローマ人は円形劇場で闘技や猛獣と人との闘いなどを見ることから世界の征服まであらゆる活動を好んでいました。マルコがイエスの活動に焦点を合わせて福音書を書いたのは、ローマ人が活動を好んでいたからです。つまり、マルコは１世紀のローマ人にイエスを伝えようとしたので、イエスの説教や教えよりも、イエスの活動に焦点を合わせました。特に、マルコはイエスをしもべとして描写しながらイエスの愛と人々に仕える姿を強調しています（マルコ福音 10:45)。また、マルコは過去形ではなく現在形を多く用いたことや、「すぐ」という言葉を多く用いる(43 回)ことで、イエスの生涯や活動を生々しく再現しようとしました。

イエスの生涯のある日(マルコ福音 1:1-30)

マルコは、イエスがバプテスマを受けたこと、悪魔から誘惑されたことから福音書を書きました。そして、突然方向を変え、イエスがガリラヤ湖で福音を伝えることと、人間をとる漁師にするために弟子を呼んでいることを描写しています。そして、権威ある者として教え、あらゆる病を癒されました。「さあ、近くの別の村里へ行こう。そこにも福音を知らせよう。わたしは、そのために出て来たのだから。」(マルコ

福音 1:38)と語り、イエスがこの地に来られた理由も紹介しています。

屋根の上に上る（マルコ福音 1:40-9:50）

イエスはカペナウムに行き、ある人の家で福音を伝えました。その話を聞いた人々の中に、四人の人が中風の人を担いで来ましたが、多くの人が集まったため、戸口のところまで隙間もないほどだったので、四人の人は屋根を剥がし、穴をあけて、中風の人を寝かせたままその床をつり降ろしました。イエスは彼らの信仰を見て中風の人の病を癒されました(2:1-12)。その後にイエスはレビ(マタイ)を弟子として呼び、彼の家で食卓に着かれました。レビは収税人で、その食卓には大勢の取税人や罪人たちも着いていました。その姿を見た律法学者はイエスを非難し、イエスの弟子が安息日を守らなかったと提訴しますが、イエスは、「人の子は安息日にも主です。」(2:28)と教えます。

マルコ福音 5-9 章に書かれたイエスの活動

・汚れた霊を追い出す
・12 年の間長血を煩った女性を癒す
・会堂管理者ヤイロの娘を癒す
・弟子たちに霊的権威を授ける
・5 千人を食べさせる
・湖の上を歩く
・ゲネサレでの癒し
・汚れときよめに対する教え
・異邦人の女の娘を癒す
・耳が聞こえず、口のきけない人を癒す
・4 千人を食べさせる
・再びパリサイ人との衝突
・盲人を癒す
・受難の予告

・栄光に満ちている姿に変えられる
・てんかんの少年を癒す
・再び受難の予告
・子供の重要性を教える

ユダヤ地域での活動（マルコ福音 10 章）

イエスはユダヤの地方に行きました。そこでも多くの人々がイエスに従い、教えを聞きました。しかし、律法学者はイエスの教えや行動に反感を持ち、異議を訴えながらイエスの教えに反対しました。その後、イエスがエリコに入る途中、イエスをダビデの子だと言いながら目が見えるようにしてもらいたいと願う盲人と会いました。彼は、イエスは自分の目を癒す本当のメシヤだと信じていました。

十字架を背負うためにエルサレムに入場(マルコ福音 11-15 章)

この部分は、イエスの地上での最後の活動であった一週間を記述しています。エルサレム入城から、神殿をきよめる、いくつかの教え、宗教指導者たちとの衝突、神殿での教え、献金に対する教え、未来に関する教え、背信、逮捕、裁判、十字架での死などが書かれています。

復活を目撃した者の使命(マルコ福音16章)

マルコはイエスの墓の前に置かれていた大きな石を強調しながら、イエスの復活を簡潔に記録しました。よみがえられたイエスは弟子たちに、「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」(16:15)と命じ、福音伝道の命令に従う時には超自然的なしるしも伴うことを約束しました。また、天に上げられて神の右の座に着かれたイエスと、弟子たちが出て行って、至る所で福音を宣べ伝えたことと、イエスが彼らとともに働き、みことばに伴うしるしをもって、みことばを確かなものとされたと描写することで、最後までイエスの活動に焦点を合わせてイエスが真の神であったことを教えます。

15 医師の記録（ルカによる福音書）

ルカは医者らしく目撃者の証言を慎重に調べ、集めた資料を根拠に福音書をまとめました(ルカ 1:1-3)。つまり、イエスの生涯と働きに対する正確な文書を提供することで真理を悟らせようとしました。ルカはイエスの教えを多く記述しています。マタイ福音書より章は少ないです(28 章―24 章)が、節は多いです(1072 節―1151 節)。ルカは、マタイがユダヤ人を悟らせるために多くの旧約聖書を引用したこととは違って、神の救いが異邦人に及んだこと、つまり、異邦人もユダヤ人と結んだ契約の受益者になったことを教えるために旧約聖書を引用しました。また、社会的弱者に対する言及も多く、イエスの無罪や聖霊の働きについても強調しています。

話せない祭司ザカリヤ(ルカ福音 1:5-25)

歳をとっていた祭司ザカリヤと不妊の女といわれていた彼の妻エリサベツに、主の使いによって子が生まれることとその子にヨハネと名づけることが知らされました。しかし、その知らせを素直に信じなかったザカリヤはヨハネが生まれる前までは話せなくなります。

もっと素晴らしい誕生のお知らせ（ルカ福音 1:26-56）

エリサベツが妊娠して 6 ヶ月になった時に主の使いはマリヤに現れ、「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。」とメシヤが生まれることを告げました。マリヤはユダの町に急ぎ、エリサベツと会い、彼女から神に祝福されたことを言われます。喜びに溢れたマリヤは神を賛美しながら家に帰りました。

御使いの歌が天と地に響く(ルカ福音 2:1-20)

御使いが現れて、「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです」と、告げました。そして、多くの天の軍勢と一緒に神を賛美しました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」と。

ヨハネとイエスの系図(ルカ福音 3 章)

ザカリヤの子ヨハネはバプテスマのヨハネと呼ばれました。ヨハネは、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマを説き、人々にバプテスマを授けたからです。そこにイエスが来られ、ヨハネからバプテスマを受けました。その時、聖霊が鳩のような形をして下られ、「あなたは、わたしの愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」という声が聞こえました。ルカはこの記述とともにイエスの系図を記録することで、イエスが全人類の代表者であることを明らかにしようとしました。

ガリラヤ湖でのイエスの働き(ルカ福音 4:14-9:50)

①安息日に会堂で預言の成就を宣告する(4:14-44)
②人間を取る漁師に(5:1-11)
③安息日に手のなえた人を癒す(6:6-10)
④12 弟子を選び、使徒と名づける(6:12-16)
⑤幸いについての説教(6:17-49)

⑥百人隊長のしもべを癒す(7:1-10)
⑦死んでかつぎ出されたやもめのひとり息子を生き返らせる(7:11-15)
⑧涙で御足をぬらし、髪の毛で拭った女の罪を赦す(7:36-50)
⑨神の国を宣布する(8:1-21)
⑩ガリラヤ湖を静める(8:22-25)

⑪悪霊を追い出す(8:26-39)
⑫会堂管理者の娘と十二年の間長血を煩った女を癒す(8:41-56)
⑬5000 人を食べさせる(9:10-17)
⑭御姿が変えられる(9:28-36)
⑮悪霊に取りついた少年を癒す(9:37-43)

イエスに対する人々の反応

①罪人と共に食事をするイエスを非難(5:30)

②安息日に働くことや癒すことを非難(6:2、7-11)

③やもめの息子を生き返らせることでイエスが偉大な預言者であることを確信(7:15-16)

④罪深い女の献身的な行為を受け入れるイエスを憤慨する(7:37-39)

⑤湖を静めたことで驚き恐れる(8:24-25)

⑥悪霊を追い出したことで自分たちから離れるようにと求める人々(8:34-37)

⑦イエスの姿の変貌でそこに住みたいと願う弟子(9:33)

・よきサマリヤ人(ルカ福音 10:25-37)

・いちじく桑の木に登ったザアカイ(ルカ福音 19:1-27)

・最後の日のしるし(ルカ福音 21 章)

・最後の晩餐と背信、逮捕、裁判(ルカ福音 22 章)

・歴史上一番暗かった日(ルカ福音 23 章)

・新しい日の到来（ルカ福音 24 章）

16 イエスは神の御子（ヨハネによる福音書）

ヨハネ福音書は 85-90 年頃に書かれました。この福音書を記録した時のヨハネは老人でした。しかし、ヨハネは 60 年前のイエス様が自分の生涯に与えた興奮と感激を忘れませんでした。ヨハネは他の弟子たちと一緒にイエス様がいろんな町で行われた説教や奇跡を数多く目撃しました。これらはイエス様が神の御子であることを証明する明々白々な証拠でした。ヨハネは、イエス様が神の御子でなければあり得ない多くのしるしを書き記すことで、この福音書を読む読者が「イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得る」(ヨハネ福音 20:31)ことを願いました。ヨハネは、イエスの行われた多くのしるしの中で 8 つのものを選別し、それらを中心に福音書を構成しています。

ヨハネ福音書にある八つのしるし

①水を葡萄酒に変えられた(ヨハネ福音 2:1-11)
②王室の役人の子を癒やす(ヨハネ福音 4:46-54)
③38 年間の病人を癒やす(ヨハネ福音 5:1-15)
④五つのパンと二匹の魚で五千人を食べさせる(ヨハネ福音 6:1-14)
⑤湖の上を歩く(ヨハネ福音 6:16-21)
⑥盲目を癒やす(ヨハネ福音 9:1-7)
⑦死んだナザロを生き返らせる(ヨハネ福音 11:11-44)
⑧イエスの復活(ヨハネ福音 20:1-10)

救いの鍵

福音書の中でもヨハネ福音書は、一番普遍的な感覚を持っています。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」(3:16)をはじめ、信じる者であれば誰でも(3:15,16、11:26)救われることを強調しています。また、ヨハネはイエスに関する良い知らせを伝えようとする意図から、永遠のいのち(17 回)、いのち(23 回)、愛(39 回)、信じる(97 回)などの言葉を多く用いました。

光といのちの根源(ヨハネ福音 1:1-14)

ヨハネはイエスの降誕のことは記述しませんでしたが、驚くべき真理を用いています。それは、「初めから、この世が造られる前から」神と共にいたイエスのことを語ったことです。そして、イエスがすべてを造ったことを強調しながら、イエスご自身がすべての光と命の根源であることを明記します。この方が人間と生られてご自身が造られた世に来られました。ご自身の民はこの方を拒みましたが、この方には恵みと真理が溢れていました。

神の子羊(ヨハネ福音 1:15-34)

バプテスマのヨハネは、ユダヤ人がメシヤを受け入れられるようにと、その道を整えました。彼はイスラエルの民に悔い改めを求め、自分のメッセージに従った者にはバプテスマを授けました。彼は自分の所に来られるイエス様を見て、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と叫びました。この言葉を聞いたユダヤ人は、過越の祭に捧げられる犠牲のいけにえとしての子羊を思い浮かべたことでしょう。

弟子たちを選ぶ(ヨハネ福音 1:35-51)

バプテスマのヨハネの弟子ふたりは「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言われるイエスについて行きました。そのひとりシモン・ペテロの兄弟アンデレで、彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ（訳して言えば、キリスト）に会った。」と言い、イエスのもとに連れて来ました。イエスはシモンに目を留めて「あなたはヨハネの子シモンです。あなたをケパ（訳すとペテロ）と呼ぶことにします。」と言われました。その翌日、ピリポに対しても「わたしに従って来なさい。」と言われました。ピリポはナタナエルに「モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会った。ナザレの人で、ヨセフの子イエスだ。」と告げましたが、彼は否定的な態度をとりました。しかし、イエスと出会い、「先生。あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と告白します。

最後の晩餐の席上で(ヨハネ福音 13-17 章)

イエスは弟子たちと一緒に最後の晩餐と呼ばれる夕食をとりました。その時、イエスは愛を残るところなく示されました。まず、弟子たちの足を洗います。洗足は奴隷がやることですが、イエスは自ら命を捨てて父のみもとへ帰られることと結び付けます。その後に、ユダの裏切りの予告し、ユダはイエスの慈しみを受け取れずに、裏切りへと走りました。続いてイエスは弟子たちのもとを去るべきことが告げられますが、その時に新しいい戒めを与えます。「わたしがあなたがたを愛したように互いに愛し合うこと」です。

地を去る日の近いことを聞かされた弟子たちが動揺するのを見越してイエスは、「心を騒がしてはなりません」と命じます。それは、信じる者のために住まいを用意するためだからです。ここでの住まいは、「神と共なる場所」を表し、15章の葡萄の木の譬えによく登場する「とどまる」という言葉と同じ意味です。続いてイエスは、弟子たちがご自身よりもすぐれたわざを行うことと、そのために祈りの特権が与えられたことを教えます。その後に、弟子たちのための祈りが書き記されています(17章)。

エピローグ(ヨハネ福音21:1-25)

よみがえられたイエスと食事を共にした後、ペテロは3度にわたって「わたしを愛しますか」との質問を受けます。ペテロの答に、イエスはその都度羊を飼うように彼に命じます。

17 聖霊の働き（使徒の働き）

使徒の働きは、ルカによって世界に広がる教会の歴史が書かれています(約 30 年間)。

聖霊を与える約束(使徒の働き 1：1―11)

ルカの福音書と同じくテオビロに献呈されたもので、福音書はイエスの行ないと教え、使徒の働きはイエスのよる救いが新しい段階に達したことを記します。2 節の「聖霊によって」は、弟子たちに対するイエスの働きかけが、聖霊の活動に引き継がれることを示します。十字架に至る苦難が復活の栄光につながったこと、そして天に上げられたことで、新しい時代（聖霊の時代）が始まることを、はっきりと悟らせました。弟子たちの関心はイスラエルという国の再興でしたが、イエスは弟子たちの「とき」に対する関心を修正し、「地の果てにまで」という空間的な責任を命じます。それが可能になるのは、聖霊が力を与え、弟子たちを証人とすることでした。

エルサレム教会の誕生（使徒の働き 1：12 - 8：1）

天に上げられたイエスの指示に基づいて、ユダに代る使徒を補充し、心を一つにして祈っている弟子たちに奇蹟的なしるしを伴って聖霊が注がれました。そして、使徒たちによるあかしを代表して、ペテロが力強く宣教します。その主題はイエス・キリストであり、宣教の方法は旧約聖書の見事な解釈と適用によるものでした。その説教によって集められた信仰者の群れは、新しい共同体として独自の生活をつくります。それは、秩序ある教会の形成に取り組むことを意味します。ルカの描く教会形成の姿が、簡潔なまとめの句として示され、聖霊に満たされた教会が活力にあふれて前進する様子が書かれています。

その一つは、使徒たちによってイエスによる奇跡行為が継続され、教会は聖霊の現臨の力に満ちた姿です。特にペテロを中心にメッセージと奇跡行為が書かれていますが、それによってユダヤ教の指導者との衝突が生れ、ついにはステパノの殉教や弟子たちの拡散という展開につながります。

ユダヤの境を越えて（使徒の働き8：1 - 9：43）

ステパノの殉教を契機に、ついに福音がユダヤの境を越えます。北方のサマリヤやダマスコでもキリスト者が誕生します。エルサレム以西のルダ，ヨッパでのエピソード，更にエルサレム南西のガザへの途上の出来事などが次々に報告され、宣教地域が一挙に拡大し、ユダヤの境界を突破する有様が生き生きと描かれています。その中でもサウロ（使徒パウロ）の回心は、宣教の拡大、特に異邦人に福音が力強く伝えられていくきっかけとなります。ルカは、パウロの回心と召命について3度も言及することで、彼の回心の重要性を物語ります（9：1―31、22：4 - 16、26：9 - 18）。

異邦人伝道の拠点（10：1 - 12：25）

福音はユダヤの境を越え、ヨッパ、カイザリヤなど海岸地方の都市にも教会の基礎を据えます。加えて、異邦人伝道への拠点を整える事件が2つ続きました。1つはカイザリヤにおけるコルネリオと親族一同の回心です。それは異邦人伝道への聖書的な（神学的）確信を、エルサレム教会の指導者に与えました。もう一つは、アンテオケに教会が設立されたことです。パウロによる伝道旅行の拠点教会が設立されたことにより、小アジヤとヨーロッパへの宣教に、具体的な足掛りが生れました。

全世界に出て行って、使徒パウロの宣教の記録（使徒の働き13：1 - 21：26）

使徒パウロを軸とした世界宣教の展開が報告されます。アンテオケ教会を拠点とした本格的な異邦人への伝道です。その中心はパウロによる3回の「伝道旅行」で、その行程の長さから見れば紛れもない伝道旅行ですが、一箇所に長く滞在する場合や再度の教会訪問もあります。いずれにせよ，このパウロの伝道旅行を通して復員が世界に広がります。

①第1回の伝道旅行（13：1 - 14：28）：紀元47年春から秋にかけて、バルナバやマルコと共にアンテオケを出発し、キプロス島を経て小アジヤの中南部の諸都市に伝道します。
②第2回の伝道旅行（15：36 - 18：22）：3回の伝道旅行のうち最大規模のもので、福音がついにアジヤの境を越えてヨーロッパに達します。旅行期間は紀元49年半ばから51年の終り頃と思われます。
③第3回の伝道旅行（18：23 - 21：26）：第3回の伝道旅行は、長期にわたるエペソ滞在が中心で、これによってエペソのみならず小アジヤ全域に教会の基礎が据えられました。旅行期間は、紀元53年春から56年春頃と思われます。

ローマへ（使徒の働き21：27 - 28：31）

パウロは異邦人教会の献金を届けるためにエルサレムに上りました。それは、全教会の一致を願う努力の表れでもありました。教会の一致を願うパウロは、エルサレム教会指導者の勧めを受け入れ、神殿にささげ物をしましたが、皮肉にもそれが逮捕のきっかけになります。結果的には、パウロは念願のローマ行きを果すことになり、ローマでも福音を伝えます。パウロは軟禁状態のまま満2年をローマで過します。この2年は極めて実り多い多忙な日々で、恐らくここで「獄中書簡」と呼ばれる4つの手紙が記されました（エペソ、ピリピ、コロサイ、ピレモンの4書簡）。パウロの聖書的思索が深められ、強くされ、イエス・キリストの日を目指す喜びに輝いたのも、この捕囚生活の中だと思われます。その後、彼がどうなったか、本書は何も語りません。2年後、釈放されて更にスペインにまで伝道の足を延したという伝承もありますが、確かではありません。神の国と主イエス・キリストは、前進することをやめません。エルサレムから始まった宣教は、ついにローマに達しました。本書のやや唐突な幕切れは、福音伝道のための聖霊の働きがなお続くことと、福音伝道が委ねられた教会の歴史が続くことを暗示します。

18 救いの条件（ローマ人々への手紙）

ローマ人々への手紙（ローマ書）は、イエス・キリストを信じる信仰によって永遠のいのちを得たローマの教会の人々に送った書簡です。ローマの人々がどのようにしてイエス・キリストを信じたかはよく知りません。ローマはパウロの伝道旅行の前からありましたので、使徒の働き 2:11 の「･･･滞在中のローマ人たちで」から、ペンテコステのペテロの説教を聞いた者たちが帰国した後、この教会の中心となったと思われます。まだ訪れたことのない教会にこれだけ整えられた内容の手紙を書き送ったのは、①キリスト教の教理の大綱を示し、教えることと、②ユダヤ人信徒と異邦人信徒の融和を図るなどのためだと思われます。

キリスト・イエスのしもべ（ローマ書1:1-17）

パウロは自分自身を「使徒として召されたキリスト・イエスのしもべパウロ」だと紹介しています。原文では、「パウロ、しもべ」が最初に来ます。そして、あらゆる国の人々の中に信仰の従順をもたらすために使徒として召されたことを明らかにします。また、パウロは「神の福音」を、ダビデの子孫として生まれたイエスが死者の中から復活されたことだと紹介し、この方こそ神の御子であり、私たちの主イエス・キリストだと教えます。

人類の罪（ローマ書1:18-3:20）

パウロは、福音の本質をつまびらかにするに先立って、福音の前提となる神の刑罰と審判、人間の罪性を明らかにしています。そのために、①異邦人の罪とそのさばきを(ローマ書1:18-32)、②ユダヤ人の罪とそのさばきを(2:1-3:8)、そしてその結果、③すべての人が罪人として神のさばきのもとにあることを明らかにします(3:9-20)。異邦人の罪において注目すべきことは、異邦人には自然啓示により神が明らかにされたことで弁解の余地がないことと、神を知っていながらその神を神として崇めなかったことでさばかれることです。ユダヤ人の罪において注目すべきことは律法によるさばきです。律法を持つ者が神の前に正しいのではなく、律法を行う者が正しいと認められることを強調し、律法に違反することでユダヤ人がさばかれることを教えます。

信仰によって義とされる（ローマ書3:21-4:25）

この部分は、信仰による義認の教理を教えます。それで、ルターはこの部分は「ローマ書だけでなく、聖書全体の中心的位置を占める」ものだと語りました。人間の罪について語ってきたパウロは、神の救いのみわざによってもたらされた劇的転換を、「しかし、今は」(3:21)と語り、今の時は神の義が示されたと宣言します。神の義は、律法とは別に示されたことで、イエス・キリストの十字架のことです。十字架は神の怒りに対する「なだめの供え物」であり、「あがないの供え物」です。それで、十字架のイエスを信じる信仰によって義と認められます。

キリストによる救いの恵みの豊かさと確かさ（ローマ書5-8章）

義認についての記述から義認の結果についての記述に移ります。信仰によって義と認められた私たちにキリストが与えて下さる祝福です。

①キリストによる平和（5章）：平和とは、キリストの血によって、神に対する私たちの関係が不和から平和の関係に決定的に変えられることを意味します。

②キリストとの結合（6章）：結合とは、キリストとキリスト者との生命的な固い結合(6節)と、キリストと共にあること(8節)です。

③律法からの解放（7章）：24節の悲痛な叫びは、律法によって明らかにされた死の体から逃れることの出来ないことを表します。この死の体からの救いが律法からの救いです。

④御霊によって生かされること（8章）：キリストにより頼む者に与えられる永遠の生命の確かさを教えます。

イスラエルの救い(ローマ書9-11章)

ここでは、イスラエルの救いの問題に焦点を合せて神の救いの働きを論じています。「神はイスラエルに多くの輝かしい約束を与えられたのに、なぜ彼らは救いから漏れてしまったのか」という疑問に対して、「神の約束」が無効になったわけではないと教えます。なぜなら、もともとイスラエル人として生れる者がみな、真のイスラエルなのではないからです。また、「恵みの選びによって残された者」がいることを明らかにします。

キリスト者の生活（ローマ書12:1-15:13）

1 - 11章で信仰の教理を順序立てて説明したパウロは、12章以下で、キリスト者の生活について教えます。罪人は信仰によってのみ神の前に義とされるのであって、律法の行いによって義とされるのではありません。つまり、信仰が行いに先行します。しかし、義とする信仰は、それにふさわしい行いを実らせます。信仰の従順という原理です。

パウロは、一人一人が恩恵の賜物を受けており、互いに責任ある生き方を求められている教会生活についても言及します(12:3-16)。また、自由の問題も言及し(14:1-12)、信仰の強い人は信仰の弱い人のその弱さをになうべきだと勧めます。

個人的あいさつ（ローマ書16章）

ローマ教会の26名の友人たちの名を挙げてあいさつがなされています。その中には多くの婦人が含まれているし、心のこもったあいさつから、初代ローマ教会の交わりの親密さを知ることが出来ます。

19 多くの問題を抱えた教会（コリント人への手紙）

コリント教会の人々の中にはエリートや立派な雄弁家もいました。しかし、彼らの倫理と信仰のレーベルは基礎段階に過ぎませんでした。それによって教会は争い、パウロの使徒権までも疑う人々が現れました。それでパウロはコリント教会に書簡を送ります。このコリント書簡には、教会の分派問題、倫理・自由の問題、賜物の問題、復活の否定問題、自分の使徒権などの争点を正そうとします。第１コリント書簡では教会に関する焦点を、第２コリント書簡では、パウロの使徒権の問題が集中的に扱っています。

ガキ大将を選ぶな（第1コリント1-4章）

ガキ大将になろうとするのは子供だけではありません。大人の社会でも、教会の中でもガキ大将になろうとする人がいます。コリント教会にはガキ大将の候補者よりも、ガキ大将を作ろうと群がった人々のことで争っていました。パウロ、アポロ、ケパに追従するという人々に、キリストに直接に結び付くことを主張した群れがいました。パウロは、分派は主の体を分割しようとする罪であると教えます。そして、彼らが群がろうとするガキ大将とは、人々の信仰のために神が用いるしもべ、それも神に共に仕える協力者に過ぎないことを教えます。また、群がることを好むコリント教会に、争いの根本的な原因は高ぶる思いだと指摘します。コリント教会の高慢の根には、救いの完成をすでに得ているとする有頂天な思い込みがありました。それで、パウロはコリント教会の高慢を自分たち使徒の

実例によって打ち砕き、使徒たちが現に味わっている苦難や弱さは、今が救いの完成していない時、主に従って十字架を負う時であることを如実に示しています。

野放図な自由を切り捨てなさい（第1コリント5-6章）

コリント教会は統率力を失いました。ガキ大将に群がろうとして争うこともそうですが、他の問題も多く抱えていて、何の処置も取りませんでした。性的にルーズだったギリシヤ世界でさえも禁じられていた罪の問題を放置し、また、会員同士の経済的いざこざから互いを裁判に訴えることが行われていました。このような醜態は、彼らがかつて異教徒だった時の罪に逆戻りする方向のものです。これらの問題に対してパウロは、信徒はキリストの十字架という代価によって買い取られた者であり、自分の体をもって（具体的行動の一つ一つを通して）神の栄光を現すべき存在だと教えます。

結婚の問題（第1コリント7章）

コリント教会には、自由を主張して不品行に走る者への反動から、禁欲主義的に結婚や夫婦間の愛情を信徒にふさわしくないとする者がいました。他方、独身主義に対する疑義もありましたので、それらの問題に答えています。

① やもめを含む独身者たちには、独身のままでいることの有利さを説きます。ただし、自制出来ず情に燃えるより結婚すべきだとも教えます。

② 信徒夫婦に対しては、主の命令として（マタ5:32）離婚を禁じます。ただし、それでも離婚してしまった場合、再婚せずにいるか、和解するかを命じます。

③ 不信者と結婚している人に対しては、使徒としての命令を与えます。不信者が結婚関係維持を望んでいるなら離婚してはならない、ただし、不信者が配偶者の入信を嫌って離婚する場合は、離れるままにすべきであって、結婚関係保持の義務はないと教えます。

④ 処女の結婚問題については、使徒として信任された者として意見を述べています。パウロの意見では、処女は結婚しないでいるほうがよいということです。現在が危急の時（迫害などの苦難が間近な時）だからであります。このような時には現状にとどまって信仰の戦いに備えるべきだと考えていました。勿論、結婚することは罪ではありませんが、その場合、家族を抱えて信仰の故の苦難に立ち向かうというつらい立場に身を置くことになるので、パウロはそのことを危惧して、独身を勧めています。

偶像の問題（第1コリント8-10章）

社会生活の中で、偶像の神殿での会食に招かれることや、偶像に供えられた肉の多くの部分は戻されて市場に出回ったので、市場で買う肉は偶像に供えた肉の可能性が大いにありました。ですから、肉を食べることについて教会内に意見の相違がありました。それで、パウロは、知識に基づく自由があっても、偶像に供えた肉をためらいなく食べる人々に、知識よりも愛に基づく判断を教えます。愛によって自由の自発的放棄は可能です。

正しなさい（第1コリント11-14章）

ここでは、コリント教会の集会の乱れについて、特に、女性の身だしなみの乱れ、聖餐式の乱れ、異言の偏重についての問題を扱っています。コリントの集会は、集まることが益ではなく害をもたらすようになっていました。分裂分派は、真の信者が誰か明らかにされるためには不可避ではありますが、それを引き起すこと自体は罪です。それで、パウロは愛(13章)と秩序(14章)を強調します。

開いたお墓、開いたお財布（第1コリント15-16章）

コリント教会には「死者の復活はない」と言う人々がいました。その思想の詳細は不明ですが、現在の救いの十分さを主張して終末の希望を否定したのかもしれません。それで、信仰の基本にかかわるこの誤りを15章は扱い、死人の復活がなければ信仰はむなしいものだと教えます。そして、コリント教会は財布の紐を緩め、経済的不利益を被るエルサレム教会の貧しさのために定期的に支援すべきことと教えます。

涙ながらに（第2コリント1:1-2:13）

パウロはコリント教会の混乱を収めるため第1コリント書簡を書き送りました。その後、教会の問題が収まったかどうかは不明ですが、パウロは、コリント教会の成行きを案じてマケドニヤへ渡り(2:12-13)、そこで、コリントから帰ったテトスに会い、教会の悔い改めを聞きます（7:5-16）。この朗報に接してマケドニヤから書いたのが第2コリント書簡です。

パウロはエペソからコリントに直行する計画を通知していました（1:16）。しかし、この計画が変更され、彼はマケドニヤ経由でコリントに行くこととなります。この変更はコリント教会軽視と見られ、パウロの誠実さをも疑わせるものとなりました。それで、パウ

ロはコリント教会に、相互の信頼と尊敬を訴えます。そして、変更の理由として、悔い改めないコリント教会を訪問して厳しい叱責と処罰で教会を悲しませたくない、という思いやりからだった（1:23-2:1）ことを明らかにします。また、有望伝道地トロアスを後にし、マケドニヤに来たのはマケドニヤを優先し、コリント教会を軽視したことではなく、寧ろ、コリントからの報告を一刻も早く聞くためであったことを明らかにします。

使徒権の防衛（第2コリント2:14-6:10）

この部分は、パウロ自身の自伝を読むような印象を与えます。コリント教会で起きた問題の一つはパウロの使徒権の否定だったので、パウロは自分の履歴を取り上げ、栄光の福音に仕える使徒として任じられた証拠を示しています。まず、自分の功績ではない伝道の実りを証拠として取り上げています。そして、栄光の福音に仕える使徒として自分の姿は弱さと苦難にあふれている土の器に過ぎなかったことも取り上げています。敵対者はそれを使徒にふさわしくない貧弱さとして攻撃しましたが、パウロは、自分の弱さと貧しさこそが、福音の栄光を現す最善の背景であったことを語ります。つまり、福音という宝の故に、神の力を受け、苦難と迫害の中であっても支えられたことが使徒の証拠だと語ります。

5:11-6:10では、真正の使徒としての自分のことを語っています。

①主の愛に動かされる者(5:11-15)：自分はキリストの贖罪の愛に動かされて宣教活動をしていると語ります。つまり、キリストの愛の故に宣教活動をしていると語ります。

②和解の福音の使者(5:16-19)：自分は和解の務めを頂いたと語ります。キリストの贖罪の出来事は、神が人と和解された画期的出来事であったこと、自分はキリストの使節であり、和解の言葉をゆだねられた者として、和解の務めを実践していることを語ります。

③実際活動での使徒職の証明(6:3-10)：自分の実際活動を使徒の証拠として提示しています。それは、偽教師が誇った人間的優秀性とは違い、苦難の中で現れる神の恵みです。

悔い改めた教会への言葉（第2コリント6:11-7:16）

コリント教会の悔い改めにより、深刻な危機は終りましたが、パウロは完全な信頼関係を築くために、子を愛する父が子にも愛が芽生えるのを待つような気持で、彼らに心を開くよう呼びかけています。ですから、この関係修復は無原則な和解とは異なります。関係

修復のために取り上げたことは、コリント教会がこの世への妥協的態度を捨てて、聖さを求めることです。つまり、汚れからの分離を命じます。

そして、コリント教会の悔い改めを聞いた時の喜びと慰めを語ることで、以前送った手紙の主たる目的は、悪を働き教会を迷わせた人を非難することでも、被害を受けたパウロ自身の立場を守るためでもなく、教会がパウロを使徒として愛する思いを持っていることを神の前で自覚させるためであったことを明らかにします。

救済献金（第2コリント8-9章）

7章までで確認された互いの信頼を土台として、コリント教会に、エルサレムの貧しい信徒を助けるための献金を訴えています。ユダヤ教徒に囲まれたエルサレムの信徒の多くは、社会的・経済的不利益を受け、貧しい人が多くいました。それで、パウロは諸教会からの救済献金を募っていました。また、エルサレム教会への募金は、単なる援助以上に、異邦人教会とエルサレム教会の神の民としての一体性のあかしとして重要であったので、この献金の意義は大きいものでした。それで、パウロは関係を修復したばかりのコリント教会にも、あえてこの募金を訴えているのです。

その中で、パウロはマケドニヤ（ピリピ、テサロニケ、ベレヤ）諸教会の模範的な献金を紹介します。彼らは入信の時から迫害を受け、苦難と困窮の中で試練を受けていましたが、信仰の喜びにあふれて献金をしました。自発的に、また、力以上にささげたその熱心に促され、パウロはコリント教会をもこの献金に連ならせることを願うようになりました。それで、コリント教会に与えられた信仰的賜物の数々を示して、それらの賜物に献金の賜物を加えるよう促します。

敵対者を念頭に（第2コリント10-13章）

主に推薦された自分を受け入れたことへの称賛とともに、コリント教会が、再びパウロの使徒権を否定する敵対者とそれに追随する信徒がないようにと、注意を喚起しています。①自分を低くして報酬を受けずに神の福音を宣べ伝えたこと、②特別に神秘的な体験であった幻と啓示があること、③奇蹟と不思議と力あるわざをなされたこと、などを取り上げ、惑わされることがないようにと教えた後、コリント教会への訪問を告げています。

20 心の鎖を外せ（ガラテヤ人への手紙）

鎖につながれた囚人たちが救われました。しかし、助かった囚人の中で何人かは以前の鎖につながれた生活に逆戻りしました。愚かな姿です。一世紀の小アジア地域のガラテヤ地方でも似たことが起こりました。

ダマスコ途上で、神の恵みにより異邦人宣教の召命を受け、処々各所で神の恵みに応答する歩みを積み重ねた(2:21)パウロは、本来神でない神々の奴隷となっていたガラテヤ人にキリストの福音を宣べ伝えました。この書簡の受信人たちも、一度はパウロと同じく神の恵みに応答し、福音を受け入れ、教会の誕生と成長を見た人々です。ところがガラテヤの教会は、かき乱す者たち(1:7)の影響を受けてしまい、彼らが教える儀式や律法に再び鎖につながれてしまいました。それは、神の恵みに応答し続けることをせず、キリストの恵みをもって召して下さった方を見捨ててしまったことでもあります。このような危機的事態に直面したガラテヤの教会をパウロは訪問し、事態を処理出来ない制約の中にあったため(4:20)、パウロは論敵の攻撃に反撃しつつ、パウロ自身のように受信人たちも神の恵みに応答し続けよと切願し(4:12)、本書を書き送りました。

気紛れな信仰（ガラテヤ１章）

教会をかき乱す者たち(にせ教師)は、ガラテヤの教会に伝えられた福音に対する信頼性を崩すために、その福音を伝えたパウロを攻撃しました。それで、パウロは自分の使徒職は人や人の手によるものではなく、イエス・キリストと父なる神によったものであることと、パウロを使徒として認め、その福音を受け入れたパウロの同労者たちのこととを書きました。そして、神の御心により主イエス･キリストが私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになった福音も、人間によるものではなく、イエス・キリストの啓示によって受けたものだと明記することで、にせ教師の主張を反撃します。

その後、パウロはガラテヤの教会がキリストの福音を急に見捨て、ほかの福音に移って行くことに驚いたことと、ほかの福音を伝える者に下る神の審判を語ります。

福音の闘士となったパウロ（ガラテヤ2章）

パウロは自分が宣べ伝えた福音を2度も弁護しなければなりませんでした。1回目は、エルサレム教会の指導者たちが異邦人への福音宣教の

内容を確認し、評価するエルサレム会議(使徒の働き15章)の時のことです。パウロはバルナバと異邦人であるテトスを連れて参加しました。その時の決定は、ペテロが割礼を受けた者への福音を、パウロが割礼を受けない者への福音をそれぞれ委ねられていることを確認し、ペテロとパウロそれぞれに使徒職が与えられたと確認しました。そして、パウロの宣べている福音を認め、割礼強制などをつけ加えることをしないことをも確認しました。

もう1回目はアンテオケでの出来事で、パウロはケパ（ペテロ）を公然と非難した事件の要点を述べています。それは、異邦人と一緒に食事をしていたペテロが割礼派の人々を恐れ、身を引くことを非難したことです。共同の食卓を拒否することは、結果として、今まで通り食卓の交わりを保とうとする異邦人キリスト者に、割礼を受けることを強いることになるからです。これは、福音の真理にふさわしい行為ではない、信仰と一致しない行為だとペテロを非難しました。

律法の目的（ガラテヤ3章）

多くのにせ教師は、キリスト教の信仰に旧約聖書の律法を取り入れる必要があると主張し、神様と正しい関係を保つためには異邦人もユダヤ人にならなければならないと教えました。それでパウロは、ガラテヤの教会が律法を自ら行い義とされる肉による完成を求めるのか、と厳しい問いかけを繰り返し、律法（の行い）と（キリスト）信仰との対比、霊と肉との対比を明示しつつ迫ります。

パウロは、アブラハムが律法の行いによってではなく、神を信じ、義とみなされたと語ることで、アブラハムのように割礼を受けアブラハムの子孫に加えられよ、と主張するにせ教師の過ちを指摘します。また、律法は、律法を破る者にのろいを宣言しますが、キリストは、こののろいを十字架の死を通して身に受け、民をのろいから贖い出し、アブラハムに約束されている御霊を私たちが受ける道を開かれたと教えます。また、パウロは、神の救いのご計画における律法本来の目的と役割を、人が神の御前に義とされることを巡り説き明かします。

成長しなさい（ガラテヤ4章）

パウロは、幼稚な教えに逆戻りして、再び律法の奴隷になろうとするガラテヤの教会を非難し、そのような姿のことを、後見人や管理者の下にある幼い相続人だという繰り返し語っています。そして、ガラテヤの教会が霊的に成長していくことを強く期待しています。そのためには、アブラハムが女奴隷ハガルと女奴隷の子イシュマエルを追い出したようににせ教師やその教えを追い出すべきだと教えます。

聖霊に導かれる人生（ガラテヤ5章）

パウロは、神の関心事は、人々の儀式的な宗教生活ではなく、人の内面の状態にあると教えます。クリスチャンは自分たちを聖霊の導きに従わせなければなりません。そうでなければ御霊の実を結び、神を喜ばせることができないからです。

キリストの律法（ガラテヤ6章）

善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば時期が来て刈り取ることになります。

21 新しい共同体（エペソ人への手紙）

手紙の内容は千差万別ですが、監獄から来た手紙の多くは、後悔の涙や懇願、決心などでつながる内容がよく見られます。ローマの獄中にいたパウロも教会に手紙を送りました。しかし、彼の手紙には後悔の涙や転向したいという内容はありません。寧ろ、正反対の内容が多く見られます。それは、愛と喜び、感謝するという内容です。パウロは、キリストとクリスチャンに対する思いの故に喜びと愛、感謝で溢れています。パウロはローマの獄中でエペソ書、ピリピ書、コロサイ書を書き送りました。

新しい共同体（エペソ 1:3-3:21）

エペソ書簡の主題は「新しい共同体」、それは、いかなる国・環境に育った者もキリストにあって一つに集められる、神のご計画を示すこと(1:10)です。特に、ユダヤ人教会と異邦人教会の統一(3:6)は、パウロ積年の祈りの課題でした。ユダヤ人キリスト者は、モーセの律法がすべての者を拘束するとして、異邦人キリスト者にも割礼などを求めました。これに対しパウロは信仰義認、すなわちユダヤ人も異邦人もキリストを信じる信仰によってのみ救われることを教えました。この信仰によってすべてのクリスチャンは聖なる民であり、御国を受け継ぐ者であり、神の栄光をほめたたえる者となりました。そして、同じ国民として、神の家族としてすべてのクリスチャンは、よみがえられたキリストを土台とする教会に集められ、組み合わされ、全体が成長し、主にある聖なる宮となります。

このことからパウロは3章で、膝をかがめて祈ります。

①「内なる人を強くしてくださいますように」：霊的強化の秘訣はキリストの内住にあり、キリストの内住を求める祈りです。

②「理解する力を持つように」：キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さがどれほどであるかを理解できることを求める祈りで、ベンゲルは、「主の愛の広さは全人類を覆う。長さはあらゆる時代にわたる。高さはいかなる敵も侵し得ない。深さは被造物には測りがたい。」と語りました。

③「満たされますように」：神ご自身の満ち満ちたさまとは、キリストと同じくらい愛と命に満たされるようにとの祈りです。それは、私たちも御霊によって神の御住まいとなるための祈りです。

新しい共同体の姿（エペソ 4-6 章）

エペソ書簡の前半の教理（特にキリストにある新しい共同体）を受けて、4章からの後半ではそのあるべき姿・実践を勧めています。その実践の奨励に入る前に、4:1-16では新しい共同体の一致が確認されます。そして、すべてのクリスチャンには「信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達する」ために以下の歩みが求められています。

①「召しにふさわしく歩み」(4:17-24)：クリスチャンは、神のない人のむなしい生き方に倣うのではなく、心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことを学ぶべきです。

②「真実と愛の歩み」(4:25 - 5:2)：神にならう者の具体的な例を取り上げています。

③「光の子としての歩み」(5:3 - 14)：光の子どもらしく歩むために、主に喜ばれることが何であるかを見分けることと、暗やみのわざに仲間入りをしないことです。

④「賢い人としての歩み」(5:15 - 20)：機会を十分に生かして用いることと、御霊に満たされることです。

特に、キリストと教会の関係を夫婦の関係(5:21-33)として教えることで、共同体の本質とその実践を同時に教えている箇所は注目すべきです。まず、キリストはご自分の前にしみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を立たせるために教会を愛し、教会のためにご自身をささげられました。この真理から、教会がキリストに従うように、妻はすべてのことにおいて夫に従うべきことと、夫はキリストが教会をように、自分の妻を愛すべきことが勧められています。そして、新しい共同体の一員の実践として夫婦関

係から親子の関係(6:1-4)、奴隷と主人の関係(6:5-9)がその延長線で勧められています。

パウロはこの手紙の最後の部分で、クリスチャンはサタンとその追従者と戦っているので、戦いに備えて武具を取るようにと教えます。神の武具は、真理の帯、正義の胸当、平和の福音の備え、信仰の大盾、救いのかぶと、御霊の与える剣です。キリスト者の戦いが血肉に対するものではないことから、主にあって強められるには祈ることも必要です。

エペソ書簡の内容

1. あいさつ（1：1 - 2）
2. 神による新しい共同体（1：3 - 3：21）

①神の救いへの賛美（1：3 - 14）

1）父なる神による選び（3 - 6）　2）子なる神による贖い（7 - 12）　3）聖霊なる神による保証（13 - 14）

②神の啓明を求める祈り（1：15 - 23）

③キリストにある新しい命（2：1 - 3：21）

④教会の奥義（3：1 - 21）

1）異邦人の召し（1 - 9）　2）神の知恵を示す教会（10 - 13）　3）キリストの愛を知るように（14 - 21）

3. 新しい共同体の姿（4：1 - 6：20）

①キリストの体の一体性（4：1 - 16）

②キリスト者の人格的基準（4：17 - 5：20）

1）新しい人としての歩み（4：17 - 24）　2）真実と愛の歩み（4：25 - 5：2）　3）光の子としての歩み（5：3 - 14）

③キリスト者の社会倫理（5：21 - 6：9）

1）妻と夫の関係（5：21 - 33）　2）子と親の関係（6：1 - 4）　3）奴隷と主人の関係（6：5 - 9）

④キリスト者の戦い（6：10 - 20）

1）戦いの相手（10 - 12）　2）戦いの武具（13 - 17）　3）祈りの援軍（18 - 20）

4. 結びの言葉（6：21 - 24）

22 天に属する者（ピリピ人への手紙）

ピリピ教会は、贈り物をエパフロデトに託して、獄中のパウロに送りました(4:18)。エパフロデトは単なる使者としての務めだけでなく、パウロの身の回りの世話をするはずでしたが、病気になってしまいました(2:26 - 30)。彼の病気が治り次第、心配しているピリピ教会に彼を送り返す際に、パウロはこの手紙を託しました。このような状況の下で書かれた手紙なので、個人宛のものを除けば、パウロ書簡中、最も人情味あふれる手紙です。

福音宣教の前進（ピリピ1:1-1:26）

ピリピ教会はパウロが獄中にあっても支援し続けていました。それに対してパウロは感謝しつつ、①あなたがたの愛が…いよいよ豊かになり、②あなたがたが…純真で非難されるところがない、③イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされることを祈ります。また、パウロの逮捕、投獄が、教会や福音宣教の働きに損失をもたらすのではないか、との危惧を否定し、むしろ福音が前進したことで喜んでいると語ります。

福音にふさわしい生活（ピリピ書1:27-2:30）

ピリピ教会の状況に対する詳細は不明ですが、教会は内外から攻撃されていました。この闘いを闘い抜くためには何よりも一致が必要であることを教えます。そして、そのためには福音にふさわしい生活が必要であることを教えます。福音にふさわしい生活は、キリスト・イエスのうちに見られた心構えで生きることです。外部の敵と有効に闘うためには、教会が内的に整えられ、一致している必要がありますが、教会たるものが内向的になってはいけないことを、クリスチャンの本質からも教えます。それは、クリスチャンは今と終末、地上と天上との緊張関係のただなかに生きている者で、曲がった邪悪な世代において世の光として輝く存在だからです。

目標を目ざして一心に走る（ピリピ書3:1-21）

反対者たちは、ユダヤ主義的な色彩の濃い者たちであったかもしれません(2-3節)。しかし、パウロは欠けたことのない立派なユダヤ人でしたが、それらが自分に救いを得させてくれるものではないことを知っていました。むしろ、ユダヤ教徒としての立派な実績も、キリスト者

となって損と思うようになったことを強調し、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことが大切だと教えます。特に、パウロは、神から与えられる義を持つことができることを望みと語り、自分はすでに捕えたなどと考えずに、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っていると語ることで、ユダヤ主義者のように、すでに獲得したという現状維持的、静的なものではなく、目標を目指す動的な者がクリスチャンであり、最終的にはキリストの再臨、更には体が変えられるという終末的希望に生きる者だと教えます。

喜びなさい（ピリピ4章）

3章までで手紙の本文が一段落し、ここでは具体的な勧めが与えられています。その一つは、ユウオデヤとスントケが同じことを思う、一致するようにと命じたことです。また、いつも主にあって喜ぶことを命じています。クリスチャンがいつも主にあって喜ぶことができるのは、主の再臨が近いことと、人のすべての考えにまさる神の平安が心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれるからだと説明します。これは、本書が獄中で、それも処刑されるかもしれないパウロの口から喜びを強調する根拠であります。状況のいかんにかかわらず、キリストを知り、キリストに知られ、キリストが最善をなして下さることを知る者の喜びを、パウロは身をもって示しています。本書の最後には、ピリピ教会が自分のことを心にかけていて、困難を分け合ってくれましたことへの感謝が綴っています。

ピリピ書簡の内容

1. パウロの個人的な状況の報告（1:1-26）
   1)挨拶と感謝(1:1-11)　2)広がる福音(1:12-14)　3)様々な福音伝道者(1:15-18)　4)パウロの願い（1:19-26)
2. ピリピの教会に対する勧め（1:27ー2:18）
   1)福音的な生活(1:27-30)　2)一致（2:1-4）　3)謙遜な姿勢（2:5-11)　4)終始一貫(2:12-18)
3. ローマからの便り（2:19-30）
   1)テモテを送る（2:19-24）　2）エパフロデト(2:25-30)
4. パウロの警告（3 章）
   1)ユダヤ主義者に対する警告(3:1-16)　2)道徳廃棄論者に対する警告(3:17-21)
5. 結語とあいさつ（4 章）
   1)和解のために(4:1-3)　2)学んだことの実行(4:4-9)　3)贈り物への感謝(4:10-20)　4)挨拶(4:21-22)　5)祝祷(4:23)

23 成人した者になりなさい（コロサイ人への手紙）

コロサイ書簡を次のようにまとめてみました。

神の恵みと平安があなたがたの上にありますように(1:1-2)。あなたがたの信仰と愛のことで神に感謝しています(1:3-8)。私はあなたがたが神のみこころに関する真の知識に満たされることと、主にかなった歩みをするように祈ります(1:9-14)。なぜなら、御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方だからです(1:15-20)。また、その死によって、あなたがたを神と和解させてくださったからです(1:21-23)。ですから、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。(1:24-29)。

キリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されています(2:1-5)。ですから、主にあって歩みなさい(2:6-7)。この世に属する幼稚な教えには注意しなさい(2:8-10)。あなたがたは、バプテスマによってキリストとともに葬られ、キリストとともによみがえらされたので、人間の戒めと教えに従って生きる必要はありません(2:11-23)。

あなたがたは上にあるもの、即ち、キリストを思い、求めなさい(3:1-4)。古い人をその行ないといっしょに脱ぎ捨てて(3:5-9)、造り主のかたちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至る新しい人を着なさい。すべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです(3:10-14)。

すべて主イエスの名によってなし、主によって父なる神に感謝しなさい(3:15-17)。妻よ、夫に従いなさい。夫よ、妻を愛しなさい(3:18-19)。子よ、両親に従いなさい。父たちよ、子どもをおこらせてはいけません(3:20-21)。奴隷よ、主に対してするように、心から主人に従いなさい。主人よ、奴隷に対して正義と公平を示しなさい(3:22-4:1)。

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。同時に、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください(4:2-6)。主にあって愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労者たちがあなたがたによろしくと言っています(4:7-15)。この書簡はラオデキヤと交換して読み、アルキポに、主にあって受けた務めを注意してよく果たすように、と言ってください(4:16-18)。

キリストにある成人として立たせるため（コロサイ1章）

パウロはコロサイ教会を取り巻く心配すべき状況を、恐らくエパフラスから得ていました。しかし，パウロはいきなりコロサイ教会の問題

点を指摘したり批判を加えたりしようとはせず、むしろこの教会が福音を信仰と愛と望みの形で受け入れたことを感謝することから始めています。そして、御子イエス・キリストに関する知識と、御心にかなうキリスト者としての歩みに関することのために祈ります。それは、コロサイ教会の人々が成人として立つためです。

幼稚な教えに気をつけなさい（コロサイ2章）

キリストを正しく認識したのであれば、偽りの教えの風に惑わされるようなことはありません。コロサイ教会は、ユダヤの伝統宗教にキリスト教を継ぎ足したようなものがあるかのような教えに惑わされていました。これらは特別な体験の故に、宗教心の深さ、熱心の現れとして評価されました。しかし、これらはキリストを心から愛し、信じていると話しても、自分の禁欲、宗教的慣行に対する熱心、霊的情熱などに頼っていることであって、キリストの贖いのみわざの意義を喪失させることになり、キリスト教信仰を根底から揺り動かすものになります。パウロはコロサイ教会に侵入しているこの教えを幼稚な教えとと断定します。

成人した者としてふさわしい生き方（コロサイ3:1-4:1）

キリスト者は健全な救いの教理について確かな知識を持たなければなりません。しかし、偽りの教えを拒み、正しい福音を受け入れることだけでは十分ではありません。福音に基づく生活が求められているからです。

まず、上にあるキリストを常に意識して生きようとする心が求められます。意識的にイエス・キリストのことを心に思い浮べて生きることがキリスト者の生き方の第1歩だからです。そのような者には生活の聖潔が求められます。そして、愛とキリストの平和、感謝の心、神礼拝が求められています。

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい（コロサイ4:2-6）

パウロは、神の助けを求めることなしにキリスト者としてふさわしく生きることはあり得ないことをよく知っていました。パウロは自分にもそれが適用されることを認識していたので、コロサイのキリスト者に祈ってほしいと願っています。私たちがどれほど他者の祈りを必要としているかを認識し得ないのは、祈りの力の認識の不足、ひいては祈りに応えて下さる神に対する信仰の不足を示していることでもあります。更にパウロは、機会を十分に生かして用いるようにと教えました。文字通りの意味は時間を買い取ることですが、日常の小さな事柄が福音宣教の前進後退を決めてしまう場合もあることから、言葉と振舞いにおいて細心の注意をする必要があることを教えます。

24　イエス・キリストの再臨を待つ教会（テサロニケ人への手紙）

紀元50年の初め頃、パウロとシラスとテモテはピリピで女奴隷から占いの霊を追い出したために訴えられ、むち打ちの刑にあい、投獄されます。しかし、看守やその家族が救われる奇跡を通して釈放された一行は、テサロニケに着きます。会堂で聖書に基づいてイエスが救い主であることを論じたところ、何人かが導かれ、そのうちの1人ヤソンは、自分の家を宣教拠点として開放しました。数週間の滞在で神を畏れる異邦人と貴婦人たちが回心し、テサロニケ教会の核となりますが、暴徒による騒動で妨害され、ヤソンとその仲間が暴行されたため、一行は町を去ることを余儀なくされました。テサロニケを急に去らなければならなくなった無念さと、そこの人々が間もなく直面するだろう迫害を思い、パウロは、様子を見るためにテモテをテサロニケに派遣しました。コリントに滞在していたパウロは、教会がしっかりと立っているとの知らせを聞いて慰められました（第1テサロニケ3:6-7）。ところが、若い教会が更に患難の中で励ましと教育を必要としているとの情報も得ます。そこへ戻ることは出来ないと分かったパウロは、2通の手紙を書き送ります。この2通の手紙の中で、パウロは若い教会への愛と祈りを示しています。

模範的な信仰（第1テサロニケ1章）

マケドニヤとアカヤの他の信者の模範となったテサロニケ教会の特徴は、信仰・愛・希望でまとめられます(1:3)。

戻りたいと願う心境（第2テサロニケ2-3章）

パウロは短い滞在期間でしたが、テサロニケ教会を中心に福音を伝え、信じる者を教えた時を思い出しながら(2:1-12)、テサロニケ教会の人々が霊的に成長していることで神に感謝しています(2:13-14)。また、パウロは彼らとの再会を渇望し、更なる成長のため(信仰の不足を補いたい)に訪問の計画を立てましたが、サタンの妨げ(教会が患難に直面すること)で実現できなかったことも明らかにします。

再臨を待つ姿勢（第1テサロニケ4-5章）

主の再臨を待つ者には神を喜ばせる義務があります。それでパウロは、信仰生活のすべての領域で神を喜ばせるために詳しい指示を与えます。特に、ギリシヤ・ローマの異教的背景を持つ者に異性関係や結婚関係は、コリント教会でも見られたように大変さがありました。異教徒の情欲におぼれる関係では神を喜ばせることは出来ないと明確に教えます。また、信者の死について「眠った」と語り、信者がいつの日にかよみがえりの命に目覚めると教え、死んだ信者がどうなるかに確信が持てず悲しみに沈む者に復活の希望を真剣に受け止めるように教えます。

再臨の時の報い(第 2 テサロニケ 1 章)

キリストの故に迫害の中で固く立つことは、神に反対し、神の民を苦しめる悪しき者たちには報いとして苦しみを与え、逆に苦しめられている者には安息を与えてくださると確信しているからです。それで、パウロは絶えず神が彼らを神の国に召された者にふさわしくして下さるように、また彼らが神の力によって信仰の働きをするように、と祈ります。

不法の人の到来(第 2 テサロニケ 2:1-12)

主イエスが終末に関する説教の中で、惑わす者について警告されたように（マルコ福音13:5）、パウロもまた、主の再臨についての偽りの教えにだまされないように（3節）と警告します。特に、「不法の人」が現れることを強調しますが、「不法の人」とはセム語的な慣用句で、「滅びの子」すなわち「破滅に定められた者」を意味し、「反キリスト」を指す言葉です。世の終りには、主イエスが栄光のうちに現れるように、「不法の人」もまたその先に姿を現し、人を欺く不思議なしるしとわざを行いますが、神のすべての敵の運命と同じように、滅ぼされることを明記し、惑わされないようにと教えます。

堅く立ちなさい(第 2 テサロニケ 2:13-3:18)

まず、パウロはテサロニケ教会が主の審判ではなく、主の栄光を得るために選ばれたことを教えます(2:13-24)。救いと聖化と信仰は、やがて現される栄化を得るための準備段階で、この地上では完成することがないため、再臨を待ち望む者とします。この望みから固く立つことを勧めています。教えられた言い伝えに固く立つようにと勧められていますが、「言い伝え」とは、イエスと使徒たちの倫理的・教理的な教えです（参照、第1コリント11：2、23）。固く立ち、教えられた言い伝えを守ることは、自分の力だけでは不可能であるため、パウロはテサロニケ教会のために祈ります。彼は祈りの中で神が与えて下さった2つの賜物について言及します。1つは、キリストの受肉と死のうちに最高に現された神の愛が注がれている事実に基づくものであり、永遠の慰め(16節)です。もう1つの賜物は、すばらしい望みです。パウロは、永遠の慰めと素晴らしい希望に触れて後、まず教会がそれを経験するようにと祈ります。次に、教会があらゆる良いわざとことばにおいて強められる(支える、補強するの比喩的な意)ように、と祈ります。また、パウロは再臨が間近いと予想し、締りのない歩み方をしている者との交際から離れるようにと命じます。締りのない歩き方は、怠惰な生活をする者を意味します。彼らはキリストの再臨が間近いと主張して日々の仕事を放棄していた人々です。彼らには「働きたくない者は食べるな」という原則で戒めます。

最後に、再びパウロはテサロニケ教会のために祈った後、自筆で署名をし、この手紙が自分のものであり、この手紙で述べたことの重要性を強調します。同時に、自分の名前を使った偽の手紙と区別することをも期待しています。

25 次の世代へ（テモテ・テトスへの手紙）

次の世代へ（第 1 テモテ 1:1-11）

この書簡はパウロがローマでの囚われの期間が終わり解放され、再び伝道に尽力した時期に、テモテに送った手紙です。この時テモテはエペソ教会の牧師でした。パウロは牧会に奮闘しているテモテの指導と同時に、長い伝道生涯を走り続けた今、次の世代にバトンを確実に渡さなければならないと考えていました。信仰生活における自己訓練、神の言葉を忠実に説き教えること、家庭生活と教会生活の秩序、忠実な人々に働きを委ねること等、大切な教えを記しています。殊に誤った教えとその影響を憂慮し、偽りのない信仰を土台とする清い心、正しい良心、愛を教え、律法の役割は罪の自覚を生じさせ、キリストへ導く養育掛りで、正しく良いものだと教えています。

あわれみの見本（第 1 テモテ 1:12-20）

パウロは、主への心からの感謝を持ってこの節を始めます。なぜなら、彼は「以前には、神をそしる者、迫害する者、不遜な者であった」が、神様のあわれみのゆえに赦されたことを深く感じているからです。また、「罪人のかしら」のような自分が、救いの恵みにあずかり、福音の器として神様が選んで下さったことを知ったからです。それは単にパウロ自身のためだけではなく、イエスがパウロを「今後、彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範」とされようとしたからです。パウロは、自分をキリストのあわれみの見本と自覚していました。

安らかな一生のために祈ること（第 1 テモテ 2:1-7）

パウロもテモテも、そして名前の知られない多くのクリスチャンたちも、それぞれの時代に信仰をもって生きていました。その時代特有の困難や闘いがありました。しかしパウロは「すべての人のために、王たちと、上に立つ重い責任のあるすべての人たちのために祈りと感謝を捧げるように」勧めています。それはわたしたちが安らかで静かな落ち着いた一生を信仰深く、謹厳に過ごすためです。

教会においての男女（第 1 テモテ 2:8-15）

パウロは、礼拝における男と女のあり方について語っています。まず男性に対しては「きよい手をあげて祈ってほしい」と勧めています。次に、教会における女性の望ましい姿を勧めています。それは、「つつましい身なり」で、良いわざを持って、神の前に出ることです。また、

「おしゃべりを慎みなさい」ということです。パウロが、これらのことを命令したのは、男性は祈りの戦士として、女性は従順な働き手として期待したからです。

監督・すばらしい役目にふさわしく(第 1 テモテ 3:1-7)

監督とは「管理する者」「見張る者」「見守る者」等の意味があり、年長者が当たることが多かったので「長老」とも呼ばれました。5 章には当時の長老が今の牧師のように「宣教と教えのため」仕えていたと記されています。ですから今で言えば教会に仕える牧師や各種の責任をもって奉仕している長老に該当するのだと思います。

執事・真理の柱（第 1 テモテ 3:8-16）

最初に登場する執事は使徒の働き 6 章です。執事の仕事は、監督のもとで牧会の実際的な働きの補助者役割を果たす重要な者でした。パウロが執事の資格を書いたのは、人々が教会を見る時、教会はキリスト教真理の証しの場であり、その真理を堅く守るべき所であるからです。

信者の模範（第 1 テモテ 4:1-16）

ある人々は結婚を禁止したり、食物を断つことを命令します。彼らは良心が麻痺していました。しかし、神様がお造りくださったものはみな良いものです。食べ物は神様が備えてくださった贈り物です。また、後半ではテモテの若さを言及し、人に軽んじられてはならない。むしろ、言葉にも、行状にも、愛にも、信仰にも、純潔にも、信者の模範になりなさい」など、いくつかの勧めを書きました。

家族のように（第 1 テモテ 5:1-16）

教会には幅広い年齢層の人々が集っています。パウロはテモテに、次のように指導しています。目上の人々には父母に対するように、若い人々には兄弟姉妹に対するように、愛を持ってみことばの教えに基づいて勧め、常に尊敬と純潔が伴うべきであることです。

長老について(第 1 テモテ 5:17-25)

パウロは長老について指導しています。職務をよく果たしている長老は、二倍の尊敬と充分な報酬を受けるにふさわしい人としなければなりません。特に宣教と教えに忠実に労している者にはそうしなければなりません。長老に対する裁判を要求する告発は、ふたりか三人の証人

によって確証されない限り受け付けてはなりません。罪を犯し続けている場合には皆の前で訓戒を与えなさい。他の者達が戒めを受けて有益な畏れを抱くためです。

偽教師の特徴(第 1 テモテ 6:1-10)

ここでは、奴隷で救われた人に、愛と尊敬をもって行動するように勧めています。また、偽教師の問題も取り上げています。彼らは、聖書に教えられていることと違ったことを教え、キリストの健全な言葉の教えに同意しない人々です。彼らは、信仰がいかに利得をもたらすかということに関心がありました。結局、信仰を手段とする御利益の群れに過ぎません。

信仰の善戦(第 1 テモテ 6:11-21)

信仰生活の途上にはいろいろな誘惑と罪が待ち受けています。テモテへの注意と勧めは私たちにも大切です。悔い改めと信仰によって与えられた永遠のいのちにふさわしく歩み、最後まで信仰を全うするために、信仰の戦いを立派に戦いぬくことは大切です。

聖徒の健全さ（第 2 テモテへの手紙）

この書簡は、パウロが「わたしの鎖を恥とも思わないで」と言っているように獄中で書いたものです。それもパウロが死を目前にしてテモテに送った手紙で遺言書です。テモテには小心な所があったようです。ですから、最後にパウロは、テモテに神様が与えてくださった賜物を思い起こさせ、励ましています。その神様からの賜物は力と愛と慎みとの霊です。力の霊とは、生まれつき臆病な人をも、困難に大胆に直面させる力です。愛の霊とは、全てのクリスチャンに必要なものですが、特に牧会者に必要なものです。慎みの霊とは、自制心、節制のことです。ある人は、これを「聖徒の健全さ」と言っています。

福音のために（第 2 テモテ 1:8-14）

パウロは「神の力に支えられて、福音のために、私と苦しみを共にしてほしい」と願い、福音の尊さを語ります。福音は、イエスの出現によって、明らかにされた尊い恵みです。信じる者に罪の赦しと勝利に与る恵みであることを明記させ、委ねられている尊い福音の真理を聖霊によって守るようにと念を押しています。

真実なしもべ（第 2 テモテ 1:13-18）

ここでパウロは、牧会の実例をあげています。ローマでのパウロの二度目の入獄は、以前と違って厳しいものでした。よってパウロの友人であることが自分の身を危険にさらすことになります。エペソ教会の幾人かは、自分の身の安全を計ってパウロを見捨てました。その中には、特に親しい間柄であったフゲロとヘルモゲネもいました。一方、パウロを励まし元気づけた人々も数多くいました。その中でもオネシポロは特筆すべき信徒です。自分の危険を顧みず、たびたび獄中のパウロを尋ね、彼を助けました。そこでパウロは、こうした真実な僕のいることをテモテに思い出させて、励ましています。

恵みによる強さ（第 2 テモテ 2:1-13）

パウロは「神の力にささえられて、福音のために私と苦しみを共にしてほしい」と語り、ここで再び「キリストの良い兵卒として、私と苦しみを共にしてほしい」と語っています。命の限り、もっと多くの人々に福音を伝えたかったパウロは今、若いテモテに福音のための労苦を願い、テモテが受けたバトンを忠実な人々に手渡し、神様の働きが拡大し続けるよう願っています。司令官を喜ばせようと務める兵士、規定に従う競技者、労苦を惜しまない農夫に例えられた姿はパウロ自身が努力してきたことでした。

ゆるがない土台（第 2 テモテ 2:14-26）

言葉の争いをしないように命じることを勧めています。言葉の争いは、お互いに何の益もなく、そればかりか聞いている人々を混乱と破滅に陥れます。また俗悪なむだ話、真理からはずれた教えを語る人々に注意することも勧めます。それは、人々を不信心に陥れ、癌のように腐れ広がるからです。テモテに「真理の言葉を正しく教え、恥じるところのない錬達した働き人となって神に自分をささげるように努めはげみなさい」と命じています

苦難の時代（第 2 テモテ 3:1-9）

終わりの時代に現れる人々の様子が記されています。終わりの時、大きな悩み、耐え難い危険な時代がきます。その時の人間の姿が 19 挙げられ、そのような人々を避けるようにと勧めています。彼らは敬虔な様子をしていても、その行いは自らの告白とは正反対の人々です。

救いに至る知恵（第 2 テモテ 3:10-17）

パウロはテモテに向かって、彼がパウロの教え、歩みによくついてきてくれたことを賞賛しています。そして、自分の体験から「キリスト・イエスにあって信心深く生きようとする者は、みな、迫害を受ける」と書きます。この世が神様に背を向けている限り、この真理はいつの時代も変わりません。ですから、パウロはテモテに、自分が教えかつ両親より学んだ正統的な聖書の教えに留まるように勧めたのです。それは聖書が「キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る知恵を与えうる書物」だからです。

義の冠の望み（第 2 テモテ 4:1-15）

ローマの獄中でパウロは生涯の最後を目前にしていました。しかし、彼は目の前の嵐に心を奪われることなく、やがて現れる神の国を望み見ていました。ですから、神様のみ前に揺るがせにできないことが何かを常に心に刻み、彼自身そのように生きて来たように、今、テモテに「御言を宣べ伝えなさい。」と命じています。そして、パウロは生涯を顧みて「信仰の戦いをりっぱに戦いぬき、走るべき行程を走りつくし、信仰を守りとおした」と言うことができました。テモテに急いで早くきてほしいと願ったのは、最後の訓戒を与えたかったとも言われます。

最後の言葉（第 2 テモテ 4:16-22）

パウロは、当時の最大の都市であるローマの法廷に、一人で立ち、そこを宣教の場として用いたのです。「主はわたしを助け、力づけてくださった」と記し、御国の栄光を望み御名を崇めています。最後に信仰の友人たちに挨拶を送ると同時に、テモテには「冬になる前に急いで来てほしい」と願っています。上着の件だけでなく、パウロの最後の裁判が近づいていたからです。テモテは、入獄中のパウロから自筆の手紙を受け取り、どんなに胸に迫ったことでしょう。「主があなたの霊と共にいますように」という、主の御臨在を願う祈りが、パウロの手紙の最後の言葉でした。

テトスへの勧め（テトス 1:1-9）

クレテの教会は、聖書が教える健全さを失いつつあったので、パウロはテトスを通してその再建にあたるようにしました。しかし、長老たちを選任することに苦労したようです。なぜならクレテの人々は、「クレテ人は嘘つきで、たちが悪く、怠け者で食いしん坊、と言う非難はあたっている」と言われたからです。ですから、選任される長老たちは、特に家庭生活、個人生活において、責められたり非難されたりすることがなく、また聖書に対しては真実な者でなければならないと、勧めています。

クレテの反対者(テトス 1-10-16)

クレテ教会の現状が具体的に記されていきます。パウロは、ここで教会を荒らす反対者の特徴を 3 つの言葉で示しています。第一は、「法に服さない者」、即ち、教会の定めを、無視している人々です。第二は、「空論に走る者」であって、ただおしゃべりをしている人々です。第三は、自分自身が迷っている人々であって、従って、「人の心を惑わす者」です。パウロは、こういう人々に対して、健全な教えを正しく説くことで、彼らの口を封じるようにテトスに命じました。

信仰と生活の調和(テトス 2:1-10)

クレテの人々の多くは非倫理的な生活を送っていたようです。パウロはこのことを考えながら、テトスに向かって健全な教えを説くことを勧めています。それは、信仰が生活の中で現されなければならないということです。それで、年老いた人々について、若者について、奴隷について、彼らに何を勧め、どのようにふるまうべきかを勧めています。そして、これらの人々に対して彼ら自身の生活と態度と、なすべきことに忠実であるように勧めています。この書簡は、健全である良いわざの重要性が強調されています。２章にも「良いこと」「善良」「良いわざ」などの言葉が書いてありますが、私たちは良いわざによって救われたのではありませんが、良いわざをするために救われたのは確かです。

救主なる神(テトス２:11-3:6)

イエスのご生涯についてヘブル書 4:15 では、「私たちの弱さを思いやることのできないような方ではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、私たちと同じように試練に会われたのである。」と書いてあります。このイエスが「救主なる神」（3:4）と記されています。イエスは人としてこの地上に生きてくださいましたが、同時に神でおられました。私たちは、この言葉からよく知ることができます。

良いわざについて(テトス 3:6-15)

８節の「この言葉は確実である」とは、前述を指すもので、人が根本的に新たにされるのは、キリストを信じ、聖霊を注がれたことによるということです。しかもキリストは、信じる者を良いわざに熱心な者とする方です。ですからパウロは、テトスがこれらのことを主張するように望み、クリスチャンに「努めて良いわざを励むことを心がけるよう」に勧めました。ルターは、信仰と良きわざについて、ローマ書講解序文で「わざを信仰から区別することは、燃えることや輝くことが火から区別されることの不可能なように、不可能だ」と記しています。

26 愛の私信(ピレモン書)

本書はパウロがコロサイの教会のピレモンという人に宛てた個人的な書簡です。パウロの愛と交渉能力が目立つこの書簡は、まるで感動的なドラマのように展開されます。その主人公の一人がオネシモという人です。彼はピレモンの奴隷で、主人の財産を盗んでローマまで逃走しました。このオネシモが獄中でパウロを通して回心しました。その結果、パウロの忠実な愛する兄弟（コロサイ4:9）となり、その名前の意味のように「役に立つ者」となったので、パウロは自らのもとにとどめておきたかったですが、主人ピレモンの同意を得ていなかったので、ピレモンのところに送り返すことにしました。そのオネシモに託したのがピレモンへの手紙で、パウロは、ピレモンにオネシモを「奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟として」受け入れてくれるよう願っています。

自発的に(ピレモン 1:1-14)

ピレモンは家の教会として、家庭を解放していたようです。パウロはピレモンの指導者で霊的実際的に多くの糧を与えてきました。ですから「きわめて率直に指示してもよいと思うが、むしろ愛のゆえにお願いする」と言い、「捕われの身で産んだわたしの子供オネシモ」についてお願いしています。オネシモは、獄に軟禁されていたパウロに出会い、導かれて悔い改め、信仰の歩みを始めました。パウロはオネシモを主人のもとに送り返す必要を感じていました。主にある兄弟として彼を受け入れてほしかったからです。パウロは彼を「有益な者」と執り成し、ピレモンには良い行いを「強制されて」でなく「自発的に」と願っています。

負債を負う愛(ピレモン 1:15-25)

この手紙はパウロの「愛の私信」とも言われ、パウロのオネシモに対する愛が如実に示されている手紙です。そして、イエス様が私たちの身代わりとして十字架上に私たちの罪の贖いをしてくださったことをありありと思い出させる手紙です。特にパウロの 18、19 節の「もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済する」という所は、イエス様が私たちのためにとりなしていてくださる祈りそのものです。「手ずからしるす」とは、要求された賠償額を返すと約束した誓約書のことで、パウロがいかに真剣にオネシモのためにピレモンに嘆願しているかがわかります。

奴隷制度についての聖書的理解

福音の性格が捕らわれ人に放免を告げ、縛られている者に解放を告げる(イザヤ61:1)ものなので、その福音を宣べ伝えていたパウロにとって、奴隷制度は悪の制度そのものだと考え、ローマ帝国内で当然のように行われていた奴隷制度について、反旗を翻したと思われます。しかし、パウロは違った考えを持っていました。奴隷制度そのものに対する言及はなく、「主人たる者よ、僕を正しく公平に扱いなさい」(コロサイ4:1)、そう言うにとどまりました。それは、福音を通して来るべき神の国は完全で、完成されたところで、この世は何を目指し、改革を重ねても完全なものにはならないことが明らかにされたからです。クリスチャンはある意味完全でないこの世で住んでいますが、完全な神の国に属する者であり、それを所有した者であることへの自覚をもっている人々です。ですから、クリスチャンは時には正義に反することもある社会秩序であっても、その改革より優先すべきこととして神の国を所有した者として生きることが求められます。

クリスチャンがいかに生きるべきかという問題は、もっと大局的に述べるならば、何故にこの世に悪が存在しているかという問題にも通じます。どうして奴隷制度という悪を許したもうたかという問題について、クリスチャンとして行動するにあたって、２つのアプローチが考えられます。ひとつは、主はその悪い制度の改革をクリスチャンに求めていると考えることと、もうひとつは、神への信仰と従順を学ばせる機会として、悪い制度であっても神の国に属する者としての品性を養う、つまり、そのような状況をむしろ積極的に用いると考えることです。信仰による忍耐と従順、そして愛を身につけることはいつの時代であれ有益なことです。私たちは前者に魅力を感じます。しかし、共産主義の成立から崩壊の歴史や最近のイラク戦争などで複雑な気持ちにもなります。

この書簡の福音的な要素の理解（M.C.Tenny）

この書簡は、赦しに関する全ての要素が説明されています。

1) 罪を犯す(11､18 節)
2) 哀れむ(10 節)
3) 執り成し(10､18､19 節)
4) 罪の転嫁(18､19 節)
5) 回復に対する希望(15 節)
6) 新しい関係を期待する(20､21 節)

27 更に優れた方(ヘブル書)

ヘブル書の主題を簡略すると、「すべてに優れたイエス」です。イエスの十字架刑のつまずき、迫害の恐怖、再臨の遅延感など、信仰的失望や背教の危険性に直面していたヘレニズム世界のキリスト者と、旧約聖書の儀式や慣習を厳格に守ることで救いの確信を得ようとしたユダヤ人キリスト者に、イエス･キリストはすべてに優れた方であり、イエス・キリストを信じる信仰こそ完全な救いであることを教えています。本書は大きく、イエス・キリストの人格の優越性(1:1-4:13)、イエス・キリストの祭司職の優越性(4:14-10:18)、イエス・キリストにある生活の優越性(10:19-13:25)で分けられます。

すべてに優れたイエス(ヘブル書1、2章)

イエス･キリストは神の御子で、世界を造り、万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げるために自ら低くし、天使よりもしばらくの間、低いものとされましたが、神は御子をご自身の右の座に着かれ、栄光と誉れの冠をお与えになりました。主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることができる方です。

優れた建築士(ヘブル書3:1-4:13)

イエスはいくつかの点でモーセと似ています。神様が彼を立てたこと、その地位と職務を定められたこと、彼が忠実であったこと、彼の働きは神の家全体に及んだことなどです。一方イエスは、モーセよりもより多くの栄誉を受けるにふさわしい方です。モーセ自身は彼が仕えている神の家の一部でしたが、イエスは家を建てる者、神ご自身でした。また、モーセが民を約束の地へ導きましたが、それは神の安息のひな型であって、イエスは信じる人々を神の永遠の安息へ導かれる方です。

優れた大祭司(ヘブル書4:14-10:31)

イエスはすべて信じる者のための偉大な大祭司です。大祭司は神様に関する事柄を人々に代って行うよう、アロンの家系から選ばれ任命されました。彼らは民のためだけでなく、自分のためにも、罪のために、ささげものといけにえとをささげました。一方イエスは、天にあるものの写しと影とに仕えている大祭司ではなくて、主が設けられた真実の幕屋である聖所で仕えておられます。イエスはメルキゼデクの位に等

しい大祭司で、自分のために、民のために、その罪のために毎日いけにえをささげる必要はありません。というのは、イエスは自分自身をささげ、ただ一度でこのことを成し遂げられたからです。ですから、私たちはイエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができる者です。ヘブル書の記者は、私たちが心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われた者なので、全き信仰をもって、真心から神に近づく者らしく、どんな境遇でも動揺せずに、しっかりと希望を告白し、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合い、励まし合っていっしょに集まるようにと勧めています。

信仰の章(ヘブル11章)

ここでヘブル書の記者は、神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることとを、信じる信仰がなければならないと教えます。そして、信仰に生きた旧約聖書の人々について引用しています。これらの人々について思い巡らすことは、大切で有益です。信仰によって生きた人々については細かく語るなら時間も紙面も足りません。それで名前は明記されていませんが、多くの人々が信仰を全うしました。

クリスチャンの特権と責任(ヘブル書12、13章)

ヘブル人書12章の初めの部分は、この章全体の要約であり、このヘブル書全体の最も素晴らしい箇所だと言われています。1節には「わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか」と、クリスチャン生活を徒競走にたとえて記しています。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者は一部の人という厳しい現実があります。けれども神様は、信仰生活においては、「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ」（２節）走り抜いた選手に、すべて義の冠を授けてくださる(第2テモテ4:8)という約束を与えられました。しかも心強いことに、イエスが責任を持って終わりまで導いてくださるのです。ですから、耐え忍び(3-13節)、すべての人との平和を追い求め、また、聖められることを追い求め(14節)、前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けることを勧めています。

13 章では、兄弟愛をいつも持っていることと、旅人をもてなすこと、牢につながれている人々を思いやること、結婚を尊ぶこと、金銭を愛する生活をしてはいけないこと、霊的指導者を尊敬すること、さまざまの異なった教えによって迷わされないこと、キリストのために喜んで苦しみを受けること、賛美のいけにえをささげること、善を行なうこと、霊的指導者の言うことを聞き、また協力すること、祈ることなどを勧めています。